

美文韻文

黃菊白菊

文士大町桂月作



5

10

15

韻文
美文

黃菊
白菊

全

東京博文館藏版

美文韻文
黃菊白菊

大町桂月氏の文は、蠻貊を動かすも已に久し
悲愴の聲を發しては、秋風の老松に激するが
如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫
ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗
くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の
才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清く
し、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ
者の摸範となすに足る。讀書家の燈下、この
絶好可憐の冊子なるべからず

美文韻文

黃菊白菊

文士大町桂月作



美文韻文

黃菊白菊

全

東京博文館藏版

美文韻文
黃菊白菊

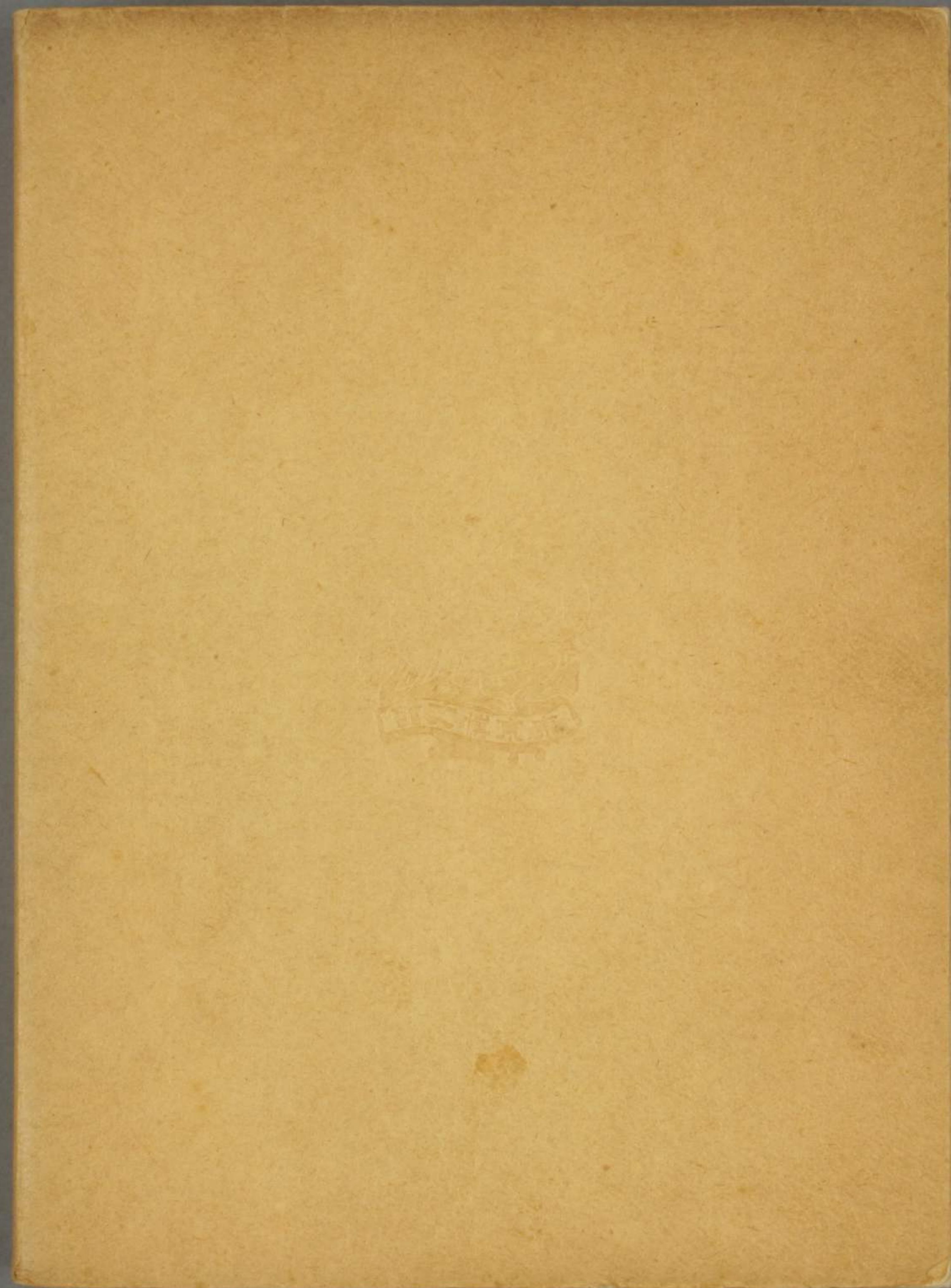
大町桂月氏の文は、變韻を動かすも已に久し
悲愴の聲を發しては、秋風の老松に激するが
如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽洞に叫
ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る。麗
くして沈痛、儼にして豪宕、洵に是れ一代の
才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清く
し、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ
者の模範となすに足る。讀書家の燈下、この
絶好可憐の冊子なるべからず

美文韻文

黃菊白菊









美文黃菊白菊
韻文

序

名山に藏するに足るべき名著にはあらねど、
むなしく蠹魚の餌とならむも、さすがに口惜
しくて、羽衣、雨江二子と共に、美文韻文をあつ
めて、花紅葉一部を梓に上し、は、已に二年の
むかしとなりぬ。爾來、われは筆を把ること虚
日なけれど、自から好める美文もしくは韻文
の作は、いと少なし。讀者またその何の故たる
を問ふこと莫れ、こゝに、花紅葉に洩れたるも
のと、そのうち新に作りたるものとを集めて、

(二) 黄菊白菊と名づけぬ。多くは已に冊子、もしくは雑誌に出でたるものなり。而して、この三四年の間、余がものしたる美文韻文は、花紅葉と黄菊白菊とに盡く。國家の盛衰と死との二篇は、やゝ美文の範圍を脱せるが如くなれども、もとたゞ感情を攄べたるものにて、理を説きたるものにあらねば、美文としてこゝに收めたるなり。

明治三十一年十月

桂 月 漁 郎

黄菊白菊目次

(一) 目次

照る日の光	一
鐵槌	四
月譜	二五
波の花	三二
加藤清正の告別	四七
佛濱の月夜	五三
夢野の鹿	六九
地藏堂	七九
わが涙	八七
畫ける美人	八九

胡蝶……………九四

御嶽めぐり……………九八

山の影……………一一八

いさゝ川……………一一九

花ざくら……………一二〇

やつれし姿……………一二一

猿塚……………一二七

松杉問答……………一四八

睢陽城……………一五一

女ごゝろ……………一六九

柳の糸……………一七一

かたみの言葉……………一七二

國家の盛衰……………一七八

をとめ子……………一九一

涙の味……………一九四

かゝ袖……………一九五

今日限りの命……………二四一

春の夕暮……………二四六

死……………二四八

寶車……………二六〇

淺間山のひと夜……………二七二

海嘯……………二八八

春駒……………二九六

雨奇録……………二九八

今宵の情……………三〇九

小春日和……………三一〇

旗手……………三六五

南朝の名花……………三七一

風流鴨……………三八二

黄菊白菊

照る日の光

大町桂月作

てる日の光 さきだてい、
 あさはみ空に さけぶらく、

眠をさせ 朝風に。
 起さよ、浮世の いとなみに。
 昨日は水と 逝きにけり。



たのめ来らむ
後世を
浮世はかりの
かさやどり

神はしづか
病の床に

泣くなすぎにし
そのむくろ
いとづれて
罪どがに

たのめ来らむ
この春を
こずは空しき
夢のあと
世にのびいでよ
いさましく
芽ざす草木と
もろどもに

春はみ空に
霞をよみに

たのめ来らむ
今日の日を
くばらせて
今日の日を
聲すらく

鐵 槌

ひど夏ふりつゝいさし雨ふしぎにも小止みしたれどなほ泣
 くが如く曇れる大空のわづかばかりなる隙間をもとめて
 洩れくる旭日のひかりおぼつかなげに金雞山の一角を射
 て、妙義山のこなたは狭霧なほふかく立ちこめたる曉しづ
 かに、金雞左に高く天をつらぬき、妙義右に北斗を支ふる間
 の名も中の岳とて鼎立の勢いさましく雲をとびらに代へ
 たる四個の石門ふかく浮世をへだてたる處なれどもなほ
 民のなげきを分てるにや削り成せる巉壁の下にやせて見
 る影もなく戀する少女の涙よりも清き露の白玉ひどきは
 滋くおきわたせる山百合の花ふみわけて石門を出づる一

人の男の大模様染めいだせる單衣一枚の姿もかるやかに
 襟元くつろげて胸毛こゝろよく朝風にゆらぐさま見るか
 ら逞しく頬は赤く眼は鋭く一癖あるべき面魂のたいなら
 ぬに博浪沙の昔のしのぼるゝ大なる鐵槌ひとつ腰につけ
 たるも怪しや。

第一の石門より村に出づるには險しき處なくたゞ足先仰
 くばかりの凸凹につれてうねくゞと熊笹の繁れる中を蛇
 行する一條の細徑一里餘り歩みてはや妙義山のふもとに
 來れば眼界とみにひらけて手に取る如く見ゆる脚下の村
 々、今はあさげの時なれど飢饉のかなしさは炊烟の上れる
 家どてはなく、鴉だに鳴かぬ山村の曉寂しく、月頃の陰雨に、

山、氣、刃、より、も、冷、かに、肌、にし、みて、時、は、夏、な、が、ら、漸、々、と、し、て、
 な、ほ、寒、く、高、根、より、お、ろ、す、風、に、稍、う、ち、ふ、る、ひ、て、は、ら、く、と、
 こ、ぼ、る、名、残、の、露、滋、く、し、て、浮、世、に、つ、ゆ、け、か、ら、ぬ、隈、も、な、し、
 田、の、面、に、は、穂、だ、に、結、ば、ぬ、稻、枯、れ、て、半、は、水、に、没、し、畑、に、植、ゑ、
 た、る、瓜、は、蔓、腐、り、て、根、な、が、ら、萎、め、り、路、の、か、た、へ、に、犬、の、いた、
 く、吠、ゆる、を、何、事、に、か、と、立、ち、よ、れ、ば、お、は、れ、や、餓、に、倒、れ、た、る、
 人、の、屍、骸、を、天、の、與、へ、と、よ、ろ、こ、び、勇、み、て、こ、れ、も、餓、に、死、な、ん、
 ど、す、る、瘦、犬、の、よ、り、て、た、か、り、て、牙、な、ら、し、て、噛、み、食、ふ、さ、ま、す、
 さ、ま、し、く、そ、の、中、に、力、す、ぐ、れ、たり、と、見、ゆる、大、犬、他、の、群、犬、を、
 お、し、の、け、て、わ、れ、獨、り、腹、を、肥、さ、む、と、す、る、勢、の、銳、き、に、辟、易、し、
 て、尾、を、ま、さ、な、が、ら、な、ほ、涎、を、流、し、て、近、寄、る、を、き、つ、と、睨、み、か、

へ、し、て、聲、高、く、呻、り、つ、こ、ろ、よ、げ、に、飽、食、す、る、さ、ま、の、に、く、
 ら、し、け、れ、ば、お、の、れ、ど、い、ひ、さ、ま、下、駄、は、き、た、る、ま、い、の、足、あ、げ、
 て、そ、の、横、腸、し、た、い、か、に、蹴、た、る、に、悲、鳴、の、聲、長、く、尾、と、共、に、曳、
 き、て、二、三、間、に、げ、の、び、け、る、が、ま、た、ふ、り、む、き、て、牙、を、む、き、だ、し、
 脊、中、の、毛、を、さ、か、だ、て、飛、び、か、ら、む、と、す、る、餘、勇、は、示、せ、ど、
 さ、す、が、に、敵、手、の、強、過、ぎ、る、を、悟、り、て、し、ば、し、思、案、の、末、俄、か、に、
 横、腹、の、痛、さ、を、思、ひ、出、し、た、る、が、如、く、ま、た、も、悲、鳴、の、聲、を、あ、げ、
 て、殘、り、を、し、げ、な、る、一、瞥、を、屍、骸、の、上、に、送、り、た、る、ま、い、悄、々、と、
 し、て、に、げ、ゆ、く、あ、ど、よ、り、側、杖、く、は、ぬ、う、ち、に、と、言、ひ、あ、は、し、た、
 る、が、如、く、罪、な、き、他、の、犬、ま、で、も、う、ち、つ、れ、て、走、り、去、る、を、冷、か、
 に、見、送、り、つ、い、巨、巖、の、ゆ、る、ぎ、出、し、た、る、が、如、き、足、元、た、し、か、に、

のそりくくと歩む行手に、五六人の小供、よろ／＼と這ひ出で、その旦那さまどうぞお慈悲に、難義の者へ一文めぐんでやつて下さりませと、貧が教へたる物乞ひの言葉しほらしく、餓に聲まで瘦せほそりたるも、大飢饉のあまりと、そゝろに涙を催し、財布より烏目とり出して、それ／＼小供に分ち與へ、その喜べる顔を見て、小供衆、少し頼みがある。家へ還つて、親ぢなり、兄なりに、用事があるから、こゝへ來いと云うて呉れよ。頼んだぞと、聲やさしく言へば、さすがに餓ゑても、小供は小供だけに、威勢よく、一人が駈け出せば、他のものもついでに、駈け出すはづみに、一人の小供、つまづきて倒れて、わつと泣き出す男、走りよりて抱き起せば、その顔を見て、身

をふるはして泣く。かれの顔はな、こはさうに見えても、何も取つてくはうとは、云はぬ泣くな、男の兒だ、すかす手元より、抜け出で、他に遅れじと、又もかけ出しぬ。水呑百姓の腰も軽く、鉢巻片手に、幾たびか頭をさげて、へい／＼さきほどは、小供のものへ大枚のお金下され、難有う存じます。へい／＼ことしの大飢饉には、よわりはてました。わたくしの所では、幸にみな生きて居ります。が、となりの隠居どのは、くたばつてしまひ、そのまたとなりでは、くふに食ひかねて、夫婦別かれをして、やつと乳離れをしたばかりの男の子が、毎日泣いて居るといふやふな始末で、この界限はどこも目があてられず、それにお上からのお施しといふ

ものは、ひとつもなく、われらは何時うゑて死ぬるやら、まこと心細うござりますると、うゑても、のんきな癖はうせず、長たらしく饒舌りつゝくる處へ、一人來り二人來り、つゝいてまた四五人、さきの小供の親たちの外に、何事の起りしかども、ものすきに出かけしものありて、集れるもの都合十五六人に及べり。

恨を帯びたる目元に、一揆の旗おげかねまじき様子は見ゆれど、餓にやせほそりし腕には、もはや竹槍提ぐる力もなく、骨と皮とのみなるからだに、衣とは名ばかりなるぼろをまとい、藍よりも青き顔つもれる垢に古色を帯びて、さながら木像の如く、喉はやせて張子の虎の頸よりも細く、亂髪に大

さを加へたる頭を支ふるも、おぼつかかなげあるに、この世がらなる餓鬼道の苦みを見る心地のみせられて、慰めむとする聲も自ら沈み、これはみな衆御苦勞に存ずる。就ては拙者の所存、ひと通りお聞き下され。拙者もどより此地に縁もゆかりもござらねど、この夏以來の長雨に、日の目一度も拜むだことなく、稻も麥も野菜もくさりはて、こゝもかしこも飢饉と聞くが中に、わけて妙義山下一帯の土地は、目もあてられずとの噂にたがはず、まことに何とも申様のなき有様、これまでの御難義、重々御察し申す。さりながら、狭いやうでも、廣きは世の中、一方には金錢つき、食物つきて、餓死する人があつても、一方には、米を山ほど倉に積むて、小判のもち

ぐさりする人もあり。運は廻りもの、融通はどうにもつかう
 ほどに、浮世はまだ失望したものでござらぬ。拙者はから
 ず、茲へまいりましたからは、及ばずながら一肩入れてみま
 せう。さるにても憎きは、浮世の有福長者にこゝと笑ふ中
 にも、金の勘定、腹には絶えず、欲より凝りかたまつた躰に、血
 といふものはなく、目尻さげて、涎たらすことは、われど、涙を
 こぼしたるため、なく、人情は、お人よしのもつもの、義理は
 馬鹿正直者のすること、人を倒しても、おれの利徳をはか
 るが、當世とすましこみて、恥も知らねば、道理もわからず、ど
 りけだものに劣りたる根性も、平生ならば、大目に見てやれ
 ど、この大饑饉に、餓死する人を、よそに見てとりあはず、おの

れひとり、旨い物くうて、人らしい顔して居るのが、氣にくは
 ぬ。學者、お師匠さまなどが、やれ仁義だの、子のたまはくだの
 と、口を酸くして説いた處で、汚れた人の耳には、蚊がひとつ
 ぶんどいふほどのきゝめも見えず、ふる板にくぎはさかず、
 腐れた世の中には、荒療治も時にどつての方便、これから出
 かけて、あら膽ひしいでやらう。さりとて、亂暴するわけでは
 ない。道理をとき聞かして、應分の金銭米穀をださせるまで
 のこと、もし口で説いて、まだわからねば、その時は、腰の鐵槌
 で、説きつけるまづ、このあたりにて、金もち物もちと聞えた
 るは、誰々にか、教へてくだされと云へば、第一に、みつくりと
 は、片輪をそのまゝのあさな、本名重左衛門と申しては、知ら

ぬ人もなき物もち、田が千町、山が五百町、米倉が三つ、金倉が二つ、その上に金貸しで、欲張りで、意地わるで、そのため、われらは飢饉でなくとも、常に難義して居りますと、衆口一齊にまづ金貸の名をわくるも可笑し。その次は久兵衛、その次は権八郎、またその次は木村長右衛門、これはこの名主、先祖よりの由緒ふるきは、門の大榎にも、それと知れて、金はくさるほどあります。さてまた町人では、近藤屋、桔梗屋、酒屋の善太郎など、一々告ぐるを聞きて、もうわかりました。金は天下の通用物、はて盗むといふではなし。説いて寄附させるに何も暗い處はござらぬ。どりやこの長い日の睡氣、まじにひと働きやつて、なつ下りまでには歸つてくる。そ

して寄附させたものは、齊しくわけうほどに、それまでに、この近郷にて饑饉になやむ人達が集つてくるやうに、手分けして吹聴しては下さらぬか、頼みますと、飽くまでもたかぶらぬ言葉に心の誠も見えて、世にたのもしう聞ゆるに、一同感涙を流して雀躍し、おかげ様でわれらの命がたすかります。ありがたや、かたじけなや、吹聴に手抜かりはいたしません。どうぞよろしう願ひますとて、村人どもはしばし語りあひしが、やがて五六人、男の前にいで來り、吹聴するには大勢の人もいりませぬば、われらは御案内仕りますとて、さきに立ちてゆくに、男さらばと一禮していでたちぬ。その後影伏し拜みつゝ、ひとまづ家へとて、歸りゆく中にも

尤も年よりたる源右衛門、こゝし六十七歳、頭は禿げても元氣は若者にゆづらず、嫁のやうな鼻もつて、去年女の子を生むだといふ評判男、さすがに老の涙もろく、生き神様といはうか、生き佛といはうか、おろかなんだか夢のやうな心地がして、うれしうて、かなしうなつて來たと、玄あくりあげて泣き出せば、これが世にいふ棄つる神あれば、拾ふ神様、われらの運がむいてきた、こんな目出度い時に涙は不吉、さてひとつ相談だが、ふれて廻はるに、太鼓でもたゝいてゆく方が、便利で、にぎやかで、おまけに面白い。さいはひ村の虫送りの大鼓が、貴様の處に預けてある筈、それを持ちだして貰はうではないか。いや、大鼓はあるにはあるが、雨がもつて、皮が

び玄よぬれに濡れて、たゝいた處が、蛇が呻るほどの音もでまい。それよりは、席を物干竿のはしにつけたら、どうだ。それはよくあるやつだが、何しろ、この瘦腕に、席では重過ぎる。あれ、おそこの物干竿にかけてある赤い巾は、お内儀のゆもじか、そのそばの白いのが、貴様の犢鼻褌、そこで源平かけもちの旗とは、何と面白い洒落ではないか、それもよからうと、おるじが許す聲の下より、いま、では何をしておりしやら、帯紐も結ばぬ衣を手にて、おさへ脛もあらはに、駈け出す女房。日頃は、饑に青くなりしお多福面も、いざとなれば、紅褌よりも赤く、それだけは、御免とさしだす手を抑へ、旗にされたら、お内儀までも、名譽といふもの、何の虱が五六匹居た處が、お

互〇ひ〇同〇然〇耻〇では〇ど〇ら〇ぬ〇な〇に〇ほ〇した〇ばかり〇で〇まだ〇洗〇は〇ぬ
 ど〇な〇それ〇でも〇か〇ま〇は〇ぬ〇見〇れば〇黄〇い〇や〇う〇な〇ま〇み〇が〇つ〇いて〇居
 て〇處〇々〇穴〇が〇あ〇いて〇居〇て〇あ〇ま〇り〇惜〇しい〇代〇物〇で〇あ〇る〇ま〇い〇か
 ま〇う〇こ〇と〇は〇な〇い〇暫〇時〇借〇用〇す〇る〇そ〇の〇代〇り〇に〇紅〇絹〇の〇巾〇を〇買〇う
 て〇返〇す〇と〇う〇れ〇し〇さ〇の〇あ〇ま〇り〇ま〇や〇う〇だ〇ん〇た〇ら〇く〇幾〇んど〇氣
 違〇ひ〇の〇や〇う〇に〇狂〇ひ〇躍〇る〇や〇ら〇は〇ね〇る〇や〇ら〇ど〇や〇く〇と〇騒〇きて
 繰〇り〇出〇せ〇り〇
 紅〇白〇の〇旗〇は〇村〇よ〇り〇村〇に〇ど〇び〇ぬ〇施〇し〇が〇あ〇る〇と〇い〇ふ〇聲〇は〇耳〇よ
 り〇耳〇に〇つ〇た〇は〇り〇ぬ〇饑〇饑〇に〇よ〇わり〇は〇て〇し〇村〇々〇も〇俄〇に〇生〇氣〇づ
 き〇ぬ〇太〇郎〇も〇こ〇い〇次〇郎〇も〇來〇い〇れ〇施〇し〇に〇あ〇づ〇か〇つ〇て〇つ〇いで〇に
 生〇神〇様〇の〇お〇顔〇も〇拜〇んで〇來〇いと〇呼〇び〇つ〇れて〇く〇り〇だ〇す〇男〇女〇ひ

き〇も〇き〇ら〇ず〇夕〇日〇金〇雞〇山〇の〇頂〇に〇春〇く〇頃〇に〇は〇妙〇義〇山〇の〇麓〇は〇さ
 な〇が〇ら〇人〇の〇山〇を〇き〇づ〇き〇ぬ〇
 今〇か〇く〇と〇待〇つ〇ほ〇ど〇に〇歸〇り〇く〇る〇一〇隊〇は〇や〇鎮〇守〇の〇森〇の〇か〇な
 た〇に〇見〇え〇そ〇め〇ぬ〇雪〇の〇上〇を〇こ〇ろ〇が〇す〇小〇石〇の〇見〇る〇く〇大〇く〇な
 る〇が〇如〇く〇さ〇さ〇の〇五〇六〇人〇の〇案〇内〇者〇に〇招〇か〇ず〇し〇て〇加〇は〇れる〇村
 人〇か〇び〇た〇い〇しく〇車〇に〇つ〇み〇馬〇に〇の〇せ〇長〇者〇の〇家〇來〇に〇ま〇よ〇は〇せ
 た〇る〇金〇錢〇米〇穀〇さ〇て〇は〇酒〇樽〇疊〇々〇と〇し〇て〇相〇連〇り〇て〇小〇山〇の〇ゆ〇る
 ぞ〇い〇だ〇せ〇る〇こ〇と〇く〇む〇か〇し〇は〇八〇十〇舟〇の〇楫〇ほ〇さ〇ず〇も〇て〇來〇し〇三
 韓〇の〇貢〇物〇も〇こ〇れ〇に〇は〇過〇ぎ〇じ〇と〇見〇ゆる〇ば〇か〇り〇な〇り〇
 山〇も〇く〇づ〇る〇ば〇か〇り〇涌〇きた〇つ〇歡〇呼〇の〇聲〇に〇迎〇へ〇ら〇れ〇て〇ま〇づ
 かに〇村〇々〇の〇お〇も〇だ〇ち〇た〇る〇人〇々〇を〇よ〇び〇よ〇せ〇饑〇饑〇の〇さ〇ま〇見〇る

に見かねて、有徳の家々を説いて廻つて、この通り寄附させ
 たる次第、ひと通り御話し申します。この村の重左衛門と
 のとやら、高利をむさぼりてよくない人ど、まづ第一に出掛
 けて説いて見たが、中々の口上手、うまく言ひぬけて、鏝一文
 も出す氣はなく、一筋縄ではゆかぬやつと見て取り、躍りか
 いて、胸倉とつて、たいみに押しつけ、腰なる鐵槌どりあげ
 て、命がをしいか、金が惜しいか、命をしければ金を出せと、威
 せば、金は御望み次第出します、一命だけは助けてと、虫のや
 うなる聲だして、あやまるも可笑しく、思ふ存分、金をださせ
 て、次に久兵衛どの、家に出掛けて見れば、戸をしめ、門をと
 ちて、前以ての用心、小憎らしく、鐵槌のつかひ所はこゝなり

ど、一息に門の扉をうちくだき、饑饉のために、肥倉の金を所
 望にまゐつた。故障があらば申しいでられよと云へど、どう
 の音もださず、さらば御免と、倉の戸をくだけば、小判の中に
 潜みし主人、こはぐに這ひいで、どう半分だけは残し
 て下されど、泣音を出すに、氣の毒になりて、半分で許してや
 り、それから名主どの、處へゆけば、劍客をよびよせて、刃物
 をもつての手向ひ、小癩なりと、みなたゝきつけて、倉のもの
 さらげだし、なほ説いて廻はる中に、氣のきゝたるは、かなは
 ぬと悟りて、自ら金錢米穀をもちだして待つに、少し取りて
 許してやり、あさはかなるは、御馳走ならべ、綺麗な女に酌さ
 せて、言葉巧にかこち、ぬかすに、腹が立ち、多く取り、あ

有様はたい神代のむかし天照大神の天の岩戸を出でたま
 けて鯨飲するもあきて喜びいさみ躍りくみくたきて口つ
 米よりもたれはまづ天の美祿と樽のかいみくたきて口つ
 るあまりに米をなまのまゝのみこむもありた金よりもた
 懐どに一杯入れてなほ欲張りて兩手に握るもあり餓えた
 それく手配りしてわかち與へければ小判を兩方の袂と
 ださわく等分して恨みつこのないやうに取つたくと
 來たと思ふと大きな間違これはいふは全くと天道様がくたさるの
 その人民にかへすに何も不思議はあまい拙者がもつて
 還るを好むとやら人民の膏血を絞つて取つたものをまた
 りとある金持ちに寄附させて取つて來たこの品々天道は

ひし時八百萬の神たちのゑらぎ笑ひしもかくかと思はる
 男このさまを見て腹をよりにて笑ひ出しこれに拙者の氣も
 すんだ世の中には法度どかかきとかいふ小むつかしい
 ものがあつてうかしくして居れば安中の城あたりから捕
 手がむかうて來うもどより惜しい命ではなけれどまだ浮
 世にすゝるこどが澤山あればこのからだは小役人などの手
 にはわたされぬたさらばといふより早く身を躍らして妙
 義山の奥にかけゆくに一同たゞ茫然としてさわぎし聲も
 俄にしづまり覺えず手を合してその後影を拜みぬ
 朝に得たる萬金夕に散じつくしてわが身に殘れるものと

鎮守のまつりのかへるさ丁字路上に他のみちつれど袂を
 かぎりぞや。明月中あらひ出されむは如何に心ゆくへき
 末に輪の明月あらひ出されむは如何に心ゆくへき
 ひはてし秋風を濱松の梢にのして長鯨潮を吹く浪路の
 浪の花しろく九十九灣縹渺として烟にくる夕雲をはら
 ゝる海南絶勝の地の危礁乱立する濱邊にやりては砕くる
 どなればまどはそこの桂濱の月見しどなけれど名た
 にて幼少の時より他郷に流寓して未だ郷にかへりたるこ
 月の名所は桂濱といへる郷里のうた唯記臆に存ずるのみ

月

譜

たる涼月の影さやかになり。くしぬ仰げば高き石門の上久しぶりの晴天に磨き出され
 然どして立ち去れば夕の白雲心わりのげにその跡を埋めつ
 てはもとの鐵槌ひどつ身をかはすこと飛鳥よりも軽く瓢



ねだれは月に白き豊胸露はし乳房ふくませていきうつし
 と覺はずつぶやきたる聲低く眼もはなたでみとれたる足
 元に竹影娑婆として孤月むなしく長風の上にすみてつれ
 なし。
 老櫻月を帯ひて霞の奥ふかき十二の欄干にりつくせる
 一人の少女の鬢のほつれ毛を春風になぶらせてはらはむ
 ともせず裂きたる玉章手にもちてくれなるの袖やさしき
 口にかみしめたるまゝ何を怨むか續々として欄干の上に
 墮す涙の月にかゝやきてさながら眞珠を散らすが如くな
 るによそめもいと消えたき思すべし。
 ひねもす清溪に釣する翁の家にあつ人もなければにや日

くるゝもなほ枯木の如く磯に腰かけて垂るゝ綸のはしに
 いつしか一痕の月かゝるよと見るほどにやがて手答へし
 ければひき上ぐる竿の彎々たるにかゝり來れる一尾の香
 魚の潑刺たるを捉へてかごに入れて今日はこれまでなり
 と鼻歌たかくうたひて歸りゆきしあと溪水舊に依りて空
 しく月を碎いて流るゝもいとすがすがし
 ひどりにほろき蚊帳の中白くほのみえてあふぐ團扇の
 音どもにもにえならぬ香洩れて椽には焚きさしの蚊遣火な
 ほいきて残れる夏の短夜にまたぬ月影はや松の枝にかた
 むきそめてさやけき光をねやの中まで送れるはいかなる
 浮世の外の情ぞや。

浪の花

淡路しまやま 秋ふけて

ちるや尾上の もみぢ葉を

ふみわけつ いも 妻戀ふる

鹿のなく音も あはれなり

八重の潮路を ふきすすさび

身にしみわたる 木枯しの

こずゑをはらふ 音すこく

はまの真砂も むせぶなり

さらでも荒き うな原の

すすぶ嵐に わきたちて

あられど亂れ 雪どちり

烟どなりて のぼりつゝ

よりにては返り かのりては

またも寄りくる わだつみの

波は何をか

みるめだになき あら磯に

みけしの袖を ふりはへて

狩にたゝせる 大君の

かましの前に ぬかつきて

うやまひまつる 島人の

心のさまに ひきかへて

波はわらくも なりまざる。

「やよやたわやめ 近うよれ。

なれを呼びしは 外ならず。

こたび都を たちいで、

とるや梓の たつか弓。

ひるはひねもす 駒なめて、

野くれ山くれ 狩りにしを、

「毛のあらものも にあものも

尾上によぼふ 聲はして、

手にはとられぬ 月のうちの

桂のごとく 花もはねて、

日數もあまた 經にけれど、

絶えてなかりき、 山のさち。

「いとしぶかしく 思ふまゝ、

うらべを呼びて うらへさす、

久しき世より この島に

いませる神の 御心を。

『ひごろ山さち なかりしは

みなわがたゝる わざになむ。

そをさけまくも ねもほせば、

さぐらせたまへ、みな底を。

音に聞ゆし この海の

そこにあはびの 貝すある。

かひの中なる ましら玉

とりてそなへよ、みてぐらに。

わが心だに なぎぬれば、

ねもほすまゝぞ、山さちは。』

神のをしへは ありたれど、

そこひも知らぬ わだつみの

荒れたる浪を かきわけて

かづかむ者も なかりしを、

『男狭磯の妻なる 少々等少女』

かづくわざにぞ すぐれしと、』

島人どもの いふなべに、

なれをばこゝに 呼びにたり。

「けふのいく日の みいつきに、

さいげまつらむ ましら玉。

い　よ　あ　い　ひ
は　り　ら　よ　る
ほ　て　れ　く　か
に　は　ど　く　へ
咲　返　み　つ　す
く　ま　り　烟　だ　沖　よ　み
や　た　か　ど　れ　の　く　と　ど
浪　濱　へ　り　雪　ら　吹　く　は
の　邊　り　て　ど　浪　く　風　に　重
花　に　は　の　り　し　し　に　く
　　う　ほ　き　き　た　ち　て
　　ち　り　つ　ち　て
　　よ　つ　ち　て

姿は浪に消えおけり。
みこどは重く身は軽く。

あ　わ　ぬ　か　そ
や　は　く　し　の　ま
に　れ　く　や　一　し　ら
か　し　重　の　ぬ　と　玉
こ　き　玉　の　麻　の　き　ぬ　日
大　君　の　顔　さ　へ　あ　を　く　栗　だ　て　り　　や　わ　は　だ　も　「　か　し　こ　ま　り　ぬ　と　い　ら　へ　つ　い　り　ぞ　き　て　」
　　冷　は　入　り　て　　さ　い　ぬ　ま　に　」
　　玉　を　の　べ　た　る　　し　り　ぞ　き　て

も
い
か
づ
ち
の
ひ
ど
時
に
も
の
音
は
空
を
と
よ
も
す
も
の
音
は
落
つ
る
が
ど
く
覺
ゆ
な
り

いそべにつとふ 島人の

老も若きも ねしなべて、

「少々等少女よ、ささくあれ。」

聲さへ浪に 消え入りぬ。

かたみに顔を 見合せて

心もとなく 待つほごに、

さかまく浪を かきわけて

浮びあがりぬ、たわやめは。

「千尋にあまる わだつみの

底にあはびは ありたれど、

いとねほさく また重く、

いふがひもなき をんな子の

よわきかひなを いかにせむ。

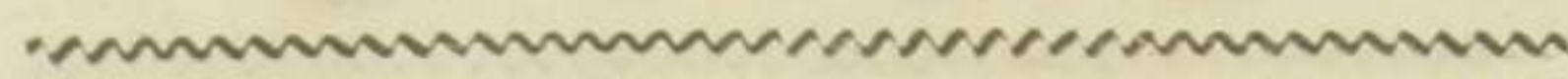
許させたまへ」と ふし沈む。

「神のとめさす ましら玉

* * * * *

「わが脊の君よ さきくあれ。」
 唯ひと言を 名残りにて、
 またもひきゆく 大浪に。
 消えにけり。

息もかよはず なりたれど、
 眼ばかりは うちひらき、
 あたり見まはす かんばせは、
 浪をわざむく ばかりなり。



かしらなめて くらをかみ
 たけり狂ふが ごとくなり。

磯邊につどふ 島人の

老も若きも もろどもに、

「少々等少女よ、 さきくあれ。」

さけび呼はる 聲のうちを、

山より高き 大浪の

勢つよく うちよせて

真砂の上に

あはび抱ける たをやめを

君のどめさせ たまひたる
珠はあげり、くがの上に
世にうるはしき たわやめの
にほへる花の 身にかへて。



加藤清正の告別

八道の山よ いざさらば
年のないどせ 戈とりて
踏みあらしたる 日の本の
ものゝふは 今歸るなり。

釜山の浦の 秋ふけて
空もしぐるい 夕暮に
波路はるかに 帆をあげて
汝れとは 永く別るなり。

うらみも深き ありなれの

川のながれと もろともに、

望は逝きぬ、 いざさらば、

八道の山よ、 ついがなく。

知遇の恩に 身をすて、

四百餘州を わが駒の

ひづめに蹴むと いさみしも、

さめて果敢なき 夢なれや。

我を知りにし 大閣の

世になき後は、 たが爲めに、

千里の外に戈とりて、

異境の山に いくさせむ。

耻をしのびて ふるさどに

歸るものちに 死なむため。

主君の家の ゆく末を

思へば重き 命なり。

あはれ大閣 世をさりて、

よつぎの主は いとけなし、

石田小西の 小人ばら

かならず事を あやまらむ。

狐に似たる 家康の

いかでかたいに もだすべき。

やがて六尺の わがからだ

すて、甲斐ある 時は來む。

わが幼時より はぐれまれ

めくみをあびし 豊臣の

家をまもりて 死なむ身の

ながくは住まじ、 世の中に。

跡にみすつる ものいふの

亡き魂もしも 知るあらば

三途の川や 六道の 辻にしぼらく 我を待て。

これに限りの 見納めに 見かへれば

波音すこく 今ひとたびと 見かへれば

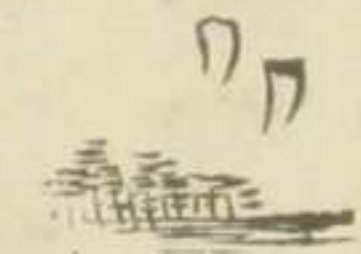
野山は霧に ねぼろなり。

八道の山よ、 いざさらば、 たかひて

國のほまれと

月は海邊こそよけれ。房州白須賀の濱べにゆきくれて、松が
 根をまくらに魂磯うつ大濤の音にさそひさられて、しばし
 まどろむかどすれば、わが顔の上を横行する蟹のおゆみに
 驚かされてうついにかへれば、寝待月浪路の末にあらひい
 だされて、万里の浮光黄金を躍らすに、心もそらに、夜もすが
 ら露にかちつくして、月に嘯きたのしさ、今にわすれがた
 く、ことし九月十一日、舊曆の八月望日にあたりたれば、こよ
 ひの満月、せめて海邊にとて、犬吠崎のあたりさして都をい
 でぬ。

佛濱の月夜



花○ど○ち○り○に○し○
 男○の○子○の○骨○を○
 日○の○本○の○
 守○れ○よ○や○

本所より千葉佐倉などを経て、松岸にて汽車をくだり銚子の市街を過ぎて、その町はづれなる川口神社の丘にのぼる。こゝは大利根の海にそゞく處なり。川の幅いとひろく、對岸には、寸馬ゆき、豆人來る。左に銚子の瓦鱗を見わたし、右に鹿島の荒灘をのぞむ。白帆遠く風をはらみ、櫓聲ちかく、咄軋として聞ゆ。こゝにいつかれたるは、延命姫とて、容貌いとみにくかりしが、ひとたび安倍晴明をかいま見て、心のやるかたなく、遂に妹背のちぎりをもすびたれど、男、その醜をいとひて、ひそかに家をいで、小濱村の濱に靴ぬぎすて、あたりの寺にかくれけるに、女跡を追ひて、そこに至り、その靴を見て、すでに死せりと思ひ、たのれも海に身をなげて、底の藻屑と

うせにけるを、里人あはれみて、茲にいつきまつれるなりと言ひつたへたる、その女の名まで、かの木華咲耶姫の姉姫の故事に附會したるものとおぼゆれど、全くの虚構にはあらざるべく、やさしき古の女むゝるも汲まるべくや。祠のうしろより高原をよこぎりて、黒生濱にくだり、磯つたひに君が濱を経て、犬吠崎にのぼり、地藏坂を下りて、佛濱にいたれば、日は早や西に沈みぬ。こゝに海水浴の旅館ふたつあり、曉雞館と云ひ、水明樓と云ふ。犬吠崎を左にし、長崎がはなを右にせる一曲の海濱の長さ十町ばかりの間、旅館より外には家なく、後は小松の生へつゝ、いさたる高阜を負ひ、前は直に俯して海波に枕み、自から別天地をなせり。水明樓に投

浴後杯を呼び坐して海上を見わたすに万里渺として雲な
 ず。暮色漸やく波聲を罩めたれど日は未だ全く暮れず犬吠
 崎の燈臺も未だ點火せざれば月のいづるにはなほ程あら
 むとて眼を座に移し、がふと東の方を見れば團々たる明
 月、いつしか海をはなれたりはなる、こと數尺未だ光線を
 はなたず海は碧に、空は青し水天蒼茫の際、月ひとり紅玉を
 懸く馮夷たはむれに珠を簸弄するかと疑はる月やうやく
 上りて、やうやく小となり、一條の金蛇、今や波上を走る、愈の
 ぼりて、金蛇大となり、波光どほく月にかゝりやきて万里金粉
 をちらし、沖に釣する漁舟、四つ五つさやかに見ゆ、白帆の影

金波のなかに入りて、忽ち見えすぎてまた消ゆ、月天に沖す
 るに及びて、金波今は際なく、白帆また隠る、所なし、白色の
 燈臺も全く夜色の中に没し、臺上の火光廻轉して西に明か
 に東に消ゆるは、月光と相闘ひて、その光をうしなへるなり。
 満潮の刻はすぎたれど、濤はなほ磯にたかく、天外より潮氣
 を吹き送る天風に應じて、軒近き岸の姫松、謖々の音を發す
 れど、さすがに枝上幾白顆の月影をこぼさず、濤にまざれど
 る松虫、鈴虫、蟋蟀の聲々、殊に秋氣をそへてひや、かなりわ
 れ、獨り柱に寄りて、且つ飲み、且つながむるほどに、一瓶の酒
 かたむけつくして、また餘瀝なく、興味醉と共に加はり、神氣
 鬱勃として、獨坐するに堪へず、起ちて海邊にくだる。

巖礁散布せる濱べに、濤と路をあらそひ、犬吠崎を後にして、
 飄然として歩す。明月わが酔顔をてらし、天風わが袂をひる
 がへす。右は松丘自然の屏障を作り、左は大洋渺茫としてそ
 の際を知らず。水陸の間、たい我身ひとつを黠せり。かへりみ
 れば、旅館、月影に縹緲として、樓上の燈光、星よりも痩せ、四邊
 人なく、物なく、天地の間、たい波濤の聲を聞く。われ浪にむか
 ひて、默然として立てば、浪はわが足をかすめて、われを誘ひ
 さらむとするものゝごとし。凝立して、睇視するほどに、わが
 胸中万斛の愁は、自から消え、万念うせ、魂魄とろけて、身体も
 我物ならぬ如く、覚え知らず。浪に従ひて、進まむとすれ
 ば、山をくづして、寄せくる大浪に、足は自から退きぬ。さては

夢現の間に、さまよひしかど、われにかへりて、踵をかへさむ
 とすれば、月下に物あり。霜をあざむくばかりなる砂の上に
 輾轉す。よく見れば、一匹の小犬の、いづくよりか来りけむ。わ
 れをなつかしがりて、仰臥しながら、四足を空に攢め、月に白
 き齒を露はして、呻るともなく、吠ゆるともなき聲を發する
 さまのやさしさに、手にてその額をなづれば、ひときは嬉し
 げなる聲して、いたからぬまでに、我手にかみつくもあはれ
 なり。主やあると見れども、人なし。我が手と犬の口とは、しば
 し月下に相戯れしが、かくては果てもなしとて、たちて歩め
 ば、犬はなほ我足にまつはるまつはりては、離れはなれては
 又まつはりて、共に山海の間をたどりしに、のちには犬あり

とゞ感ぜずふと思ひつきて、犬をたづねし時は、犬の姿は早
や見にざりき。

旅館にかへり、一睡して覺むれば、夜はまだ二時なり。隣室に
は三人の客あり。宵よりいまだ寝ねざるものとれば、しく、今
しも杯は収めたれど、雑談の聲たかく、まどろまむとするに、
目ますく、さゆ書よまむとすれば、油つきて、ともしびの影、
また、きて死なむとす。酒さめて、喉しきりに渴すれども、深
更婢を呼ばむも、心ぐるしく、苦しさをあまりに室を出で、ま
た濱邊をわゆむ。草木今は睡りつくして、浪の聲ますく、たか
く巖に激し、零露音なくして、人の衣を霑し、むら雲、そらにい
そがしくして、月も走るが如く、光うすらして、乾坤夢よりも

淡し。われ此景に對して何となくうらがなしく、夜氣、愁をさ
そひて、肌にしみて堪へがたければ、室にかへりて、衾を被り
けるに、隣室の雑談は猶止まず。遂に四時となりぬ。日出づる
までは、外面に在らむとて、又出で、磯邊を歩す。
月は西にかたむきたれども、空は依然として、夜色を帯び、潮
また上らむとして、浪の花巖頭に白し。海に金波のあと絶に
て、空とひとしく、黒味をふくみて、青く、水天のけちめ、それと
も、見わけがたかりしが、一縷の微紅、東のかたに現はれぬ。見
る、左右にひろがり、上にふくれて、明かに海と空との間
を劃せり。曙光、今、東天にのぼり、そめたるなり。されど、その
區域はなほせまく、月はますく、うすらすれゆきて、燈臺の火ひ

く海をはなれたりや、上りて波もきらめき初め、光線迸射
 して、また仰ぎ見ることを得ず。日出の觀もこれまでどうし
 ろむけば、かたへの岩に、かなじく日出を見居たりけむ、二十
 ばかりの女、ねくたれ髪を朝風になぶらせて、つくるはぬ姿
 やさしげなるが、朝日にむかひ居たる眼に、顔かたちはよく
 も見はわかぬまに、磯をくだりても、ずそかいげて、浪際をた
 どりゆき、また歩をこなたにかへしぬ。衣のうるはしきは、富
 める家の女にや、まろきと云はむより、も方といふべき顔の
 首なくして、直に胴よりはへ出でたるが、如くなるに、その顔
 のたいしからずして、口と共にゆがみたるさまなど、かの川
 口の女神もかくやどあはれなり。

れば、やがて櫛形の紅片となり、半球となり、終に一大紅噉全
 空、上下相交はる處、忽ち殷赤朱の如き一線をいだすかど見
 す薄くなりて、夜は全く明けはなれむとす。濃碧の海、淡黄の
 色どし、かて曙光の區域、益廣くなるにつれて、色はますます
 うしなひ、月魂丘樹の上にあをざめて、さながら病婦の顔の
 味にうつりて、曙光今は東方の半天を領し、燈臺も全く焰を
 そこの色を變じて、ほどんど端倪すべからず。紫味やうやく黄
 ひどり活動を見る。一刻は一刻よりも異に、雲また形と共に、
 はみな錦繡となりぬ。四面なほ夜色のうち、にねむりて、東天
 の微紅は、益大く、また益濃く、空にうかべる雲にうつりて、雲
 どり我物顔に回轉して、光線を四射せり。しばらくして、東天

朝食の後また出で、南のかたに向ひ浪際つたひて、長崎が
 はなにいたる。巖石摺疊して、怪獸の陸梁せるが如し。こゝよ
 り外川の漁村を経て、犬若崎にいたるの間、巨石浪際より海
 中にかけて散布し、南より來る潮流をうけて、犬吠崎のあた
 りよりは、濤ひときは高し。ゆき／＼て犬若崎にのぼる。この
 崎は海中に突出せる、半島の如き巨巖にて、たかさ百尺にち
 かし。見わたせば、大海際なく、藍を流せるが中に、長風浪を蹴
 て、白波遠く相連り、さながら白鷗の亂れどぶに似たり。その
 白波やうやく近きて、漸く大きくまた長く、後浪前浪を追へば、
 前浪もまけじどいさみ進み、幾層の白浪、空に躍りながら、來
 りて絶壁にふれて、雪を崩し、霞をちらし、はては白烟となり

て、たちのぼる。そのひいき、鞆鞆として、更に人語を辨せず。岬
 の東端、やゝさけて、更に高巖を出す。怒濤の餘勢、その隙間に
 亂入して、白泡鼎沸し、白龍のくるふかと疑はる。仙が巖、ちか
 くその東にありて、海中に孤立す。高さは、犬若崎とひとしく
 して、大さは、その十分一にも足らず。岩としてはおほきく、島
 としてはおほきく、上に洞窟あり。浪の花ちりて、幾んどその半
 に及ぶ。甚しき時は、その上をこすことありといふ。このあた
 りの浪のあらしきこと、恥しはかるにたりぬべし。右の方は、名
 洗浦とて、洗は大ならず。飯岡岬の一角、海中にひきて、そのな
 がさ、二里に及べり。眺望はとりわけて奇絶どにはあらぬど、
 水石相闘ふの偉觀は、銚子の近傍、この犬若崎を第一とす。岸

上より海波に俯せば、目眩し、心戦き、壯快きはまりて、覺せず、
 悽愴の感起る。ひごろ好めるシルレルがタウヘルの詩を一
 誦して去る。

午下、また出で、犬吠崎の上に散歩す。佛濱の丘陵、君が濱の
 丘陵とこゝに合して、ほそ長く海中に突出せり。岩質は、砥石
 にして、かの海上砥こゝより出づ。岬をきりくづし、斧聲、石と
 たゝかひて、風景を俗殺せるは、惜しむべし。名たゝる犬吠崎
 の燈臺は、岬角にあり。その側より崖をくだれば、巨石海波の
 間に磊砢として、或は人立し、或は獸蹲す。岬の北側に、胎内く
 いりと稱する岩窟あり。このあたり、危巖最も多く、亂立す。銅
 像かどうたがはる、ばかりなる赤條々の漁夫、ふたりみた

り、岩上に踞して、編を垂れたるも、亦畫中の人なり。

浴終りて、酒未だ至らざるほど、庭をへだてたる一室に、嬌歌
 の聲、三絃の聲と共に起る。之の聲をたづぬれば、小歌のぬし
 は、けさ日の出をながめたる女にして、そのうるはしき聲か
 のゆがみたる口よりいづるも、あはれなり。かくて、杯酒の間
 に、月はまた上りぬ。今宵は既望なれど、清光はきのふにこと
 ならず、空いとよく霽れたり。かの三人の客は己に去りて、絃
 聲もまた止み、夜しづかにして、大平洋上、秋正にたかし。一瓶
 の酒、こよひは飲みつくすを能はず。まばし月をふみて、眠に
 つきぬ。

あくれば九月十三日なり。日の出をのぞみたる後、旅装をと

障子[◎]の[◎]骨[◎]に[◎]よ[◎]こ[◎]た[◎]は[◎]れ[◎]り。
た[◎]り[◎]し[◎]燈[◎]心[◎]蜻[◎]蛉[◎]の[◎]命[◎]は[◎]一[◎]夜[◎]の[◎]秋[◎]に[◎]つ[◎]き[◎]け[◎]む[◎]冷[◎]か[◎]に[◎]な[◎]り[◎]て[◎]。
せ[◎]て[◎]ひ[◎]や[◎]い[◎]か[◎]な[◎]り[◎]き[◎]の[◎]ふ[◎]我[◎]を[◎]た[◎]づ[◎]ね[◎]來[◎]て[◎]紙[◎]障[◎]の[◎]間[◎]に[◎]欸[◎]々[◎]
の[◎]へ[◎]て[◎]か[◎]へ[◎]ら[◎]む[◎]と[◎]す[◎]草[◎]上[◎]の[◎]露[◎]未[◎]だ[◎]晞[◎]か[◎]ず[◎]曉[◎]風[◎]秋[◎]風[◎]を[◎]よ



夢野の鹿

さ[◎]ゆ[◎]り[◎]花[◎]さ[◎]く[◎]夏[◎]の[◎]野[◎]の[◎]
さ[◎]き[◎]よ[◎]き[◎]な[◎]が[◎]れ[◎]の[◎]岸[◎]の[◎]べ[◎]に[◎]
な[◎]く[◎]な[◎]る[◎]鹿[◎]の[◎]音[◎]も[◎]す[◎]み[◎]て[◎]
四[◎]方[◎]の[◎]山[◎]々[◎]ど[◎]よ[◎]む[◎]な[◎]り[◎]。

鹿のなくなる 野へ近く

ちぎ高知れる みあらかに

あつさ避けさせ 給ふとて

すめらみことの いでませる。

さ、さ、さ、と、共、に、い、で、た、い、す、
 高、き、岡、へ、の、く、さ、む、ら、に、
 置、き、添、ふ、つ、ゆ、の、い、や、し、げ、く、
 蟲、の、な、く、音、も、き、ほ、ふ、な、り、
 月、を、ふ、み、つ、い、も、ろ、と、も、に、
 あ、ゆ、ま、す、影、も、む、つ、ま、じ、く、
 夏、を、よ、そ、な、る、夜、な、く、に、
 鹿、の、聲、さ、へ、う、ち、そ、へ、て、
 み、け、し、の、袖、を、ひ、る、が、へ、し、

吹、く、や、岡、へ、の、風、さ、よ、く、
 さ、す、も、さ、や、け、き、月、か、げ、に、
 今、宵、も、鹿、の、聲、す、な、り、
 ま、ろ、が、心、も、う、ち、と、け、て、
 世、に、な、つ、か、し、き、鹿、の、聲、
 こ、ゝ、に、い、ま、し、の、手、を、と、り、て、
 と、も、に、聞、か、ば、や、い、つ、ま、で、も、
 君、の、み、こ、と、ば、う、ち、さ、ゝ、て、
 ゑ、む、も、や、さ、し、き、や、た、姫、の、

あはれをじかのうらへもあやまたず射たりけむ。
 生ふる小草はそやにして。
 さつをの手にやかいるらむ。
 どよさかのぼる朝日子のいさ川。
 あなかなしやど泣くほどに。
 夏の夜はやくあけそめて。
 さつをの手にやかいるらむ。

くれなるにほふかほばせに。
 月もいざよふばかりなり。
 野中の真萩ふみしだき。
 つまと眠りしさを鹿の。
 そびらに小草生ふと見てやぶれけり。
 夢はあらしに。
 牝鹿はゆめをうち聞きていひけらく。
 つまに向ひていひけらく。
 小草はやがてまの矢なり。
 さつをの手にやかいるらむ。

にほふきささきの
手をとりにて

今宵もたいす
岡の上に。

ふく風ばかり
身にえみて

鹿のなく音は
せざりけり。

いといぶかしく
おもほして

おほみ心も
安からず、

ちの思に
えづみつゝ

ひと夜あかさせ
たまひけり。

心をつくす
さへぎべが

あさのみけにと
かしてみて、

鹿のえゝを
たてまつる、

どが野の奥に
射たりとて。

鳴かぬもつらく
おもほすに、

今まのあたり
さをむかの

空しきから
見たまへば

いとみどいろ
さわがれて。

きその夜までも
つま恋ひて

つまにわかれ
てたい獨り
 時雨さびしく
 夢野に秋もく
 れにけり
 せめて思へば
 ちぎりも夢ど
 さめつらむ
 をむかの角の
 つかの間に
 身のはてを
 いたらぬ限も
 なけれども
 いかにせむ

あやにかしこき
 めぐみの露は
 野に山に
 西のはてなる
 國とほく
 さへぞをうつし
 たまひけり
 心ばかりは
 くませども
 とが野におくに
 去のびずと
 かゝるさま
 君は袖をずし
 ぼらする
 なきし男鹿の
 はかなくも

地 藏 堂

風のゆくへを見送りて

ゆうべの露にわびしげに立つ花すゝき

さびしげに咲く

女郎花

家里遠き 野のなかを

つらぬく路のかたはらに

立つや地藏の堂あれて

こほろぎの聲 かすかなり

まよふ牝鹿の影寒く



堂のうしろの くさむらに、

あなおそろしや ぬすびどの

右手にかたなを 抜きもちて、

身をひそませて うづくまる。

人目をつゝむ 頬かぶり

息をころして ひそやかに

路のかなたを うちまもり、

人や來ると 待ち居たり。

かねのひいきに くれそめて、

うすくなりゆく 山もどに、

かへる鴉の 影消えて、

いと静けさ 夕かな。

鳴きしきりたる 虫の音の

しばし止みぬと 聞くほどに、

人の來れる けはひして、

地藏にいのる 聲すなり。

めぐませ玉へ、 地藏尊、

病みてこやせる わが母を。

まもらせ玉へ、地藏尊、

旅にいでたる わが父を。

母のやまびを みまもりて、

つくすどすれど いとけなく

力なき身を いかにせむ。

早くかへれよ、父上よ。

今日やかへらむ 我父の

旅をまもれよ、地藏尊、

南無地藏尊、いざ早く、

親子の對面 さしてたべ。

わけてたのむは ぬすびどの

わざはひ多き この日頃、

父に災難 なきやうに

頼みまゐらす、地藏尊。

堂のうしろの ぬすびとは、

身もうごかさず さゝ居たり。

夕○日○の○な○ご○り○

と○い○め○た○る○

すゝきの上とよはた雲も消ゆきて
 一團の月まどかなり

やがてちかよる 足音に

ひとかげくろく 見分ければ

いざとばかりに ぬすびとは

かたなかざして 出でむとす

こなたに父と よばれば

かなたにあごと 聲をあげ

走りてよりて ださあひて

うれし涙に むせびつゝ

たゞひとすちに いのりたる

そのまごゝろや 通じけむ

あまたのたから 身につけて

父は事なく かへりけり

堂のうしろの ぬすびとは

いづちさしてか 去りにけむ

親なくはらからなく世にひとり残されてたよる方なき一
 人の男の唯一の友とていねても起きてもはた身はなさぬ
 一幅の畫に色もわざやかにたわやめの姿生けるが如くか
 いれたり瑠璃に似たるまなこ情をふくみて人に媚ぶるさ
 まえも言はぬに丹花をかたどれる唇笑を帯びて語らむと
 するもいと心にくし髪ふさ／＼とさがりて緑雲かしらに
 みだれ眉はたわみて遠山額によこたはれり肌は大理石に
 血をかよはせて細腰綺羅にだに堪へず豊かなる頬にゑく
 ぼの浪をたへて纖手かろく扇をかざせるいとこの世

畫ける美人

胸のうれひのひど雨ふりて 霽るいと
 涙にのみぢ 解くるなる
 寂しく吹けよ 峯の風 谷の鹿
 ちい○に○碎○く○ 泣○き○つ○く○さ○ね○ば○ は○れ○ぬ○な○り○
 * * * * *
 かなしき音に鳴け 谷の鹿
 わが心

の人とも見えぬに、めでよろこぶこと限りなし。
 路はむぐらにうつもれて、もりくる月の外には、どふ人もな
 き、賤がやどに、この男、畫像を抱きて、細きいのちをつなぎぬ。
 つくぐと見もてゆくほどになつかしさはいやまさりぬ。
 右より見れば、美人の眼も右にそゞ、左より見れば、美人の
 眼も左に轉じて、さながら生ける人の心あるが如くなるに、
 心いよゝみだれぬ。くるしく、つらき世の中なれど、御身の
 きよきおもわに向へば、御神の前に侍る心地して、心のこれ
 るくまもなし。げに御身は神にや、世にさちなきこの身を憐
 みたまへ。さるにても物のたまはぬ恨めしさ。せめてあはれ
 とひと言は音にいでさせたまへといへど、美人はものいは

ず、おもわばかりは心ありげなるに、もゆる唇をひやゝかな
 る畫の上に接することもいくそたび、夜もすがらまどろみ
 もせず、思ひわびつゝ、うき年月を送るほどに、からだつかれ
 果て、竟に病の床につきぬ。あはれ、くれなゐに匂ひしおも
 わ、青ざめて、生ける色もなく、肥えし肉落ちて、骨ばかりに瘦
 せさらばひ、物もくはず、息もたえなくになりて、今は旦夕を
 待たぬ命となりけるに、いづくよりか來りけむ、すぐれてう
 るはしき女、枕べにゐて、いとかひくしくみどりす。顔容い
 へば、更なり、衣服まで、畫中の、美人につゆたがはず。さては夢
 なるかと疑ひつゝ、も、うれしさに、心すがくしうなりもて
 ゆきて、病もどみにをこたりにき。

人○の○側○に○立○て○り○
 ら○た○に○玉○の○如○き○男○の○兒○の○五○歳○ば○か○り○な○る○が○添○へ○ら○れ○て○美○
 男○が○秘○藏○せ○し○畫○に○は○美○人○も○ど○の○如○く○う○ち○笑○め○り○而○か○も○あ○



の○血○吐○き○つ○く○し○て○竟○に○倒○れ○ぬ○家○は○ま○す○ノ○荒○れ○ゆ○き○ぬ○唯○
 び○地○に○叫○べ○ど○山○彦○の○外○に○は○答○ふ○る○も○の○も○な○し○か○く○て○滿○身○
 の○ぼ○り○谷○に○く○だ○り○森○に○わ○け○入○り○野○を○か○け○め○ぐ○り○て○天○に○呼○
 を○知○ら○ず○男○ひ○た○な○き○に○泣○き○し○が○や○う○く○身○を○起○し○て○山○に○
 に○か○し○け○む○母○も○子○も○か○き○消○す○如○く○失○せ○さ○り○て○そ○の○ゆ○く○へ○
 添○へ○た○ら○む○心○地○し○て○せ○ま○き○家○に○の○ず○み○の○光○み○ち○わ○た○り○つ○
 し○け○る○ほ○ど○に○一○人○の○男○兒○さ○へ○生○れ○出○で○た○り○錦○の○上○に○花○を○
 山○末○か○け○て○浪○も○こ○さ○じ○と○契○り○か○は○し○世○に○も○む○つ○ま○じ○く○暮○
 り○ぬ○切○な○る○胸○を○う○ち○あ○け○て○か○た○み○に○袖○ま○ぼ○り○つ○末○の○松○
 浮○世○に○語○ら○は○む○友○も○な○き○朽○木○の○や○ど○に○も○さ○す○が○に○春○は○來○

胡 蝶

とまれ胡蝶よ、さく花に。

いまし[○]が[○]夢[○]を[○]お[○]ど[○]ろ[○]か[○]す[○] 眠れしづかに、いつまでも。

風はこゝには 吹かぬなり。

ねにこそたゝね、ひらくと。

心ありげに とぶ胡蝶、

春のにしきを おりなし、

神や宿れる 汝がはねに。

にほふ霞を うちのせて、

かはすも軽き 汝がつばさ、

天つをとめの 羽衣も

かくやとばかり 思はれて。

なれがやさしき うちびるに、

あくまでも吸へ、花のつゆ。

わが住むやは せまくとも、

さくら咲きたり、こゝかして。

浮世はどはに、 風たちて、



浮世のちりはいとふとも、
 汝にはへたてじ、いのすだれ。
 どまれ胡蝶よ、さく花に。
 眠れしづかに、いつまでも。
 われも浮世にたへかねて、
 わびぬる宿のさびしきに。

雨さへわらくそいぐなり。
 うらゝに見ゆる春の日も、
 こゝろ許すな、やよ胡蝶。
 雨やけがさむ、汝がはだを。
 あらしや裂かむ、汝がはねを。
 ほゝるむ花は、おほくとも、
 まよひなゆきそ、世の中に。
 友とたのまむ人もなく、
 すみもわづらふ、やりの宿。

御嶽めぐり

梅にはおそく、櫻には早き。四月のはじめ、ひと夜を塵の巷の
 ほかにすこさばやとて、午下都をたちいづ。春とは云へど、花
 なき武藏野を汽車にわけゆきて、其の野末の青梅町に着き
 し頃は、夜已に初更に及へり。この町第一の旅館とて、わか住
 む草の庵のいぶせきには比ぶべくもあらねど、旅なればな
 ほ、嫌らず思はれ、酒の悪きに、酔を買はむ由もなし。されど、花
 の下臥し、風流の寒さにひきかへて、垢くさき蒲團の中にも、
 さすがに夢はまどかなり。
 つとめて、御嶽へとていでたつ町をすこし離れて、金剛寺は

と問へは、村の少女、思ひもかけぬ後の方の森を指す。さては
 來過したりとくやめど、遠くもあらねば、ちか路をたづね、隴
 畝の間をよこざりて寺に至る。平將軍の創立とかや、廻廊の
 前に、誓の梅とて、老幹朽ちむと欲して、小幹簇生したるが、花
 已にしぼみて、一半は枝に残り、一半は地に委せり。町の名の
 青梅は、この梅の黄熟せざるより出づとて、音には聞はたれ
 ど、見るかげもなし。その側につたなき歌をきざめる石碑た
 り。風流に似て、反て俗なるわざも、歌よからば、まだしも、な
 べて名物に旨きものなく、石にきざめる和歌俳句に、名吟の
 わりしためしなく、めくら同士におだてられ、金あるもの、
 ものすきにまかせ、巧拙だに自ら知らぬ。徐凝の遺類おほき

に、東坡ならねど、一笑せざるを得むや。
青梅より一里ばかり進み、日向和田ひなたわだに至りて、路はじめて多
摩川の岸上に出でぬ。水聲、川身共に遠く、脚下にあり、川をへ
だて、透迤たる小山の麓に、一帯の白雲鬢鬢として凝つて
散らざるは聞き及びたる吉野村の梅花にやと、魂まづ飛び
て、左に崖を下れば、斷岸の相迫る處に橋かゝれり。これ名た
たる萬年橋なるが、先年火災にかゝりて、今はたゞ橋のかた
ちを存ずるのみなり。その下に假橋を設く。俯しては、急湍水
激して蒼龍の岩を嚙むが如きを見、仰いでは、焼けのこりた
る一本の桁、虹霓の半空を横斷するに似たるを望みつゝ、川
をわたりゆきて、吉野村に達す。一村みな花とはこの村のこ

どなるべし。一目千株また萬株、近きは玉の如く、遠きは雪の
如く、梅花茅屋をつゝみて、その盡くる所を知らず。花のさか
りは已にさりて、色香はうすれたれど、なほ枝上を謝せざる
さま、さだ過ぎたる美女の如し。思ひもかけず、鶯のなく、聲の
あまりに、近きに人の反て驚かざるゝも、かもしるく、機杼の
聲に和して、機織る女のうたふ歌のふしも、かざらずして、自
から趣あるに、賤が垣根の覗かるゝは、梅が香のみにもあら
ざるべくや。小高き處に、天澤寺といふ精舎あり。今日は四月
八日とて、水槽の中に、さゝやかなる銅佛を置き、柄杓さへ添
へたるは、山奥もかはらぬ灌佛なるべし。眺望開けざるにあ
らねど、今すこし高からばと思はるゝも、例のわかぬ心にや。

天澤寺をすぎゆけば、小山左右にせまりて、さゝやかなる溪流、路にそへり、山田をすきかへす男、鋤をといめ、わざく我等を呼びて、君等は御嶽みだけにのぼりたまふに、あらずやといふ。然りと答ふれば、このさきに、三條の路あり、その中央の路は、尤も小に、草木にかくれて、それとわき難けれども、これ御嶽へ通ふ路なり。他の路をとりては、あらぬ方にいづべし、心して誤りたまふなどいふ。いたくその厚意を謝して、四五町ゆくに、果して右にわかれたる小路あり、なほよく見れば、その間に小なる獨木橋ありて、それよりつゞきたる細徑かすかに見ゆ。恰も爪の字の如し。かのみめやかなる農夫の教なかりせば、よもこれを御嶽路とは知らじ、はかなき旅にもうれ

いさは人のなさけなり。教へられたる細徑をすゝめば、足先仰ぎてやがて小山の峯にいたりぬ。これより路は常に峯をつたひ、峯いよゝゝ高くなりて、眼界いよゝゝひろし。數百仞高く屹立せる大巖を左に見てのぼりゆけば、峯めぐりて路はその巖の上に出づ。こゝに琴平の小龕あり。脚下その底を見ず。前には、群峯われに朝して怪獸の陸梁せるが如し。山のつくる處は武州の平野茫々としてその限を知らず。まばし休憩して半里ばかり行けば、路は平らかなる處おほく、或は下り、或は上る。春未だ焼痕に入らざる童山を越えて、五日市より上る路と相會す。前に山谷を隔て、雲上に聳えて、殘雪のまだらなるは、大嶽おほだけなり。

目ざす御嶽はそれより右に近く、且つ低く、樹木の鬱蒼たる處にして、思ひしよりも低ければ、この時はや已に大嶽を攀ぢむと思ふ心さざせり。遂に御嶽にいたりぬ。
御嶽の巔には、世に名高き御嶽神社あり。いと宏壯なり。盤回せる石磴の下に、旅店、御師の家、物賣る家など相連る。さらだに、善男善女の參詣常に絶えざるに、今日は小祭日なりとて、殊に賑へり。こゝは海を抜くこと三千八百尺、夏は暑を知らずと聞けど、毫も眺望なければ、大嶽にのぼらむと思ふ心いよく切になりぬ。一旅店の怪しげなる二階に休息し、酒し、飯して、祠前を左に谷に下れば、なよの瀧あり。その名の如く七折せる小瀑なり。側の巉巖をつたひ、よごどに見つく

いて、右にすゝめば、無限の谷に臨みて、翼然たる危巖落ちむと欲して落ちず、その上に銅製の天狗の翼を張りて立てるも、物すこしなほ右に巉巖を攀ぢて、左に下りゆけば、谷の窮まる處、一條の飛瀑潭をへだて、かゝるこのあたり尤も幽邃なり。谷かげに残れる雪をむすびて、噛めば、簍々として冷氣骨に徹するばかりなるに、心地いとすがしく、小戻りして、更に上りて、那具男の峯にいたる。こゝは御嶽の奥院なり。御嶽より直にこゝに通ずる路の傍に、鸚鵡石の奇あれども、路を異にしたれば、見落しつ。祠下水を賣る翁に路を問ひて、西に山ふかくわけ入り、幾度か残雪を掬して、渴を醫しつゝ、遂に大嶽にいたる。寂莫無人の山とは思の外、一人の老婆

の休息所を設けて茶を侑むるものあるに、たちよりてまば
し休息す。一町ばかり奥に、大嶽神社あれど、まづ山頂へどて、
四町ばかり崎嶇たる險路を匍匐して、漸く山頂に至りぬ。路
すがら雲上に望みし大嶽は、今やわが杖底にあり、遠目は雲
に遮られたれども、近く群山を見れるしたる心よ、言はむ
方なし。乱山の底に臥蠶點綴し、炭やく烟幾縷となく立ちの
ほれるが雲のすみより、迸射する夕陽の光をうけて、一半
はあざやかに、一半はうすく、末は風にまかせて、自から
消ゆ。北に高かきは秩父の連山にや、こゝは多摩川と北秋川
との間に磅礴せる、一帯の連山の、吉野山あたりより、崛起し
來りて、圓山となり、日の出山となり、御嶽となり、那具男峰と、

なり、遂にこの大嶽となり、山勢一頓して、尤も高峻をきはむ。
われすでに御嶽に溪壑の奇をさぐり、こゝに天梯に倚りて、
遊觀の目をほし、いまにす。幾重の雲をわけ、つくと、凡骨
頓に脱し、心は衣袂と共に飄々として、天風に颺る。たゞ日の
西に下れるに、前路のいそがれて、下りて祠に詣づ。御嶽の祠
には比ぶべくもあらねど、高山の上には稀に見る結構なり。
拜殿の賽錢箱の側に十二三ばかりのかはゆらしき少女の、
たゞひとり坐れるは、祠を守るにや。さるにて、も魍魎出づべ
き深山の上の晝もなほものす。こゝに唯一人の少女を點
ぜ、ることのいぶかしく、茶賣る老女に、あれは何者と問へば、
祠官の娘にて、父と共に來りけるが、父はさきほど已に山下

の村に歸りぬ。娘はわれと共に歸るはずなりといふ。澁茶二
三杯のむ程に、老婆の口軽く問はぬに、自ら語り出すやうか
の娘には一人の姉あり、妹よりは更にうるはしく、村の花と
呼ばるゝ美女なるが、去年來りて祠を守りけるに、御嶽より
商人躰の男ふたり來りて、こゝに酒のみ、酔に乗じて、その娘
を呼び來りて酌せしめ、さまざまざれどなど言ひたる末、
歸るにのぞみて、路まで送れといふに、一人はやらむとて、わ
れも共に送りゆきしに、ついでにその娘くれずやといふ。二
百兩出したまは、賣り申さむと、たはむれに云ひければ、こ
はそもいかに財布より金貨銀貨ばらばらとさらけ出すに、
膽つぶれ、娘と共に命からくりにげ歸りしが、娘はこれに懲

りて、また山にのぼらず。世には恐しき人もあればあるもの
なり。公等の如くやさしくれば、やうなる御方もあるにと一
轉語を下して、ほゝとわらふ。これもむかしは驚なかしけむ、
おどろの奥にも道あれば、草ふかき山里のおうなも、さすが
にせむにはぬからぬに、いらへむ言葉も知らず。いざとて、夕
日に向ひて山を下り、黄昏、檜原村ひのぼらに投宿す。
明くれば、多摩川の上流に出で、むとて、朝日を肩にして、山奥
深くわけ入る。左右みな山なり。山と山相迫りて、其間たゞ一
條の北秋川を餘すのみにて、毫も平地なく、家をたつる餘地
だになければ、勾配いと急なる。麥畑の上かけて開けて、そ
の上、往々茅屋を見る。畑のひらけざる處には、立ちのぼる

句○今○更○に○靈○活○な○る○を○覺○は○て○高○ら○か○に○朗○吟○す○れ○ば○山○應○へ○水
 鳴○る○木○曾○路○に○も○こ○の○幽○邃○の○趣○は○あ○ら○じ○と○思○は○れ○ぬ○ゆ○き○く
 て○路○途○に○山○に○の○ぼ○ら○む○と○す○る○處○に○一○軒○の○茅○屋○あ○り○就○い○て
 茶○を○乞○へ○ば○一○人○の○老○媪○あ○り○て○慇○懃○に○茶○を○侑○む○枯○木○の○如○く
 蒲○團○の○中○に○横○は○れ○る○は○そ○の○夫○な○る○べ○し○病○め○る○に○や○と○問○へ
 ば○自○か○ら○老○衰○し○て○已○に○一○年○あ○ま○り○蓐○に○臥○せ○り○と○い○ふ○あ○は
 れ○山○間○の○風○雨○に○鍛○ひ○し○岩○な○す○骨○も○肉○も○寄○る○年○浪○に○は○ぬ○も
 堪○へ○ざ○ら○む○罪○あ○り○い○つ○は○り○あ○り○血○な○ま○ぐ○さ○く○豺○狼○横○行○す
 る○う○き○世○を○よ○そ○に○八○重○の○山○奥○に○人○ど○な○り○炭○を○焼○き○鋤○を○ど
 り○て○一○年○又○一○年○七○十○年○あ○ま○り○の○人○生○の○行○路○罪○な○く○す○こ○し
 て○罪○な○く○た○ち○去○ら○む○と○す○草○木○と○同○じ○く○朽○つ○と○い○ふ○こ○と○を

烟○に○炭○が○ま○の○あ○り○か○自○か○ら○あ○ら○は○れ○て○こ○の○山○間○の○な○り○は
 ひ○も○そ○れ○ど○知○ら○れ○つ○五○日○市○あ○た○り○へ○は○こ○び○出○す○に○や○あ○ら
 ひ○炭○の○た○は○ら○を○或○は○背○負○ひ○或○は○牛○に○の○せ○て○い○で○來○る○も○の
 ひ○き○も○き○ら○す○た○ほ○く○は○女○な○る○が○中○に○十○ば○か○り○な○る○少○女○人
 並○に○あ○ね○さ○む○か○ぶ○り○し○て○角○い○か○め○し○げ○な○る○一○駄○の○大○牛○を
 手○綱○ゆ○た○か○に○領○し○て○ゆ○く○も○い○ど○殊○勝○氣○な○り○川○の○流○は○小○に
 岸○低○く○路○は○直○に○川○身○に○そ○ひ○水○と○共○に○萬○山○の○底○を○縫○ひ○て○斗
 折○蛇○行○す○さ○な○が○ら○二○重○に○た○て○ま○は○し○た○る○屏○風○の○中○を○行○く
 が○こ○と○く○回○顧○す○れ○ば○山○か○さ○な○り○ゆ○く○手○に○も○層○嶺○面○に○當○り
 て○路○竟○に○さ○は○ま○る○か○と○思○は○れ○し○も○幾○度○と○い○ふ○こ○と○を○知○ら
 ず○山○重○水○複○疑○無○路○柳○暗○花○明○又○一○村○と○う○た○ひ○け○む○放○翁○の○詩

ふ○翁○忽○ち○眼○を○ひ○ら○き○思○の○外○に○聲○も○た○し○か○に○我○が○爲○に○路○を○教
る○こ○と○い○ど○ぬ○ん○こ○ろ○な○る○に○や○が○て○死○ぬ○景○色○も○見○ぬ○ず○蟬
ひ○け○む○病○み○さ○ら○ば○ひ○て○聲○を○出○す○力○も○な○か○る○べ○し○と○思○ひ○し
に○向○ひ○て○小○河○内○へ○の○路○を○問○へ○ば○そ○の○答○を○ま○だ○る○し○と○や○思
ま○た○は○し○き○は○自○然○の○ま○こ○と○な○り○な○ど○思○ひ○つ○い○け○つ○、○老○媪
青○く○水○は○長○へ○に○流○る○い○ど○は○し○き○は○人○間○の○い○つ○は○り○に○し○て
は○大○鬼○小○鬼○相○望○ん○で○哭○す○か○へ○り○み○れ○ば○山○は○ど○こ○し○な○へ○に
所○ぞ○歐○洲○の○野○ま○た○那○翁○の○馬○蹄○を○印○せ○ず○古○來○野○心○の○あ○ど○に
々○た○る○世○の○所○謂○偉○人○豪○傑○天○地○の○化○に○參○し○て○竟○に○何○の○補○ふ
か○な○き○人○間○の○小○智○小○慧○小○策○略○を○弄○し○て○蝸○牛○角○上○に○終○生○營
や○め○よ○名○に○驅○ら○れ○欲○に○驅○ら○れ○利○に○驅○ら○れ○煩○惱○に○驅○ら○れ○は

の聲の句さへ思ひだされてひそかに涙を揮つて去る。

路少しばかりのぼればやがて左に山腹をめぐつてゆく。足
先や、仰ぐばかりの勾配なり。左は谷を隔て、山あれども
眼界はまたせまらず。處々に家あり、畑ひらけ、雞犬の聲、時に
相應ふ。山のしづけさは太古の如く、當年秦を避けし民も、か
くやと思はる、ばかりなり。ほか、とあた、かき春の日
を負ひて、心どかに進みゆきしに、路遂にきはまりぬ。樹陰
に一軒の家を認めて、之に就けば、空屋とも見ぬに、人は居
らず。今一軒、四五町へだ、りたる處にありければ、それに赴
きしに、こゝにも人なし。此あたりには、家はこの二軒のみに
て、路を問ふに人なく、いと困じて煙草ふかし居たるに、二三

人づれの童兒、來りてわれらを、諦視するは、洋服着たる旅人の、われらの姿を、めづらしと思ふなるべし。かぼつかなし、とは思ひながら、小河内に出づる路と、へば、わらびの如き柔拳に、峰巒を指點して、路を教ふる。こと、ただ明瞭なり。教へられたるまゝに、山路をよちのぼること、二十町あまりにして、遂に峠の上にといたる。これよりは、下り路と思へば、心ゆたかに、草の上をすわり、ふかす煙草の烟の末、追うて眼をうつせば、思はぬ空に、富士の高根、夢の如く見ゆ。時は十一時を過ぎたり。正午までには、小河内へとて、一呼して下り、遂に多摩川の上に出でぬ。十町ばかり川上の、鑛泉のある處に行かざれば、食を得るに由なし。餓を催せることは、甚しけれど、今日の

うちに、青梅に出でむと思ひたれば、往復半里あまりあどもどりするに、恐びず。一茅店に投じて、鶏卵を食ひて、假りに午食に充て、多摩川の左岸を三里ばかり下にゆきて、氷川村に至り、こゝに始めて旅舎を得て、午食す。こゝは日原川（ちばら）の多摩川に會する所にして、旅舎商店相連りたる山間の小驛なり。客室は川に接すれども、岸高うして、川身を見ず、たい淙々たる水聲を聞く。翠巒面を衝いて、起り、白雲來りて、人と親む。食終はる頃、雨至り、次第に甚しくなりければ、遂に意を決して、こゝにやどりぬ。夜に入りて、雨やまず、客懷何となくうらがなし。われは歸期を定めずして、出で來りたれど、雨江は一夜を期して來り、青梅にて、今一夜とて電報をうち、今日は必ず

都に歸る豫程なれば、如何にかせしと心をいためて待つ人
あるべし。今一度打電せむにも、郵便局はなし。即興の蜂腰と
て、

雨ある、春のひと夜をまどろまで、

まぢ明すらむきみが妻はや。

翌朝、早くいでたつ。雨痕地に残りて、空はなごりなく晴れた
り。脚下の多摩川の水、赤くにこりて、溪流の奇その半を失へ
る。はくちをし、仰げば、屏風のごとき、巨巖天を刺し、俯せば、巖
を骨とせる。兩山せまり來りて、相闘はむとするところ、巨靈
咆哮して、一道の溪流、箭を放てる。天狗巖の奇には、思はず、足
をどいめつ。いよ／＼進めば、山ひらけて、眼界やうやくひろ

し。二俣尾村ふたまたうらに至れば、川をさること遠く、右も左も畑ひらけ
て、桃樹太だおほく、はや淡紅の花をつけて、のびそめたる麥
浪と相映ずるも、また春の一觀たるを失はず。對岸は、一昨日
の朝、ふみわけし吉野村なり。ゆふべの雨にも、つゝがなく、香
雲舊に依りて、山下の村を罩むるに、契りし人に邂逅する心
地、せられ、花神ひとへに、われを待ち、われを送るが、ごときも、
はかなきわが思ひなしにや。



四とせいつとせ 臺灣の
 南のはてに でかせぎて
 くるしき業を せしほごに、
 やつれにけいな、 わが姿、
 色はくろみて 目は落ちて
 額ぬかに皺しわさへ きざまれて、
 われも驚く、 わが顔の
 むかしの様に かはれるを。

やつれし姿

花ざくら

すたれし家の 花ざくら
 ありじと共ともに、 くちもせで、
 榮さかほもゆくか 春はるかせに、
 枝えだはかきねを うちすぎて、
 路みちゆく人ひとに 媚こぼを賣うる。
 花はなのこいろの あさましや、

されど黄金は まうけたり。

坐して食ふに 餘りあり。

いで山の手にて 家たて、

世をばたのしく 過してむ。

なじみし女へ みやげには、

金のゆびわや しゆすの帯。

髪のかざりに 珊瑚樹の

ねがけを添へて 贈らばや。

もとの友達 よびつれて

名物の料理 おごらばや。

くむ杯に くだまきて

我が身の上を かたらばや。

道ひろくなり 家増して

むかしの様は かはれども、

生ひかちにて たるふるさとの

花の都の なつかしや。

歩む行手に 足袋はだし

はつびを着たる 小男の

いそくゆくを 能く見れば、

むかしの友の 權太なり。

やれなつかしや わが友と

走りて寄りて 名をよべば、

われをうち見て いぶかしみ

そ知らぬ顔に 過ぎてゆく。

ふりし木綿の 前垂に

味噌漉し包みて ちよこくと

歩む女を よく見れば、

むかしなじみし お梅なり。

やれなつかしや 戀人と

走りて寄りて 手をとれば、

われをうち見て いぶかしみ

そ知らぬ顔に 過ぎてゆく。

なほゆく路に 思はずも

わが母杖に とぼくと

やれし布子の 袖寒く

腰をかいて 來りける。

源三窟に世をせばめたる敗軍の將の昔は知らず妙雲寺に
 身を潜めたる亡國の美人の昔も知らねどこゝ名にし負ふ
 鹽原の里からき憂目は今もかゝる白雲の八重立つ山の奥
 も浮世のさがに洩れでや心一つに忍ばれて有るにあられ
 ぬ身の頼む木蔭にもなほ袖ぬらす青葉々の雫の末の流
 れて清き箒川の水もさすがに六根の塵は掃ふに由なかる
 べし。

温泉場の雑沓を後にして溪流を溯りてゆくこと幾回山尖
 り樹茂りて通ふ人も稀れなる處にさりとは數寄をつくせ

猿塚

やれなつかしやわが子よど
 われよりさきに聲かけて
 涙かたでに まろびより
 人目もはぢず よゝと泣く

涙のひまに いひけるは
 汝はいたくやつれはて
 見違へるほどに なりたれど
 よくこそ無事に 歸りつれ

る一構、溪を隔てたる懸崖より一條の笥のかゝれるは、涌き出づる靈泉を引けるにや、圍ひ廻したる黒塗の板塀、一字の粉壁を包みて、水に枕める柴門、更に風致をそへたり。家は新しどにはあらねど、瓦屋根いかめしく聳け、雨にうたれ、風にさらされて、木理あらはたる門標に、墨の色なほくろくど残りて、花村家別荘の五文字、高くしるし出されたるは、年久しき住家とおぼゆるに、此二三年のほどは、さゝはる事ありてや、避暑の時節にも、紅葉狩の時節にも、柴扉むなしく鎖されて、人待顔なりしが、此の夏よりは、俄に人のけはひして、箒痕つねに清らかに、木末より立ちのぼる煙にも、住む人ありとは知らるゝに至りたれど、なほ山は太古の如くにして、笑

語の聲だに聞えず、門の戸は開きたるまゝにて、出入りする人はなく、唯おどづるゝ客とては、迎へざるに、入り来る白雲のみなり。

峰の松風の如くにして、更に清く、溪水の音に似て、特に澄みたる一種のうるはしき音の時々聞ゆるに、村人ははやくも耳をそばだてしが、誰かまづ影を吠えけむ。此度は旦那夫婦は來らで、その惣領の息子殿新に迎へたる夫人を伴れて、避暑かたぐの新世界、その若旦那はたびく、此の地に來りたれば、村一同とくより見知りて、賞めぬ者もなき好男子なるに、そのまた新たにむかへたる花嫁御も、それはく、光るやうな顔かたち、當地名物の高尾からも釣の來そうな美人、

まことに揃ひも揃うた一對の活人形じやなどはかなき噂、十里の外までも傳はりぬ。噂はこれにとゞまらず。如何なる故にか、此一對の活人形はどかく中が悪く、まさか脊中合せの中ではあるまじけれど、打ち解けて睦みあふ様も見えず、聳殿が絶えず佛頂面をすれば、花嫁は機嫌とりかね、我とうち萎れて、緑の袂つねにしめりがちとは、さてくゝ氣の毒千萬など、他所の疝氣を頭痛に病むものゝ多きも可笑しや。かく村の者どもが旦那々々ともてはやして、いろくゝに噂するも故なきにわらず。ひろき東京にても、花村伯と云へば限りある華族のうちにも、取分けて世に時めき、しかも財

産家の中にかずまへらるゝ華族なるが、その子文齋と聞えしは、今年二十三歳の若盛り、新に迎へたる夫人は梅子とて、これも華族の中にて名うての美人、此の一對の新夫婦が島臺の前に、三々九度の杯を酌みかはしたる後、間もなくつれだちて此地に來りしは、避暑をかねたる西洋風の結婚旅行とぞ聞えし。木葉の落つるも可笑しき娘盛りの身も、人の家にとつぎては、薬にしたくも心底から笑ふ折は、少なく、第一に良人の氣に入らやうに心を碎けど、さりどて、夫の機嫌とりすぎで、舅姑の方をおろそかにするやうに思はれてはならず。貴き家なれば、勝手向の面倒見るに及ばざれど、小姑への氣兼云へ

ば更なり、何につけ、かにつけ、心配の絶ゆることなく、小さき胸のはりさくるばかりなるを無理に抑へ、外部を粧ひて強いて笑ひ顔を作くらねばならぬこと、は思ひの外、花村家には、小姑といふもの一人もなく、兩親はあれども、舅は柔和な人柄、白き鬚を撚りつゝにこゝと笑ひて、小むづかしき様子更になく、姑もお人善にて、少しも氣がねがいらぬに、先づ安心して、さて本尊の夫は如何にと見るに、きしより、もまさりたる好男子、中肉にて色白く、口元締りて、糸をひく目元の可愛らしく、人柄もすぐれて、ただやかなるに、うれしいやら、耻しいやら、二三日はまるで夢中で過しけるが、鹽原へ二人つれの旅行と相談ましまりて、梅子ははや極樂にでも行くやうな思ひをなせり。

旅行の伴には、梅子が里方よりつれ來りたる徳と云ふ腰元に福といふ花村の女中、外に御飯焚、水仕事、庭の掃除などの世話する老人の安兵衛夫婦を伴れて、一行すべて六人なり。上野より那須まで新夫婦は共に上等列車に乗りたれど、人目あれば打ち解けたはなしも出來ず。さて那須より鹽原迄五里半の間は人力車をやどひ、第一は文曆の車、次は梅子の車、それより荷物車に至る迄都合十輛、那須野の原に砂烟立て、ゆく道すがら、梅子はせめてお顔をと思へど、見ゆるはたい後姿、肩殺げ領、足長くして、髪は漆よりくるく、如何にも立派なれど、臍をだに得ざるに、望蜀の念やみがたく、跡の車

なる腰元とはなし合ひて笑ひ聲でも洩さば振りかへる事
 もやと思ひていろく譯けもなき事語りて笑へどさらに
 其甲斐なけれはいよくもどかしくつひに困らじてあな
 たあの高い山はど半ば問ひかくればどの山と云ひつゝ後
 むくに思ひ設けたる勇氣忽ちくちけておづくもまた後む
 きて腰元と顔見合はすればこれはまた意味ありげなる微
 笑を洩すに心ますく惑ひて滴る汗をぬぐひも敢へずあ
 れは何と云ふ山でせうア暑いこと

如何に佛性な人なればとて舅姑の側は親だけに矢張り氣
 苦勞のある都の家を去りて深山の奥のその奥に自から手
 鍋さげる骨折も入らず人目とては下女下男のみなれば別

に遠慮も入らず水も入らぬ二人暮しにて仕たい事仕放題
 と待ちにまちし當て事はやくも何やらと共に前からはづ
 れぬ鹽原に来てから氣をつくれれば何が夫の氣に入らぬか
 かはやうと朝の挨拶いへどいらへは無くおやすみあそば
 せと夜の辭儀すれど取りあはず何をいうてもふりむかず
 風は何處を吹くといふ風情なるにこれはどうしたこと
 氣も氣ならず獨り心をくだくのみにてあらし風にもあた
 らざりし箱入娘のよき思案も浮ばずあはれや人の保養に
 來る塵外の仙境に初めて夏瘦の味を覚えぬ

一室にたれこめてふさがちなる夫の身の上慰さめむや
 うもなきに兩親の來らぬはもつけの幸と思ひしはかへす

いゝも勿体なや、こんな時に姑でも居られたらばと、今さら
 くやめども詮なし。今日も朝からたてこめて居らるゝに、少
 しは慰さむる事もやとて、梅子は自から急須をもち出で、
 茶を點じ、茶受けはお跡からとて差出せば、一寸ふりむきて、
 茶受けも入らず、茶も飲みたくなし。そなたもこゝへは來な
 くてよい。そなたはうちにばかりぐづぐづせずと、折角鹽原
 に來たからは、高尾塚も見て來るかよし、天狗岩も見て來る
 がよし。さては鹽原の七不思議、妙雲寺に納めたる高尾太夫
 の襦袢など見物するものは多かるべし。こゝには無用、呼ん
 だら來いと、情けなく、あら、しき言葉の風を、柳どらけな
 がして、ハイとやさしき返事はしなからふりむきてはるり

とこぼす温き露に、おたら化粧の白粉もはげぬ。
 夏の夜ふけて河鹿の聲高く、川上より人間の外の秋たちて、
 そよ／＼と吹き來る風に、岐阜提燈の火影涼しさうにゆら
 ぐ軒端の柱にもたれて、思ひに沈める梅子の前に、腰元の徳
 は、うや／＼しく手をつかへて、お嬢さま、アレわたくしとし
 た事か、やつぱり口癖になつて、ホ、奥様も、うおやす
 みおそばせなど云へば、徳や、わたしは、もうねたつて寐られ
 は、しない、一層死んで仕舞ひたいは、どいふア、コレ、奥様ど
 んでもないことおつしやいますな、これからが花の御身の
 上、なぜそんないまゝ、しい事を、おつしやいますでも、徳や、
 お前、わたしの身になつて御覽、それはもう鹽原へ來てから

一月も立つけれど、ついやさしいお詞、一つかけて下されず、何が御氣に入らぬやら、ふさいでばかり入らして、ほんに、ア、どうしたら宜からうとはや、涙聲なり。御尤でござひますとも、わたくしだつて、どの位氣をもんだか知れませぬ。お福さんに聞いたら、様子が知れうかと思つて、色々なうをかけた見ましたがあ、あの人も新參なので、よくは知らず。安兵衛さんに聞いて見ますと、ちらと噂に聞いたとやらで、しかどはわからぬと、此の人の申すには、若且那樣はごく内氣な、おとなしい、蟲も殺さぬよい御方、書見がお好きでお部屋に籠つてばかり居らしたので、もしや病氣が出はせぬか、男があれでも困つたものと、御兩親の壁訴訟もあつた位。それがどう

した拍子にか、ふとお出好きになつて、他所におどまりなさる事もたび／＼。いつもそは／＼して、尻が落付かぬ御様子、これでも又困ると、御兩親の異見なさるれば、節が細かで面白など、聞きながして、外を内なる御身持の末、小露とかいふ尤物にお目がどまり、是非女房にとまで増長なさるゝに、お人のよい御兩親でも、こればかりはゆるさぬと、以ての外、御立腹にて、ろく／＼外へはお出しなされず。その中に、その女はもとの馴染にひかされたとか、病氣で死んだとか、その邊はたしかにはわからざれど、御可愛想に、若且那さまは籠の鳥同然、ふさいでばかり入らして、食事もすゝまず、血色も衰へてお命も危いやうな次第。此上の薬には、よい嫁を

迎へて、氣をかへさすに越したことなしとて、方々おさがし
 あそばした末に、あなたさまと御縁談がとゝのひましたと
 の事でもことに奥さまは御不仕合せなやうなもの、若い
 時の女狂ひは誰もありがちのこと、それに、根が利發な、誠の
 あるお方ではあるし、あなた様がお氣に入らぬといふ譯で
 もございませぬば、いつまでも此の通りではございませ
 い。待てば甘露の日和とやら、今少しの間氣長う御辛抱あそ
 ばせやと云ふ折しも、俄に椽側踏みならしていで来る人あ
 るに、兩人ともおどろいてふりかへれば、今までもうはさし
 たる文磨なり、寢衣姿しどけなく、よろゝと歩を移しなが
 ら、此方を一目見しばかりにて、直ぐに庭下駄穿いて出で、

ゆく、何處へと、咎がむれど、何の答もなく、物をさがすが如
 く、あちこち見廻したりしが、やがて扇骨木の蔭なる春日燈
 籠を、じろく見て可愛や、茲に居たかどて抱き付きぬ。
 此の夜月傾きて、草木も眠れる頃、ひそかに別莊を忍び出で、
 て後の山を攀づる一人の男、手に短銃を提げて、血走る眼に、
 天地を睥睨するさま、ものすこくもまたおそろしく、陰風螢
 火を吹いて、山氣腥き苔の細路に座を占め、地に俯して考ふ
 る所あるが如く、天を仰いで、また考ふる所あるが如くなり
 し、が、はては山の端の月を睨んで、待つて下され、今行きます
 と、唯一言云ふより早く、用意の短銃喉に向けて、撃鐵引けば
 神機一發、おはれや木の間より落ち来る猿一匹。

うとくせし寝耳に水ならで、鐵砲の音は、合點の行かぬ
 こと、枕を蹴つて起き上りたる、梅子、氣のたしかなる性質
 とて、側にふせりて、いざななくも、大の字、畫いたる、寐姿の、ム
 ニヤ、く、と、口を動かす、腰元を起しもせず、直に夫の部屋に
 かけつけて見るに、夫のあらざれば、さてはと心も空に、音せ
 し方をさして、雪よりも白き素足にけはしき巖角踏みつゝ、
 たどりゆく苔の細路に人の形して、仆れたるものあるを、月
 影にすかし見れば、まがふやうなき我夫の亡骸なり。
 梅子はあまりのことに言葉も出でず、夫の亡骸抱きてしば
 し涙にくれけるが、漸く氣がつきて、よくく見るに、體には
 丸の痕なく、半點の血痕もなくて、側に一匹の猿、鮮血に染み

て仆れたり。これは意外の仕合せと小躍し、ちよる、く、と、滴
 る、清水を手に掬、ぼ、む、と、するに、おほかた、洩れければ、口より
 口、に、う、つ、し、文、啓、様、と、二、聲、三、聲、口を耳につけて呼びたつれ
 ば、忽ちむつと起き上り、いたはる妻をきつと見て、誰かと思
 へば、梅子だな。そなたはマアどうして此の世へやつて來た
 と、問ひかくる言葉はよくも聞かす、夫の無事な顔ながめて、
 漸く胸をさすり、ヤレ、く、嬉れしや、お怪我はなかりしか、大
 事の、く、御身の上なせ死ぬる氣にはおなりなされた。もし
 死なれたら御兩親の跡の御歎は何と思召す。そして云は
 んとするを遮り、その恨みは、娑婆で言ふこと、かく冥途にて
 落ち合ふ上は、最早何ことも言ふてくれるな。父母の歎きも

か、も、は、る、れ、ど、所、詮、一、度、は、死、ぬ、る、命、な、れ、ば、い、た、づ、ら、に、浮、世、
 で、御、苦、勞、を、か、け、ひ、よ、り、は、は、や、く、死、ん、だ、方、が、反、つ、て、親、の、爲、
 め、か、ど、思、つ、た、の、だ、そ、れ、は、さ、て、置、き、そ、な、た、は、マ、ア、ど、う、し、て、
 冥、途、へ、や、つ、て、來、た、と、變、り、し、言、葉、に、そ、れ、と、悟、り、わ、た、し、も、お、
 跡、で、死、に、ま、し、た、二、世、の、夫、を、先、立、て、ど、う、し、て、ひ、ど、り、生、存、へ、
 て、居、ら、れ、ま、せ、う、御、身、の、仆、れ、し、所、を、去、ら、ず、同、じ、鐵、砲、に、て、ヤ、
 ヤ、死、ん、で、吳、れ、た、か、う、れ、し、い、づ、や、し、た、が、コ、レ、梅、夫、婦、と、い、ふ、
 は、名、ば、か、り、で、一、夜、も、枕、を、か、は、さ、ぬ、夫、の、爲、め、に、命、を、捨、つ、る、
 そ、な、た、の、誠、心、身、に、し、み、て、勿、體、な、い、と、て、暫、し、涙、に、暮、れ、に、け、
 り、
 つ、く、く、と、梅、子、の、顔、を、な、が、め、て、テ、モ、マ、ア、綺、麗、な、顔、か、た、ち、

そ、の、ま、た、顔、よ、り、も、綺、麗、な、心、柄、娑、婆、に、居、た、時、に、い、し、や、そ、の、
 心、柄、に、は、氣、が、つ、か、ず、と、も、な、ぜ、其、の、顔、が、目、に、つ、か、な、ん、だ、ら、
 う、ア、お、れ、が、惡、る、か、つ、た、娑、婆、の、事、は、み、な、許、る、し、て、吳、れ、よ、
 と、云、は、れ、て、梅、子、は、う、れ、し、く、も、耻、し、く、も、袖、か、み、し、め、て、じ、つ、
 と、見、上、ぐ、る、眼、に、え、も、言、へ、ぬ、愛、敬、の、溢、る、有、様、は、さ、い、波、清、
 き、海、面、に、う、ら、い、か、な、る、朝、日、影、さ、す、が、如、し、
 そ、の、御、言、葉、は、う、れ、し、け、れ、ど、ま、だ、小、露、と、や、ら、に、御、心、殘、り、て、
 又、此、の、上、に、ひ、よ、ん、な、事、で、も、遊、ば、し、た、ら、わ、た、し、や、ど、う、せ、う、
 か、ど、そ、れ、が、悲、し、う、ご、ざ、り、ま、す、と、云、へ、ば、そ、ん、な、事、は、も、う、云、
 う、て、吳、れ、る、な、我、も、娑、婆、に、居、た、時、分、は、女、一、匹、の、た、め、に、世、を、
 厭、ひ、世、を、厭、ふ、た、る、末、鐵、砲、往、生、ま、で、し、た、る、大、馬、鹿、者、な、れ、ど、

松 杉 問 答

山もどに おふる杉の樹

我はしも 谷にうもれて、 松にかたらく、

世の中の さかえもさちも めぐみにも洩れ、

白雲の うへにそびえて 年をへつるに、

世の塵を 天の下 ゆたに見下し、

日のひかり 大空の 神にも近く

なれこそは うらやましけれ。

大空の 神にも近く

峰の松 答へけるやう、

とりのよふ 高山も 世の外ならず。

ときじくも み雪つかりて、

吹く風さむみ

幹まがり 枝もちいむを、

大空の あらしをよそに

大空の

大空の

大空の

大空の

大空の

大地をまきて おしよする
 安祿山の はたかせに、
 二十四郡は なびけども、
 なびかぬ義士の 鐵石心。
 張巡許遠が たてこもる
 心もかたき 睢陽城。
 雲霞のとき 大軍を
 どいめさへて 守れるは、
 怒濤さかまくら ばらに、

睢陽城



谷川の
 清き
 たけ
 なか
 くれ
 にく
 直く
 生ひ
 たち
 やす
 らか
 に
 なれ
 こそ
 は
 うら
 やま
 しけ
 れ
 世を
 すこ
 す
 らむ
 ろる
 ほひ
 て
 は
 き
 な
 が
 れ
 に
 根も
 うる
 ほひ
 て

いはほの立つが ひとくなく
城にこもれる つれづれの
睡氣さましに たちいで、
當るがまゝに 薙ぎたふす、
獅子奮迅の いさほひに、
刃向ふ敵は なけれども、
聲援もなき はなれ城、
兵士はおほく 討死し、
糧食もはや つきにけり。

(霽雲歸り來る)

張巡よくこそ無事に、 霽雲どの。

許遠進明へのつかひ 大儀なり。
萬春かなたの答は いかによや。
霽雲まづひと通り 聞きたまへ。
羊のむれに おほかみの
躍り入りたる ひとくにて、
忠義に凝りし たちからの
つゝかむ限り きりまはり
はらふも強き 太刀風に
ばら／＼ばつと 木の葉武者
にぐるを追うて 一方の

血路をひらき やうやくに
進明の陣に つきにけり。

雲も睢陽の 要害は

江淮第一と 聞えたり。

かの城もしや 落ちもせば。

賊はますく 時を得て

天下にひろく 跋扈せむ。

さるに糧食 はやつきて

城はいよく 危きに、

一臂の力 そへてんや。

一日もはやく 援はむと、

われも心は はやれども、

兵備は未だ どのはず、

いま暫くは 待たれよと、

言葉たくみに 濁らせて、

われをば長く といめむと、

酒宴に添ふる いと竹の、

ふし面白く もてなせり。

雲城中すでに 食つきて、

指をくはへて
 やつど呼ばる
 進明をきつど
 慨然として
 たちあがり
 嚙みおとし

御身強兵をもちながら、
 賊にくみせず、官軍に
 力あはするこどもなく、
 手を袖にしてたゆたふは、
 忠をわきまへ義を知れる、
 人の所爲にはあらぬなり。

ひと月あまり人々は、
 米ひとつぶも口にせず、
 木の皮のみを食へるを、
 われいまひとり美酒に酔ひ、
 佳肴に飽くに恐びんや。
 よしや口には食ふとも、
 いかでか咽にくだるべき。
 御身は食まらずや唐の祿。
 御身は受けずや唐の恩。
 さても義を見てなさいるは、
 これ勇なきの匹夫ぞや

花も實もある ものゝふの
 心のそこを くみわけて、
 こぼす涙や そでの雨
 一座しげいは 聲もない。

運命つきむ わかつきは、
 公等どこゝに もろともに
 城をまくらに 死なばやど、
 断ちたる指を とゞめ置きて
 恥をつゝみて 歸り來ぬ。

口○に○ふ○く○め○る○
 鮮○血○を○
 空○に○む○か○ひ○て○
 吐○き○出○せ○ば○
 堂○一○面○に○く○れ○な○る○の○
 さ○霧○が○さ○つ○ど○立○ち○の○ぼ○る○

雪われは使命を 身におびて
 かなたに行きし 甲斐もなく
 使者の一分 たゝぬなり。
 もとより惜しき 身ならぬど
 賊のほろびむ 時までは
 なほすてがたき このからだ。

遠運命こゝに きはまりぬ。

今は人をば 頼むまじ。

公等と共に この城に

武士のかばねを さらしてむ。

巡さるにてもかく 餓ゑはてゝは、

太刀をふるはむ よしもなし。

今日はからずも 肉を得ぬ。

いざ近寄りて もろどもに

食ひたまへや、あくまでも。

春こは近頃の珍味なり、

そも如何にして 得たまひし。

巡何をかくさむ これはこれ

我が亡妻の 肉にこそ。

雪夫人の肉とや、こはなんと。

巡公等驚く ことなかれ。

妻がいまはの こゝろざし

かたりいだすを 聞きたまへ。

言ひ甲斐もなき 女子の身の

御國につくす 術もなく

死ぬに死なれぬ このからだ、

むなしく野邊に くちむより、

せめて忠義の
ますらをの
うゑたる腹を
こやしなば、
數にもたらぬ
賤が身の
世にありがたき
ほまれなり。

巡わはれ公等が
この月日

食乏しきも
かへりみず、

たゞひと筋に
忠勇の

道をまもれる
心根は、

わが肌さきて
もてなすも、

なほ足らざるを
覺ゆるに、

いまその餓を
よそにして、

妻のいのちを
惜まむや。

食ひたまへと
すゝむれど、

答ふるものは
絶えてなく、

鬼を欺く
ますらをの

目にも涙の
ひと時雨

袂をしぼる
ばかりなり。

巡さらば公等は
わが盡す

好意を無にし
たまふかや。

違かく言はるれば 是非もなし、

烈女の肉を 賞味せむ。

春烈女の肉を 賞味せむ。

雲われもその肉 賞味せむ。

一時は餓を しのげども、

いかでか長く つゞくべき。

うたれくして 生き残る

決死の勇士 四百人

國家のために 身をつくす

心ばかりは いさめども、

無残や饑に 病みはて、

今は手足も たゝぬなり。

(兵士入り来る)

兵士覺悟めされよ、 賊兵は、

はや城門に 押し入りぬ。

巡いざや最期の 軍せむ。

用意はよきか 許遠どの。

遠嗚呼無念やな 腰たゝず。

巡そなたは如何に 霧雲どの。

雲無念やわれも 腰たゝず。

巡萬春どのは 如何にや。

嵐にちるや花ふいき
賊をのいしりていさぎよく
まなじり裂けて血を流し
死ぬる今はも色かへず

生きて陛下の大恩に
むくいまつれる事もせず
むなしく露と消ゆる身の
いまはの一念願くば
鬼どもなりて思ふまゝ
はらひつくさむ逆賊を

(賊兵亂入して諸士を捕ふ)

春われも無念や、腰たゝず。

張巡ひとり立ちあがり
進むとすれどよろしくど
たぢろく足をさいへかね
つるぎを杖にどいまりて
無念の涙はらくど
西に向ひて伏し拜み

巡臣張巡が運拙く

力も今はつきはてぬ。

見よや情も ぶかくさの
 見よやちざりし 橋のもど、
 尾生は水に おぼれけり。

女ごころ
 百合を折らむと たちよれば、
 にはふ女の やは胸に、 蛇すめり。
 つらや、つるぎを、 かくすめり。

かをりも深き 双廟に、
 物のあはれを、 といめけり。



柳 の 糸

春のひかりを うちよせて
 ふくや川べの ち風に、
 なびくと見せて またかへる
 こゝろもつらや、 いとやなご。

なびきもはてぬ ものならば、
 よそによきても 吹かましを、
 にくや小枝の なよやかに
 吹きさしぬれば まねくなり。

女ごゝろの まことなき
 かりの契りの はかなきは、
 宵にはのめく いなづまの
 有るかど見れば 消ゆるなり。

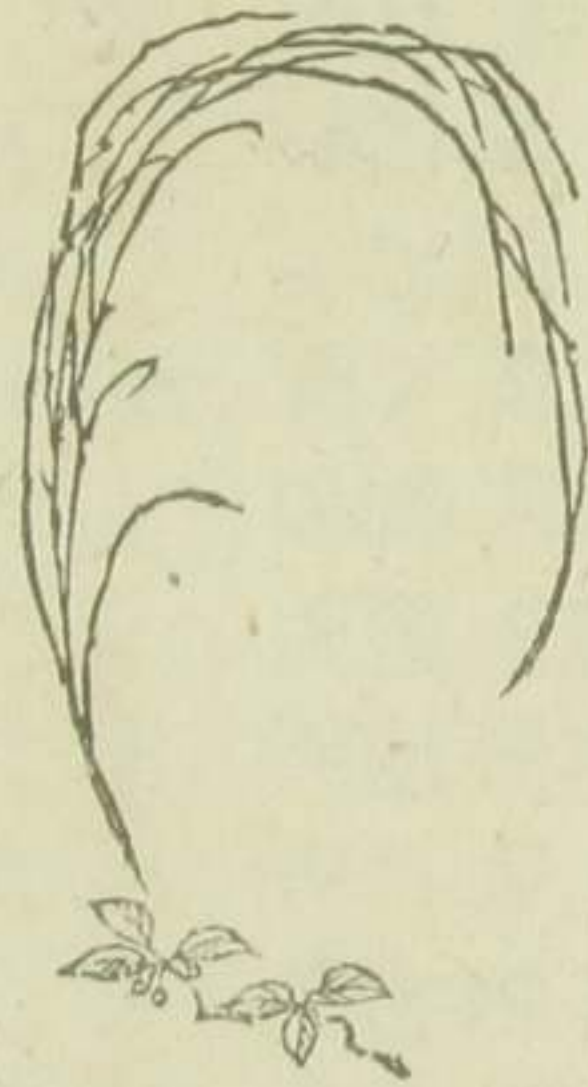


い さ み て 來 に し 道 の べ の は づ か し や	心 も そ ら に あ こ が れ て	に し き の 衣 玉 の 輿	見 む ど は す れ ど 見 え わ か ず く も り つ い	空 も な み だ に く も り つ い	こ れ を い ま は の 見 納 め に	か ち い で い 行 く つ ま の 家
--	--	--------------------------------------	---	---	---	---

風 に え 堪 へ 花 の さ か り も 夢 な れ や	か ど べ の 水 に 葉 も く ち て	住 み も な れ に い わ が つ ま の	ふ く 秋 風 の 夕 日 は 山 に 墮 ち に け り	さ し 柳 の 影 さ え て	川 を わ た り て ほ そ な が く	か た み の 言 葉
---	---	--	---	--------------------------------------	---	----------------------------

われのどつぎし
 いましは猶も
 いとけなく
 ふかき情も
 かなしさそふる
 ばかりずや
 はやも家路に
 わが身を送る
 小姑の
 行末どほき
 ながみは月に
 吠ゆるなり
 空に消えゆく
 木枯しの

年のとせを 夢とみて
 今ほさださへ 過ぎし身の
 色もうすらぎ 香もうせし
 誰か折る
 親同胞は うせはて
 還らむ家も なけれども
 いでねばならぬ つまの家
 せめておほへよ 夜の霧
 千草にむせぶ 聲はしめて



今○の○我○身○に○
 う○き○た○る○人○に○
 戀○す○る○な○
 せ○め○て○か○た○み○と○
 遺○し○お○く○
 加○ざ○し○に○添○へ○む○
 こ○と○の○葉○も○
 か○ざ○し○に○添○へ○む○
 こ○と○の○葉○も○

戀知りがほの いとしさよ

人○を○見○る○目○も○
 は○ち○ら○ひ○て○
 ね○よ○げ○に○見○ゆる○
 若○草○の○
 少○女○姿○も○
 な○よ○や○か○に○
 け○い○を○か○し○ら○に○
 遊○び○た○は○れ○し○
 身○な○り○し○を○
 寄○す○る○も○は○や○き○
 年○浪○の○
 同○じ○よ○は○ひ○ど○
 な○り○に○け○り○
 む○か○し○我○身○の○
 と○い○せ○の○程○に○
 ら○う○た○け○て○
 同○じ○よ○は○ひ○ど○
 ら○う○た○け○て○

國家の盛衰

青○丹○よ○し○奈○良○の○都○は○荒○れ○は○て○、
 伽○藍○徒○に○古○の○名○殘○を○留○め、
 星○月○夜○鎌○倉○の○府○は○廢○れ○つ○く○し○て、
 陰○鬼○空○しく○雨○に○哭○す○英○雄○
 の○骨○も○朽○ち○て○は○ま○た○土○塊○と○擇○は○ず○美○人○の○髑○髏○時○に○鋤○犁○に○
 觸○れ○て○出○づ○る○も○誰○か○當○年○の○俵○を○認○め○む○東○流○の○水○一○た○び○逝○
 い○て○復○た○返○ら○ず○人○間○の○富○貴○果○し○て○能○く○幾○時○そ○塞○翁○の○馬○上○
 歳○月○徒○に○過○さ○て○邯○鄲○の○枕○頭○芳○夢○早○く○覺○め○ぬ○け○に○や○祇○園○精○
 舍○の○鐘○諸○行○無○常○の○聲○に○ひ○い○き○沙○羅○双○樹○の○花○盛○者○必○衰○の○色○
 に○出○づ○萬○里○の○長○城○未○た○全○く○成○ら○ず○し○て○山○東○既○に○亂○れ○坑○灰○
 な○は○温○か○に○し○て○咸○陽○の○宮○殿○三○月○紅○な○り○あ○は○れ○萬○世○無○窮○と○

期○せ○し○始○皇○か○遺○圖○も○忽○ち○二○世○に○し○て○盡○さ○ぬ○盛○な○る○者○豈○に○
 竟○に○久○し○か○ら○ん○や○
 千○戈○天○下○に○旁○牛○し○て○兵○馬○倥○偬○肝○腦○長○へ○に○地○に○塗○れ○腥○風○到○
 る○所○に○吹○き○す○さ○ぶ○間○は○文○化○の○芽○の○萌○さ○む○由○も○な○け○れ○ど○一○
 た○び○馬○は○華○山○の○陽○に○歸○り○牛○は○桃○林○の○野○に○放○さ○れ○堯○雨○舜○風○
 太○平○の○氣○象○融○々○と○し○て○起○る○に○及○び○て○文○化○の○芽○茲○に○始○め○て○
 萌○す○太○平○愈○續○さ○て○文○化○い○よ○く○進○む○文○化○い○よ○く○進○み○て、
 生○活○の○程○度○い○よ○く○高○ま○る○所○謂○治○に○在○て○亂○を○忘○れ○ざ○る○の○
 危○機○實○に○此○際○に○胚○胎○す○祖○先○百○戰○の○山○河○に○生○れ○出○で○、
 目○に○
 旌○旗○の○翻○る○を○見○ず○耳○に○鞞○鼓○の○轟○く○を○聞○か○ず○文○恬○武○愜○安○き○
 に○慣○れ○て○ま○た○危○を○想○は○ず○人○益○利○口○に○な○り○て○益○死○の○惜○し○き○

を、知、り、欲、に、趨、り、利、に、就、き、舌、頭、に、は、能、く、風、を、生、ず、る、も、腕、は、
虱、を、捫、る、の、力、だ、に、な、く、風、俗、の、奢、移、に、赴、く、に、つ、れ、て、人、心、軟、
化、し、柔、化、し、終、に、腐、敗、す。文、化、の、餘、弊、是、に、於、て、極、ま、る。一、且、緩、
急、あ、ら、ば、安、ん、だ、能、く、之、に、當、る、を、得、ん、や。天、下、は、も、と、よ、り、殺、
伐、の、氣、多、く、し、て、は、能、く、治、ま、る、も、の、に、あ、ら、ね、ど、水、靜、か、に、な、
れ、ば、則、ち、腐、敗、す。文、化、長、く、續、け、ば、則、ち、亂、世、に、養、成、せ、ら、れ、た、
る、美、風、全、く、消、滅、す。敬、虔、の、心、は、阿、諛、の、心、と、な、り、剛、氣、の、習、は、
し、ば、柔、弱、の、習、は、し、と、な、り、敦、厚、は、輕、薄、と、な、り、誠、實、は、詐、偽、と、
な、り、義、理、は、黃、金、と、代、り、忠、臣、愛、國、の、念、は、自、利、私、欲、と、代、り、天、
眞、爛、熳、の、態、は、矯、飾、妖、粧、と、な、り、か、く、て、國、家、の、元、氣、内、に、盡、く、
外、に、一、時、の、盛、觀、を、呈、す、る、も、瓶、裡、の、花、の、如、く、久、し、か、ら、ず、し、

て、自、か、ら、枯、れ、ん、と、す。こ、れ、別、に、耳、新、し、き、說、に、も、あ、ら、ず、歴、史、
は、實、に、吾、人、に、向、つ、て、常、に、之、を、語、る、な、り。
世、界、の、文、化、は、も、と、中、亞、細、亞、高、原、よ、り、出、て、ぬ、而、し、て、印、度、は、
亡、べ、り、波、斯、は、亡、べ、り、ア、ッ、シ、リ、ヤ、は、亡、べ、り、埃、及、も、亡、べ、り、荒、
涼、た、る、山、河、當、年、の、殘、礎、を、覓、め、む、と、す、る、も、ま、た、得、べ、か、ら、ず、
歌、舞、の、地、鳥、雀、空、しく、悲、し、み、古、塔、月、影、の、寒、さ、に、鎖、し、蔓、草、武、
夫、の、夢、を、封、す、夕、陽、に、む、か、し、を、問、へ、ば、悲、風、千、里、よ、り、來、り、荒、
墳、に、英、雄、を、吊、へ、ば、零、露、長、へ、に、冷、か、な、り、嗚、呼、榮、え、し、國、は、亡、
び、ぬ、文、化、の、最、も、早、く、開、け、し、國、は、最、も、は、やく、亡、び、ぬ、而、し、て、
取、て、之、に、代、り、し、者、は、當、時、未、だ、榮、え、す、文、化、の、開、け、ざ、り、し、國、
に、あ、ら、す、や。

希臘は歐洲中にて最も先きに開けし國なり。其燦爛たりし文化は、今なほ之を討ぬるに足る。而して希臘は、紀元前はやくも、北方の文化の光被せざりしマセドンの爲に征服せられぬ。波斯は希臘よりなほ早く開けたる國にして、希臘をも夷蠻と侮り、幾度の大軍を發して之を討ちしが、波斯ほど文化の古からぬだけに反て兵力は強く、果てはマセドンより起り、未だ長く希臘の文化の空氣を呼吸せざる歴山王が鐵蹄の下に蹂躪されぬ。かくて、豪氣八紘を蓋ひ、雄圖世界を卷きたりし歴山王も、一たび波斯の空氣を呼吸し、その女子のやさしき手振お接するに及ひて、酒に荒み、色を漁し、爲めに其天命を縮めて、夭折せり。歴山王は實に劍を把て波斯を倒

せり、而して波斯はまた文化の暗刃を以て之を報したりといふも、必ずしも過言にあらず。まことや宴安は鳩毒なり。看來れば、英雄の事を誤るもの、獨り酒と色とのみにあらざるなり。羅馬は希臘に次いて開けし國なり。其強盛なること、實に世界に比なかりしも、文化の餘弊は、其元氣を銷磨せしめぬ。百代の勇王エキサンチーブスを辟易せしめ、萬古の名將ハンニバルを囚ましたりし當年の羅馬人の子孫も、あはれや、アルブル以北の野蠻人の爲に亡ぼされぬ。其餘、大にコンスタンチノーブルに榮えて、第二の希臘を現出せしも、これも亞細亞にて未だ開化せざりし土耳其古の爲めに滅せられて、

其○文○華○も○一○時○は○當○時○始○め○て○用○る○出○し○た○る○大○砲○の○丸○に○摧○碎○
 せ○ら○れ○た○る○に○あ○ら○ず○や○な○は○サ○ラ○セ○ン○人○が○歐○洲○の○南○部○に○亂○
 入○せ○し○を○見○よ○當○年○の○蒙○古○人○種○が○歐○洲○の○東○部○を○蹂○踐○し○た○る○
 を○見○よ○今○日○歐○洲○に○在○て○も○文○化○最○も○す○ま○ざ○る○露○西○亞○の○兵○
 力○の○尤○も○強○き○を○見○よ○總○て○の○點○に○於○て○未○開○國○は○開○化○國○に○負○
 く○る○も○唯○兵○力○に○訴○ふ○る○競○争○の○み○は○つ○ね○に○之○が○勝○を○制○す○る○
 事○は○示○せ○る○に○あ○ら○ず○や○
 之○を○近○く○支○那○に○覓○む○る○に○六○國○を○平○吞○せ○し○者○は○當○時○文○化○の○
 最○も○備○は○ら○ざ○り○し○秦○に○あ○ら○ず○や○爾○來○自○か○ら○中○華○と○誇○り○他○
 を○夷○蠻○と○け○な○し○來○り○し○も○此○夷○蠻○に○一○た○び○亡○ぼ○さ○れ○て○金○と○
 な○り○二○た○び○亡○ぼ○さ○れ○て○元○と○な○り○三○た○び○亡○ぼ○さ○れ○て○今○の○清○

と○な○れ○る○に○あ○ら○ず○や○清○も○今○は○は○や○腐○敗○し○ぬ○更○に○代○て○之○を○
 取○る○も○の○は○果○し○て○い○づ○れ○の○國○ぞ○や○
 更○に○之○を○我○國○の○盛○衰○に○考○ふ○る○に○文○化○大○に○熟○せ○ん○と○す○れ○ば○
 國○力○常○に○消○耗○せ○り○神○力○皇○后○が○三○韓○を○征○伐○し○玉○ふ○に○至○れ○る○
 ま○で○は○我○國○の○未○だ○全○く○開○化○せ○ざ○る○時○に○し○て○ま○た○國○力○の○最○
 も○強○き○時○代○な○り○き○佛○教○入○り○儒○教○入○り○外○國○の○文○化○我○國○に○侵○
 入○す○る○に○至○り○て○わ○が○國○力○漸○く○衰○へ○ぬ○平○安○朝○は○文○化○の○餘○弊○
 の○其○極○に○達○せ○し○時○代○な○り○平○安○朝○と○始○終○せ○し○藤○原○氏○が○一○族○
 朝○廷○に○跋○扈○し○長○袖○緩○帶○遊○戯○こ○れ○事○と○し○秦○平○に○慣○れ○て○武○を○
 講○ず○る○者○な○く○春○の○朝○に○花○を○歌○ひ○秋○の○夕○に○月○を○咏○じ○優○柔○習○
 を○な○し○淫○靡○風○を○な○し○征○討○邊○防○の○事○は○一○に○源○平○二○氏○に○委○し○

武士よ、地下人よとけなし去りて、之を齒牙にだに懸けざりしが、時勢は一轉しぬ。やさしき筆執りて、優劣を歌合せに争ふの時代は去りて、愈劍を執りて、天下の權を争はざるを得たる時代は來りぬ。而して言ふまでもなく、藤原氏は、當時文化の感化を被らざりし武士の爲めに蹴落されぬ。平氏藤原氏に代りて、天下の權を握るにいたりしも、不幸にして、空氣の腐敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟見るく、優さ男となりぬ。春風簾前舞腰、梟々として、満都の女兒を腦殺したる紅顔の美少年が、富士川の水鳥の聲に腰をぬかしたるも、また怪しむに足らず。一門浮沈の際に臨みても、歌集を懐にし、琵琶を抱き、横笛を吹く風流才子のみ多くして、知

盛○敦○盛○の○二○三○人○を○除○く○の○外○ま○た○武○士○ら○し○き○者○な○か○り○け○れ○ば○こ○れ○も○言○ふ○ま○で○も○な○く○源○氏○の○た○め○に○亡○ぼ○さ○れ○了○り○ぬ○源氏北條氏は、京華の地を去りて、當年の東夷の中心ともいふべき鎌倉に居りたれば、急には軟化せざりしか、足利氏は、平氏の轍を蹈みて、京洛に居りたれば、早く墮落し始め、其軟化したる心の跡は、金閣寺、銀閣寺に残り、實力未だ添はずして、早く驕奢に耽り、尾大掉はず、十三代の間、紛々擾々として過ぎ去り、遂に義昭に至りて、全く滅びぬ。義昭は家を亡ぼせしほどの人にて、固より將軍たるの伎倆はなけれど、さすがに文化の餘徳、否餘弊には、天公亦慰吾生、否、月日蘆花淺水、秋など、詩だけは、到底、當時の武士の真似の出來ぬほど上手な

りき足代氏に代て天下を取りし信長を見よ、彼は三好の舊臣の心を盡くして鹽梅せし第一等の料理を食ひて、まづい物喰はすと怒り、第二等以下の料理を舌打鳴らして飽食せしまで、に都人士の贅澤の味を知らざりし無骨漢なりしに、あらずや、徳川氏は草茫々たる武藏野に府を設けしが、當年の風流男の言問ひし鳥の名の懺をなして山奥ならねど、住めは茲も都となりぬ、武者類なかりし三河武士の子孫も、花の大江戸に、大平の春に酔ひ、河原乞食に接し、淨瑠璃に耽り、章臺に流連して楊柳を折るに至りては、骨は海月よりも軟かになりぬ、此際、おらかどんどに觸るなら觸れ、腰の朱鞘は伊達じやない、と歌ひて、公然獸行をなし、南海西海の武士

のぶこつなるは此上もなければども、ぶこつなるだけに、都門の弊風に軟化せられず、豪氣發する所、勤王の魁首となりて、終に能く幕府を倒し、にあらずや、漫に文華と云ふ勿れ、漫に開化と云ふなかれ、文化はなほ酒の如し、酒を飲むものは、必ず酔ひ、文化に耽める國は必ず亡ぶ、歴史は正直なり、常に人間に向てこれを語れども、おらや魚市に入て腥きを知らず、大平の安きに慣れて、人また危きを思はざるなり、嗚呼、國家昏亂して、忠臣現はれ、天下大平にして、小人陸梁す、輕裝肥馬の間に酔生夢死する者、共に古今の興亡を語るに足らず、悠悠たる行路、誰に向ひてか、邦家百年の大計を説かむ、一窓の夜雨、そゝるに古を憚し、慨然として眠る能はず、机を叩い

いましが清き
 のぞみの光り
 かいやけり。

あはれ美しき
 少女よ。

世にも稀なる
 人のたねとも
 思はれず。

御神とばかり
 仰がれて

あまのつ空より
 あもりたる

あはれ尊き
 少女よ。

少女子

て大息すれば、孤燈耿として三尺の秋水寒し。



さ○け○む○ば○か○り○の○せ○て○支○へ○よ○そ○の○膝○に○
 浮○世○の○塵○に○ま○つ○は○れ○て○
 わ○れ○を○憐○れ○ど○思○ひ○な○ば○
 あ○は○れ○な○つ○か○し○さ○少○女○子○よ○
 あ○は○れ○戀○し○き○少○女○子○よ○
 髪○は○か○も○ひ○に○う○ち○ゆ○る○げ○
 口○は○な○さ○け○に○動○け○よ○や○
 ら○も○ひ○に○も○ゆ○る○わ○が○舌○に○
 し○ぼ○し○許○せ○よ○そ○の○頬○を○



お○つ○き○情○の○や○ど○る○ら○む○
 ゆ○た○け○き○胸○の○や○は○ら○か○さ○
 あ○は○れ○や○さ○し○き○少○女○子○よ○
 花○よ○り○あ○か○き○唇○を○
 も○る○い○も○清○き○そ○の○息○に○
 春○風○か○よ○ふ○心○地○し○て○
 む○く○ろ○も○解○け○む○ば○か○り○ず○や○
 わ○れ○を○憐○れ○ど○思○ひ○な○ば○
 あ○は○れ○な○つ○か○し○さ○少○女○子○よ○

頭、の、客、に、齡、ど、て、親、わ、
 一、の、と、に、の、さ、頭、が、が、
 番、の、と、に、の、り、の、も、首、
 に、の、す、し、て、扇、い、り、中、も、途、
 て、の、め、す、て、ば、つ、も、と、通、な、の、
 卒、の、ば、そ、ち、も、一、は、り、す、い、
 業、の、杯、れ、つ、座、の、肥、は、ひ、
 せ、の、の、よ、か、の、り、は、ひ、
 し、の、ど、左、右、に、居、な、が、れ、た、る、二、十、人、わ、ま、り、の、客、
 こ、の、と、や、り、忙、し、く、こ、の、春、の、試、験、に、わ、が、筆、
 よ、り、始、め、て、平、生、お、ど、な、し、き、こ、と、
 齡、の、い、つ、も、一、座、の、問、題、と、な、り、け、る、が、黒、絹、の、五、つ、紋、の、羽、織、
 ど、さ、り、と、て、は、顔、肥、り、て、赤、く、ま、だ、皺、ひ、ど、つ、も、な、き、に、そ、の、年、
 て、頭、の、中、通、り、は、禿、げ、つ、く、し、て、ら、く、と、毛、一、本、も、な、け、れ、
 親、が、も、て、な、す、心、ば、か、り、の、酒、宴、の、上、座、に、は、本、家、の、宗、十、郎、と、
 わ、が、首、途、の、い、は、ひ、に、親、戚、や、近、隣、の、ま、た、し、き、人、々、を、招、き、て、

か た 袖

涙 の 味

く、ら、く、悲、し、く、
 雨、に、ふ、け、ゆ、く、
 泣、く、も、う、れ、し、や、
 二、人、し、て、
 浮、世、の、や、み、に、
 風、あ、れ、て、
 鳴、呼、わ、れ、つ、ら、さ、
 世、の、中、に、
 少、女、子、と、
 は、か、な、き、戀、に、
 泣、き、し、よ、り、
 覺、は、て、き、
 涙、の、味、を、
 覺、は、て、き、

様○子○な○れ○ば○よ○き○折○と○ほ○つ○と○一○息○つ○き○團○扇○片○手○に○座○を○た○ち
 て○庭○に○出○で○ぬ○雲○は○れ○つ○く○し○て○空○一○杯○の○星○息○吹○か○ば○落○ち○む
 ば○か○り○の○夏○の○夜○な○り○今○ま○で○は○氣○付○か○ざ○り○し○蛙○の○聲○に○は○か
 に○耳○だ○ち○て○聞○ゆ○池○水○を○め○ぐ○り○て○築○山○の○上○に○の○ぼ○れ○ば○酒○席
 の○さ○わ○ぎ○は○青○葉○に○隔○た○り○ぬ○稻○葉○の○上○を○わ○た○り○來○て○わ○が○懷
 を○た○づ○ぬ○る○夜○風○草○葉○の○露○を○さ○そ○ひ○て○身○に○し○み○て○涼○し○く○さ
 や○ぐ○熊○笹○の○中○よ○り○迷○ひ○出○で○ふ○わ○り○と○輕○く○飛○び○た○つ○螢○の
 行○末○遠○く○仰○げ○ば○高○き○金○剛○葛○城○の○二○山○天○外○へ○積○翠○を○横○へ○一
 條○の○大○和○川○平○野○の○中○に○銀○蛇○を○走○ら○す○な○ど○な○れ○に○し○故○郷○の
 山○川○の○景○色○な○が○ひ○る○も○今○宵○ば○か○り○と○思○へ○ば○何○と○な○く○な○つ
 か○し○き○必○地○す。

勉○強○な○る○こ○と○な○ど○數○へ○た○て○い○さ○て○も○い○か○に○し○て○こ○の○や○う
 な○善○い○御○子○が○生○る○事○が○ど○口○々○に○褒○め○そ○や○さ○れ○て○わ○れ○は
 た○い○汗○を○流○す○ば○か○り○な○る○に○さ○す○が○父○は○微○醉○機○嫌○の○口○先
 輕○く○こ○れ○が○世○に○云○ふ○鳶○の○生○ん○だ○鷹○で○が○な○ご○ざ○ら○う○な○ど
 覺○え○ず○頭○を○叩○い○て○合○槌○う○た○る○に○今○更○に○耻○し○く○聞○く○に○え
 堪○へ○て○う○つ○む○け○ば○明○日○は○い○よ○く○か○た○ち○か○さ○て○東○京○に○て
 は○何○と○云○ふ○學○校○に○入○ら○る○い○ざ○せ○め○て○今○宵○は○一○杯○す○で○さ○れ
 よ○ど○飲○め○ぬ○口○に○杯○強○ひ○て○侑○め○ら○れ○止○む○を○得○す○目○を○つ○ぶ○り
 て○飲○み○だ○す○こ○と○も○い○く○そ○た○び○一○座○の○醉○も○杯○と○共○に○ま○は
 る○に○つ○れ○て○今○迄○話○柄○の○中○心○と○な○り○し○我○を○ば○よ○そ○に○し○て○米
 の○出○來○の○よ○し○あ○し○な○ど○處○柄○と○て○土○臭○き○話○に○實○が○入○り○た○る

われは今故郷を去りて、東京へ學ばむとするなり。年頃日頃
起きても思ひ寐ても思ひたるわが宿望かなひて、われは又
他念なし。我が志は大に、わが前途は遠し。われは年少の空想
に驅られて、功名手に唾して收むべしと速了し、故郷を去る
ことをつらしとも思はねば、父母の膝下をはなる、ことを
憂しとも思はず。都にのぼりての後の事、學を卒へての後の
事など想像に想像を重ねて、そいろに肉躍骨鳴りて堪へが
たく、心はいつしか空にあてがれて、我身はさらにうついど
も覺えず。頭自から低り、眼自から閉ぢて、われは寤めながら、
未來を夢み、空に満つるはかり。此樓閣を描き出して、學士の
稱號を受くるかと思見れば、やがて海路遠く洋行し、今まで佛

蘭西の都にありしかと思へば、忽ち東京の大路に二頭引の
馬車を驅りけるに、思ひもかけず後の方に、おや若さま此
處に居らしてと呼ぶ聲す。
この一聲に、われは空想の夢さめて、うついに回れば、金剛山
舊に依りて前に聳え、身は庭の一隅に立てり。覺えずどなた
と口走りしが、耳になれたる聲音に、それと思ひ返して、藤さ
お茲へ来てお涼み、あの金剛山か薄黒う見えて、大和川がほ
の白う見えて、風にゆらるゝ稻葉のかげから、螢が幾匹も飛
び出すなずは、實に好い景色ぢやないかと、愛想ふりまきし
つもりなるに、はいど氣の乗らぬ返事しながら、浴衣姿はの
白く、なならぬ句と共に、我に近寄りて、あなた、明日はもうお

たちあそばすのね、いふもはやうるみ聲なり、
この春までは學校の寄宿にはいつていらしても、日曜毎に
は、罷歸りになつて、お目にかゝることが出来ましたが、これ
からはる／＼東京へいらしたら、またいつお逢ひ申されま
せうか、わたしは心細くて、ほ／＼、このやうに慣れ／＼しう
申して、御免あそばせよと、涙をつゝ、微笑ひ聲さびしきに、わ
れはわざと落付きはらひて、なに、東京へ修業といつても、ほ
んの四年か五年の間、それに、毎年夏休みと冬休みには、必ず
歸つて來るからと云へば、それにあそばしてもとばかりに
て、あとはえ云はでさしうつむく。
嗚呼、わが功名の念と少年進取の氣象とは、我を驅つて狂せ

しめ、心中のよろづの懸念を排し去りたれど、全く排し難き
は、たゞ一事この可憐の少女を故郷に残し置き、知らぬ他
郷にひとり迷ひ出て、むこど、さすがに後髪ひかるゝおもひ
なきに非ずされど、この一念わが功名進取の念とたゝかふ
には、餘り微弱なり、もとより出で、歸らぬ旅にはあらず、何
事もたゞ功成り、名遂げん後にと、思ひ定めたる身のよしや
二三年相見ずとも、われど我が心を勵まして強ひて之
れを抑へたれど、今まのあたり此の人を見、その優しき聲を
聞き、ては、胸はまたかき亂れぬ、わが切なる心打ちあけむと
思ひ、しこどは、あまたゝびなりしかど、いざとなれば、心憶し
て、それとは云ひ得ざりし不甲斐なさを、われ今立ち去らば、

天地の間に、父なく、母なく、たよる所なき、孤兒の、更に如何なる憂目や、見むと思へば、人の涙は、まだかゝらねど、わが泣くよりも、悲しく、世がまゝになるならば、率て行きて、共に學ばむにと、思ふも、其の甲斐なく、さらばとて、少年の客氣の、人世は、夢、功名は、眼を過ぐる雲烟と、悟るまでには、至らず、われは胸せまりて、仰いで、たゞ涙を飲みぬ。
わが家の隣に、木村兵藏とて、さまで貧しからず、また富めるにも、あらざる人、年久しく住へり、妹のお龜と、たゞ二人の兄弟の、親は、貧苦の中に、業を勵み、子を育て、家道や、ゆたかになりしほどに、妹のお龜は、大阪の商人に嫁ぎ、兄の兵藏も嫁迎へて、やれ嬉れしや、これ、重荷をろしたと、喜ぶと共に、

年來張りつめし氣ゆるみて、おはれや、父は、がつくりと、先づ倒れ、間もなく、母も、その跡追ひて、往生せしは、わが漸く物心覺えはじめし頃とかや、お龜のとつぎし商人、一時の商業上の失敗に、自暴飲より、身を放蕩にも、ちくづしたる末、美しきお龜が、今更鼻につきて、色々難避つけて、の離縁沙汰、お龜薄情なる夫には、心残らねど、たい一人の娘の子、かゝる人のもどに置くは、氣づかはしとて、親子も、ろとも泣く、生家へ歸ることは、歸りたれど、こゝにも、雨洩る木の下蔭の、兩親は、已に世を去りて、兄兵藏の夫婦は、揃ひに揃ひし義理知らず、人でなしの、不人情の、無慈の、物惜しみの、生爪は、がしても、おのれの利得になるものは、見遁がさず、まことの妹を、妹とも

思はずしぶく引き取りたれど、よるとさはるとあてこす
りて、出て行けよと云はぬばかりのもてなし、これまで時々
生家歸りせし折には、よい身代の家へ行かれて、洵に御仕合
ど、追従こそ言ひたれ、かくばかり邪見なる嫂には、あらざり
しに、兄も嫂の來ぬ前は、かくばかり非道なる人には、あらざ
りしに、今は食物の好嫌に至るまで、前とは打つて變はれる
に、これはとばかり呆れはて、人を恨むには、あらぬど、女
心の愚痴かのづからこぼれて、涙の乾くひまなく、もどより
親子二人とも、只座して兄の厄介とならむには、あらず、女
の瘦腕ながらも、裁縫、洗ひ張り、機織り、さては茶摘など、力の
限り働きて、二人の食料は入れて、さまで世話にもならざれ

ど、なほよき顔せざるに、さらばとて我家より二町ばかり東
の方に、さゝやかなる家を借りて、親子ふたり細き煙をたて
ぬ。年ははや女盛りは過ぎたれど、器量よく、人柄もよければ、
子連にてもと所望する人ありたれど、男の薄情には、懲りぬ
ど、世をすね通しけるも、あはれなり。
藤子は、この薄命なる佳人の一人娘なり。七八年のむかし、わ
れこの不幸なる親子の事は、さゝ居たれど、縁もゆかりもな
き他人の事とて、未だふかくは親しみはせさりしほど、或日、
他處よりの歸るさ、驟雨に遭ひて、家里遠き野中の路の、一株
の老松の蔭に身をちいめて、晴間を待ちけるに、折りしも通
りかゝれる可愛らしき小娘の、われを見て、福井の坊ちやん、

一所にこの傘へはいつていらしやいなと云ふは顔だけは、相知れる藤子なれば有難うとて、直ちに松蔭より飛び出して、そのさしたる傘の中に入る。その傘いと古く一處紙が破れて居れど、大人持ちの傘なれば、子供二人を蔽ふには十分なり。藤子の左手に薬瓶もてるを見て、傘はわれ持んとて、いなむを強ひてとりてさしかざし、その薬瓶は、母様が病氣なのど問へば、はい、お醫者様へ薬取りにいつた歸りがけな、よといふを、話の皮切りにして、歩む路すがら、氣になるまゝに、問ひたすに、藤子の母は熱病にて病床に臥せる事、働くことが出来ずして日々の費用に困り居ること、されど、兵藏夫婦は、ろくに見舞ひにも來ぬこと、醫者が薬代を催促する

こと、兵藏の家へ借りにゆきしには、はじめの二三回は、しぶくながら、も貸して呉れしが、今は見限りて取り合うて呉れぬことなど、聞けばさくほど、あはれにも悲しく、われは子供心にも氣の毒に思ひて、小遣にとて、わが持ちし銀貨銅貨取り交せて、袂にゐるだけさらけ出し、藤子の家の前へ來りし時、これは、少しばかりなれど、今の御禮にとて、強ひて其袂に押し入れて、雨の小止みせしを幸に、一禮をこゝろ走りかへりて、ありし事、残らず母に語りけるに、藤子泣くく來りて、さきにわが與へし錢をさし出す。其の由聞けば、御志はうけしけれど、何のゆかりもなきに、このやうなものを戴くべき筈あらねば、早く返しまゐらせよ、如何に幼くとも、此の位の分別

はあるべきにと、いたく母親に叱られしとなり。義理がたき人ど、わが母も涙を催し、今まで病氣のよしは聞き居たれど、かくまでとは知らざりしとて、更に若干の錢添へて、藤子と共にその家に至りしが、この後も不自由なきやうにと母が度々心付けせしほどに、病やうく、軽くなりゆきて、遂に全快するに至りしかば、親子もろとも我家に禮に來り、この御恩死ぬとも忘れじ、御恩返へしの萬分一には、この身如何やうにもつかひ玉へ、またお役にたつことあらば、この娘も召しつかはれよと、涙と共にいつはらね感謝の意をのぶれば、なんのあの位の事に、反て痛み入る次第、お娘子もこれからは度々お遊びに、いいで、それにまた失禮ながら、綾太郎も復

習いたす時は、何にても教へ申しますから、御遠慮なくと、學校にゆく、の資なきを、知りての思ひやりに、親子涙にかきくれ、さらば御言葉に、あまへてと、よろこびて、藤子日毎我家に通ひ來りぬ。思ひもかけぬ相合傘が縁となりて、われは今藤子の師匠なり。平生外に出で、荒き遊び事するを嫌ひ、部屋にのみ閉ぢ籠りて、書をよみ、繪を見ること、が此の上もなき、樂しみななるわが身に、とりては、日に一時間ばかり、読み書きを教ふることに、反て面白くのみ思はれて、熱心に教ふれば、藤子又熱心に覺け、日として、机をならべぬ日はなく、口輕の下女に、雛人形の一對と、なぶられ、いよく親しむにつれて、笑の末の罪なき言ひ争ひも、はや夫婦喧嘩の御稽古かと、冷

教へし事は、能く記憶して、進歩著しきに、われも教ふるに、張
 合わけて、いつも藤子の来るを心待ちにし、その来ぬ日は、何
 どなく不快を感じたりき。われ幼年の時は、内氣と云ふより
 は、寧ろ陰氣と云ふべき性質なりしに、藤子来るやうになり
 てより、笑聲日にわが部屋より洩るゝに至りぬ。時にはかな
 き憂鬱に沈むことあるも、藤子を見れば、忽ち之を忘れぬ。我
 幼時の家庭は、藤子の爲に春を生ぜりと云はむも不可なし。
 折々はまた藤子の家をれどつれしことありしが、そのおど
 なしく、やさしく、まめやかに母につかへし様は、更に一層我
 心を動かしいぬ。これが眞の妹ならばと思ひしも、われに同胞
 なきが故のみにはあらざりき。

やかされしこと幾度ぞや。
 親も娘も人柄よくてたよりなく、正しくして不幸なるを
 はれどのみ思ひしわが心、いつの間にか戀どはなりけむ。華
 美なる粧して、白粉に顔を埋めたるよりも、飾らぬまゝの素
 顔のうるはしきがゆかしく、藤子が着るものも着得ず飾る
 ものも飾り得ずして、よろづ物足らぬ有様は、反て我が心を
 動かしいぬ。母が見兼ねて、夏冬折々の着物與ふれば、涙をこぼ
 して喜ぶ顔見るだに、いというれしく、日々母より貰ふ菓子
 の一半を藤子に分ちて、その喜ぶさまを見ること、我に取り
 ては、言ふに言はれぬ樂しみなりき。藤子はさとり早き女性
 なり、よしや一を聞いて十を知るとまでは至らざるも、わが

わが小學校を卒業して中學校へ入りし後も藤子なほ時々
わが家に来て學べり藤子今は嬌羞を帯びはじめしばかり
の年頃の小女なり無心に笑ひ興じふざけ合ひし昔とは異
なりて互に遠慮するやうになりぬゆかしき少女の顔たゞ
いつまでも穴の明くばかり見たけれど目の視線と視線と
相逢ひては何となく耻かしく思はず知らずよそ向き見て
見ぬふりし見ぬふりして見るも我れながら訝かし机をへ
だてゝ差し向ふに藤子がやさしき鼻息わが手にかゝりて
は身体がくくど嬉しきやら耻しきやら今まではづかづか
云ひし事も自ら口しぶりて別れて後あゝ云へばよかりし
と悔むこと多かりき。

わが家より中學校に通ふ路は、さまで遠くもあらざるに、父
がわざ／＼われを寄宿舎に入れしは、甘き親の手一つにそ
だつるよりも、多くの人の中にもまれて、自ら男らしくなら
しめむとの主意とればし。わが陰氣なる性質は、藤子と親し
むにつれて、一變してやゝ陽氣となり、寄宿舎に入るに及び
て、再變してやゝ活潑となりぬ。望みもおほさくなりぬ。早く
中學を卒業して都に上り、大學に入り、世に出で、名を成し、
功を立てむと思ふ一念、今は絶ゆる間もなく、心中にもゆれ
ど、住みなれし家もさすがに戀しく、日曜日を待ち兼ねて、勇
み家にかへれば、藤子も必ずれどづれて別になれ／＼しき
話どてはせざれど、顔だに見れば、何となくうれしかりき。

わが身を立つる未来の空想いよ、大くなると共に、また粗になり、たい國家の爲め、人民のため、どのみ念じて未だ一身一家のこまかきことに及ぶ違なければ、末は藤子をして、うするどまでは考へ至らざれど、かゝる可憐の少女を、我側よりはなして、知らぬ他人の手に渡さむは、惜しき次第と、いっしにか思ひそめぬ。

逢うてはたいなつかしく、別れてはたい逢うて見たく、人の手にわたすはいやなりとのみ思ひし一念、今年春に至りて更に一步をすゝめぬ。藤子の母の病めりと聞きて、ある日曜日、見舞ひにゆきしに、思ひしよりもやみさらばひけるが、我を見ては、ろくど涙をこぼし、蟲より細き聲音あはれに、

このやうに疲れましては、もはや助かることは出来ず、まいたが、たゞ此の娘の行末を思ひましては、どういたしても目がつぶれませむ。此の上の御願には、他にはたよる處のない娘の身、どうぞ見捨なくと、跡は涙に咽びてえ言はず。そのやうな弱きこと言はれずと、安心して療治なさるゝがよい、氣が病をたすけますからと慰めて、寄宿舎にかへりしが、その次の日曜に外出せしときは、藤子の母ははや此の世の人にはあざりき。

藤子引きとるべき筈の兵藏夫婦が、あの通りの人なれば、可愛想なりと我が言ひだすよりも、さきに親が心配して、わが家にて、仲働につかはむと云ひしに、兵藏夫婦もとより異存

なく、藤子はたゞ泣いて喜びしかば、事はやくまとまりて、可
憐の少女、今はわが家の人となりぬ。われも又中學を卒業し、
寄宿を出で、家に歸り、日々顔見合せて胸はつねにさわぎ
ぬ。さるにても、わが平生朋友と議論などして、口角泡を吹く
ばかりの勇氣も藤子に對しては何處へやら、幾度かおもひ
決したれど、遂にあらはに言ひ出すの勇氣はなかりき。
今宵はからずも人目絶えたる庭の一隅に、たゞ二人相對し
ては、嬉しさ餘つて苦るしさ言はん方なし。されど思ひかへ
すに、人目なき處に、わざ／＼我を尋ね來りて、名残を惜しみ
て、平生になくなれ／＼しく言ひしは、よく／＼思ひせまり
ての事なるべし。一度かく思ひ出せば、是迄藤子の素振の何

どなく、それは／＼せしも、故なきにあらざりし、我素振も、恐ら
くは、それと推せしならむ。今ははや心の底、わざ／＼口に出
す、必用もなし。といさみ、たつまいに、唯藤とばかりにて、思ひ
にも、ゆるわが手をさし、のべて、闇に白き藤子の纖手を握れ
ば、答はなく、たゞはら／＼と我が手の甲に落ちて、聲ある
情の涙、熱く、胸の奥にしみ、わたりにぬ。我がれもひは之に、知れ
ど、顫へる手にかたく、締めて、藤そんなら暫くあはないよ。ど
うぞ、御身体を大切に、お前も無事でと云ふ折りしも、突然、母
來りて、綾太郎はそこにかえ、お客様をさし置いて、何を
居ります、えと、咎め玉ふ聲、平生のやさしき聲とは異なりて、
かど、だちて聞えけるに、われは、さながら頭より水かけられ

たるが如き心地せり。

この翌朝、われは出發して、東京へ上りしが、半年毎の休暇には、必ず家に歸りぬ。われと藤子との間は、近くしてなほ遠かりき。

わが母方の縁ある家に、玉子とて、藤子と年輩同じばかりなる少女あり。これも幼時より我家に來なれて、相親しみしが、われは何となくその人を好まざりき。我幼時の性質、男子にして女子なりとすれば、玉子は、むしろ女子にして男子なり。活潑にして、にぎやかにして、よくしやべり、よく笑ひ、氣輕にして、罪なく、惡氣もなければ、我が打ちとけて親しまざりしは、世に云ふ蟲がすかぬものにや。されど、好かぬ人として、われ

よりすいみ出で、おらはにこれを隔つるほどの勇氣もななく、うはべは仲好く遊びしかば、人には更なり、玉子にも、わが心それとは見ざりしなるべし。

玉子と藤子とを比ぶれば、藤子は海棠のや、さびしきが如く、玉子は牡丹のにぎやかなるが如し。玉子のからだは肥へたりといはむよりは、瘦せたる方にて、藤子のからだは瘦せたりと云はむよりは、肥へたる方なり。藤子の顔はや、圓く、玉子の顔はや、長し。色はいづれも白けれども、藤子のや、黒きは、貪に苦しめるが故にや。玉子の目は、ぱつちりと涼しく、藤子の目尻は、少しさがりて、かはゆらし。殊に玉子は、富みたる家の娘なれば、衣服、髪、かざり、すべて美をつくして、手

入よき花壇の花とも見るべく、藤子はなにかたちを顧る暇なく、いして、ありのまゝに打ちまかせたるは、日陰の花とも見るべく、よしや器量は下れりとするも、藤子があはれなる身の上は、まづ我が心を惹きけるに、器量とても下れるにあらず。殊に玉子が性質活潑なるに反して、藤子のあくまで、かどなく、しどやかにして、而かも陰氣ならざるは、何となく我が心にかなひぬ。われは藤子を愛すといはむよりは、むしろ隣れみたるなり。人なき折々、やさしき言葉かけていたれば、はやほろ／＼と涙くむ有様に、やさしき女性と、われも覺はず涙を誘はれしことも幾度ぞや。

我母も、藤子を愛してつねに、其の人柄をほめたれど、そはひ

と通りの情けにて、玉子の方が更にその氣に入れるが如し。玉子の来る日は、機嫌どりわけてよく、折々いさかひすれば、理非はたいさねで、頭ごなしに我を叱るが、つねなりしに、客大事と思ふこゝろのみにもあらざるべしと思はれぬ。

玉子、郷里の高等小學校を卒業して後は、西京に出で、高等女學校に學べり。たちの好き藤子にも深く學ばしめなばと思へど、甲斐なし。ひと年の夏、休暇の期限、盡くるに垂んとして、明日は出發せむとせし日、母といろ／＼物語りの未、母は言葉を改めて、丁度明日は玉さんもれたちだから、京都まで一所につれていておあげ、今日うちへ来て一晩とまつて、そして明日こゝから一所に立つやうに約束してあるからと

いふに、さうですか、氣の無き返事して、何思はず、藤にも、今少し學問させて見たいものです、が、口走り、後ではつと思ひしが、母は忽ち聞き、咎めて、そうは手が廻りませぬ、藤は萬事おつかさんが引きうけて世話するから、お前までが心配しなくてもいゝよ、ど、はや目に角たてまへる様子なるに、我もこのまゝにてはすまされず、今の女子は學問すると、誰でもお轉婆になります、が、藤のやうなかどなしの人ならば、まさかさうでもあるまいと、ふと思つたのですと云へば、それでもお前、かどなし、いばかりが、能でもありません、玉さんを御覽なさい、利口ではきくして、品もよいし、家柄もよいし、それは、く、藤なづのくらべも、んではありませんよ、と、意味

ありげなる言葉、うちけさむと、口までは出でたれど、われを見つめ、玉ふ眼の、あまりに眞面目なるに、われど、こゝろを抑へて、そのまゝ、止みぬ、これというて話すべきこともなければ、またしばらく逢へぬ、別れど、おもへば、何となくしみく、はなして見たく、強いて、要事こしらへて呼びよせて、眼にも、云はするが、せめての心やりなりしが、待たぬ、玉子は、や旅の用意と、のへて來りて、われになれ、くしく笑ひ興ず、われ京都の悪口いへば、玉子は、東京の悪口言ひ、互ひに學ぶ土地の最負して、からかひあひたる末、ふとした事が、氣にさはりて、はては、口のみに、といまらで、手を出して、争ひ、いさま、通りかゝりし、藤子の目

に◎は◎如◎何◎に◎見◎え◎け◎む◎翌◎朝◎出◎立◎の◎時◎見◎れ◎は◎藤◎子◎の◎目◎泣◎き◎は◎
 ら◎し◎た◎る◎痕◎あ◎り◎ひ◎ど◎夜◎も◎何◎に◎泣◎き◎は◎ら◎し◎た◎る◎涙◎が◎ど◎東◎京◎
 に◎上◎り◎て◎の◎後◎も◎氣◎に◎か◎り◎し◎。

その年の冬休みは、さゝはるごとありて、郷にかへることを
 得ず、あくる年の夏に至りて歸りて見れば、藤子ははや我家
 に居らざるに、われは胸まづ潰れぬ。どうかしましたかと母
 に問へば、たゞ暇を出したとばかり、何かあやまちでもあり
 ましたかと問へば、別にあやまちはないが、少しこちらに都
 合があつて、至極曖昧なる答なり。われは、心も心ならず、或
 時、下女を物陰によびて問へば、いい人でも出来たんでせう
 よと笑うて取合はず。じやうだんも時による、本氣で聞くに、

人を馬鹿にするならして見よ、われにも、おもはくがあるど、
 見幕するどく叱りつけ、れば、まつびら御免おそばせ、實の
 處、お藤さんは、お家からお暇がたまして後、しばらくは、伯父
 さんの處に居られました、が、伯父夫婦と云ふは御存じの通
 りのよくない人で、それは、くゝひどい目にこきつかう末金
 にこまる事があつて、龍神へといふのを、お藤さんが血の涙
 をこぼして、それだけは許してと承知なさらぬので、どうく
 前借にて國府の宿屋へ女中に出したと申すことでござり
 ますと云ふして、暇が出たわけはと問へば、それはわたくし
 にも分りませぬが、邪推いたしますればと云ひ、さいて俄に
 口をついひ、決して他言はせぬから、その邪推はないてくれ

よど云へば若様も大抵御察しでござりませうがど前置
きて話を聞くにわが多少疑ひしごとと全く符合しぬ母
は我に玉子をと思ひ込み親類中の内談もほいどのひた
れどわが藤子に意あるを知りて家に置きはいつまでも
邪魔物間達のなき内に遠ざけなば心の移ることもやどあ
さはかにも思ひどり脊に腹はかへられずともやど鬼
にし罪もどがもなきにたよる所なしと知りながら世に
も可憐なる少女をば家より出し玉へるなり許るさせ玉へ
母上藤子さらばわれもまた去らむ藤子死なばわれもまた
死なむ親の子なればわが氣質は知らせ玉ふべき筈なるに
藤子の外に心移すべき薄情男どおぼし玉へるもうらめし

況んやわが藤子にたつる心中をたい若氣の出来心どのみ
速了したまへるもくやしや
若様も罪作りですよお立ちになつてから後と申すものは
お藤さんまるで氣抜けがしたやうでぼんやり立つての
空をながめて見たりうつかい灰に福井綾太郎ど若様の
名前をかいて人に見付けられて眞赤な顔して言ひわけす
るなどは若様しほらしいぢやありませんか若様があまり
おやさしすぎるものですからお藤さんが首つたけにおな
んなすつたのも無理はありませんは若さまもまむざら憎
くうはござりますまいは、思ひ思つた中ならば粹をき
かしてお添はせあそばすが親御の慈悲と申すものだつて

さうざやございませんか若様ど、かぎや、我れ、いまは、下女風、
 情の手玉にとられてぐらの音も出でず、からかひ半分の親
 切でかしも今はうれしく親がせめてこれだけさばけ居ら
 ばと涙なり。
 兩親の慈悲深き故郷の家庭も今は鬼の住家とのみ思はれ
 ぬ。國府の宿屋といふのをたよりに、心も空にあくがれ出で
 て、奈良の方へと稱して、國府にたづね行きしに、すゝけたる
 小驛の家はづれに一軒の旅店あり。他に旅店なければ、この
 家なるべしと思ひ定めて立ち入るに見掛けに似合はず可
 成りひろき旅館なり。廊下をいくたびも廻りて、櫓子段を上
 り、二間經て、六疊の一室に入る。この二階の建物は、このころ

かてつぎたるものど見えて、材木なほ新たなり。この室には、
 床つき居りて、このあたりの村夫子の作と覺しき詩の書き
 ぶりも拙き一軸の掛物かゝれり。二方あけはなしにて、風通
 りよく、南は田に面し、金剛山欄干を抽いて青し。日はなほ未
 だ落ちざれど、時刻は、早や七時に近く、鎮守の森のかげ三四
 町ばかり長く地に曳きて、その末がこの樓の障子の半はに
 及びぬ。さて案内せし者、茶と菓子とを持來りしもの、浴衣も
 て來て、風品に案内せしものと、それく女中が入りかはり
 たれど、藤子は影だにも見えず、されど、在來の經驗によるに、
 飯の給仕には、その旅店にて、尤もすぐれて姿よきものが來
 るためしなれば、われはなほ一縷の望みをつなぎて待ちけ

るに、夕飯を^〇持て^〇来し^〇は、果して^〇藤子^〇なり。我を見て^〇飛びたつ^〇
ばかり驚きて、^〇ねや、福井の若様、こゝへは^〇どうして^〇、言葉さ^〇
へ^〇あらた^〇まれり。顔は^〇もとのまゝに^〇美しけれど、^〇からだいた^〇
く^〇肥りて、^〇絞りの浴衣に、^〇數寄屋の前垂^〇かけたる^〇さまは、^〇また
も^〇どの藤子^〇に^〇あらず、^〇わづか^〇一年の^〇間^〇に^〇かく^〇ま^〇でも^〇變は^〇れ
ば、^〇かはる^〇もの^〇かと、^〇われは^〇まづ^〇心に^〇泣き^〇つ。
何處へ^〇おで^〇まし^〇になり^〇ますと^〇問は^〇れて、^〇お前に^〇逢に^〇來た^〇と
云へば、^〇それは^〇有難^〇う^〇さまと^〇て、^〇打ち笑^〇ふ^〇さま、^〇思ひ^〇の外^〇に^〇平
氣^〇なり、^〇しみ^〇く^〇話^〇し^〇する^〇に^〇酒^〇なく^〇て^〇は^〇と^〇て^〇酒^〇を^〇とり^〇よ^〇せ、
飲^〇め^〇ぬ^〇口^〇ど^〇は^〇思^〇ひ^〇な^〇が^〇ら^〇も^〇ま^〇づ^〇ひ^〇ど^〇く^〇ち^〇献^〇せ^〇ば^〇こ^〇れ^〇も^〇思
ひ^〇の外^〇、^〇快^〇く^〇飲^〇み^〇干^〇す^〇な^〇ど^〇も^〇どの^〇藤子^〇ど^〇は^〇ら^〇つ^〇て^〇變^〇は^〇れ^〇る

仕^〇打^〇なり、^〇何時^〇の^〇間^〇に^〇飲^〇ひ^〇こ^〇と^〇を^〇覺^〇ひ^〇し^〇が^〇い^〇ぶ^〇か^〇れ^〇ば、^〇酒
が^〇の^〇め^〇なく^〇て^〇は^〇此^〇の^〇商^〇賣^〇は^〇出^〇來^〇ま^〇せ^〇ぬ^〇と^〇云^〇ふ。此^〇の^〇商^〇賣^〇す
る^〇や^〇う^〇に^〇は^〇誰^〇が^〇し^〇た、^〇許^〇る^〇して^〇吳^〇れ^〇よ、^〇藤^〇そ^〇な^〇た^〇も、^〇我^〇母^〇に^〇恨
み^〇が^〇あ^〇ら^〇う、^〇我^〇も^〇あ^〇る^〇と^〇同^〇情^〇を^〇求^〇む^〇れ^〇ば、^〇あ^〇ら^〇勿^〇体^〇な^〇い^〇せ^〇め
て^〇萬^〇分^〇一^〇の^〇御^〇恩^〇返^〇し^〇に^〇は、^〇私^〇が^〇御^〇家^〇を^〇遠^〇ざ^〇か^〇る^〇よ^〇り^〇外^〇に^〇は
道^〇は^〇こ^〇ざ^〇り^〇ま^〇せ^〇ぬ、^〇ど^〇う^〇ぞ^〇玉^〇子^〇さ^〇ま^〇と^〇行^〇末^〇久^〇し^〇く^〇と^〇は、^〇竟^〇に
隠^〇し^〇て^〇も^〇隠^〇し^〇得^〇ざる^〇藤^〇子^〇の^〇本^〇音^〇な^〇る^〇べし、^〇母^〇は^〇と^〇も^〇あ^〇れ、^〇わ
が^〇心^〇は^〇知^〇り^〇居^〇る^〇べき^〇筈^〇な^〇る^〇に、^〇さ^〇り^〇と^〇は^〇水^〇臭^〇い^〇と^〇う^〇ら^〇め^〇ば、
い^〇や^〇も^〇う^〇若^〇様^〇の^〇お^〇情^〇は、^〇よ^〇く^〇わ^〇か^〇つ^〇て^〇居^〇り^〇ま^〇す^〇る、^〇そ^〇の^〇お^〇情^〇
の^〇お^〇や^〇さ^〇し^〇い^〇の^〇が^〇今^〇で^〇は^〇結^〇句^〇恨^〇み^〇で^〇こ^〇ざ^〇り^〇ま^〇す^〇る^〇と^〇解^〇け
て^〇も^〇解^〇け^〇ぬ^〇風^〇情^〇な^〇り。

藤子のうたがひは、口先ばかりにては言ひとくべくもあらず、たゞ氣長くわが身の行にてと思ひさだめて、この宿屋の料理屋を兼ねたるを幸に、晩方より出懸けて、夜ふけて歸ること多かりしが、さすがに藤子も幼慣染のむかし語りては、覺はず涙に沈むことあり、肥れる腕をさすりて、お家にていたはつてお使おそばされ、た頃は、このやうでありませんで、したがつて、へ參つてから、楷子段の上り下りから、長さ椽側の拭掃除と、朝から晩まで休まるびまもなく、こきつかは、これの通り、手になりまし、たど溜息つくは、例の女氣とあはれなり、いやらしいは、近在の若者人に無理に酒のませ、錢にぞらせ、いやらしいこと言はるゝ度、毎には命がら

まる心地がいたしまする孫まである、村長さんが、禿頭の六十面さげて、毎度来てよ、つばらつて、抱きついて、柿のくさつたやうな息をふきかけられ、かなしいやら、腹がたつやうと、聞けば聞くほど、悲しき藤子の身の上なり。
心はくだくるばかりなれど、今が今とて藤子をたすくる力なければ、たゞ暫らくの辛抱となくさむるのみ、母に藤子をやびもどさむことをすゝめ、たれど、聞き入るる様子なければ、我はたゞ心みだれて、家はよそに、しのびて國府にかよふほどに、今年の夏もつきぬ、われいま大學にありて、規則のゆるやかなるにつけて、みて、休暇の期限つくるも、なほ二週間ばかり滞在せしが、かくては、てしあるべきにあらねば、遂に

て心に描きしし未來の理想はこに全く消滅しぬ藤子が恨
 めしくもあらばまた可愛想にもあらいやらしくもあらば
 またゆかしくもあらり方寸たいかき亂れて今は分別もつか
 ず身は絶望の谷に陥りたれどひとすちに愛慕せし心はな
 ほ未練どなりて残りりその未練は藤子を辨護してよくよ
 くの事情あるべしど一たび思ひ至らば一目なりども逢う
 て見たくなりぬわれはすべての未來の希望を断ちたれど
 藤子其人を断念する事能はず訝しや平生芥溜よりも穢し
 ど嫌らひたる遊廓も藤子が行きたる所とれもへばさまで
 不潔ども思はず藤子を清淨純潔なる少女と信じ切つたる
 我が一念は遊女のためにらせず我藤子に對する行末のす

思ひ切りてまた東京にのぼりぬ
 この冬また歸り來り例の國府の宿屋に赴きけるに藤子居
 らず聞けば一月ばかり前に龍神の方へ移りぬと云ふ嗚呼
 龍神は色を鬻ぐ人間溷濁の港なり一時は氣を失はむばか
 りに驚きたれどあの清淨可憐の藤子がよもやどおもへば
 また疑ひを起しぬ樓の名はと問へばたしか雲州樓と云ひ
 ましたと云ふに全くねのなき事ともれもはれねば今は氣
 も氣ならずそのまゝ旅店を飛び出しぬ
 藤子果して龍神の遊廓に行きしものどすれば藤子はもは
 や純潔の處女にあらず汚れたる女なり我心を思ひも汲ま
 む不實の女なりこの年頃眠られぬ床に藤子の寫真ながめ

べての希望はうせはてたれどもたゞ藤子に逢はずには居
られず我が氣のうせたるもぬけの殻はこの一念に驅られ
て前後の分別もなく車を龍神の遊廓に飛ばしぬ。
千鳥の聲に冬の夜更け初めて茅渚の浦より吹き來る北風
潮氣を帯びて寒く高く小き冬の月空に澄みて寂しけれど
も龍神幾條の花街は紅燈絃歌の聲を照らし浮かれ歩く人
の足音乾きて高し此の遊廓の内にてやゝ上等と見ゆる中
通りには雲州樓と云ふ貸座敷なければその左右の幾條を
彼處此處とたづねゆくにこゝは客種も下りて銅色なる顔
を手拭に埋め土手羅一枚にて寒さうな風もなく鼻歌軽く
歌ひつゝ三人或は五人つれだちて一軒毎に覗き歩くはい

づれも楫を枕の寢覺寂しき浦の泊りの舟夫どおぼし嗚呼
われ色を漁せんどにはあらで二重外套の頭巾目深く被り
て枉げてかゝる賤しきものゝ中に交り泣いて足を人間溷
濁の地に投ずるは如何なる因果ぞや。
漸く看板に雲州樓と記せるさゝやかなる一軒の貸座敷を
見出して暖簾くゞりて覗けば鶉格子の中に襠袴姿はなや
かに六七人ならびて坐はれるが中に格子より二番目の女
はたしかに藤子なるがわれは二重外套の頭巾に目と鼻と
ばかりを出して人目をつゝみたればそれとは氣付ぬ様子
なり袖引かるゝまゝに躍れる胸をしづめて二階に上れば
どの子になされますと問ふ格子より二番目の女と云へば

が胸も聞いてくれよまわい待つて取りすがれば伺は
 目にかゝりませぬとて起ち上るそなたの胸は聞いたがわ
 さあ早くお歸りあそばせ若様御機嫌よう此で一生御
 な片時なりともこのやうな處に居られては御身のけがれ
 の種此の上の御情にはどうぞ御顔を見せて下さります
 すれば世になきものどか諦らめあそばせ御聲を聞くも涙
 は耻も外聞も御座りませぬ藤が魂はどうに死んで居りま
 しいもう此の上は問うて下さりますすな毒くはば皿此の上
 の不運酒に覺えを失ひて夢に身を汚がしたと申すも耻か
 聞のがして下さりませ非道な伯父を持ちましたがこの身
 ど恨めばこれには段々深い仔細が御座りまするがどうぞ
 聞のがして下さりませ非道な伯父を持ちましたがこの身

それならば此の室へとて障子開きて導きたるはわづが三
 疊の小室なり白き巾かけて室一杯に敷き延べたる薄き蒲
 團の後の方高まれるは火閣入れたるにや上方の餘地に
 は丸行燈の光りかすかに二個の枕を照らせりこれはあま
 りなる有様と蒲團の上に打俯してたゞ涙をこぼしぬやが
 て楷子段を登り來る足音障子の外にとまるかと思へば障
 子のひらく音して裾揃きしなやかにえならぬ句と共に入
 り來りてやさしき聲に何と云ひけむ或耳にはしかと聞き
 どれず打俯せるわれをゆすりてどうなされましたと云ふ
 に思ひ切つて仰向けばおやとばかりに呆れて物言はずそ
 なたは此様な所へ來てわれを思ひ死に死なするつもりか

血しほのあ
 すみれは咲きぬ
 うるはしく
 君とあゆみし
 恨にはくや
 庭もせに
 くれなゐの
 君とわか
 かねて
 あやめもわかぬ
 そでの雨
 宵にほのめく
 闇にきえたる
 心地して

今日限りの命

すなく
 つく
 るても
 どもよく
 共に姿は消
 へて居り
 紅の片袖空
 しく我が手
 に残りぬ
 御免あそ
 ばせど一
 聲言ひ



生きて甲斐ある 身ならねど、

はの見えるそめめてわがためをいぐ 涙かや
はや暮れかゝる春の日の庭のみに
ひかりも薄き

身はあさかげとなりはて、
この世になれど相見るも わがいのち
思へば今日のひど日ずや
明日は絶えなむ

かどは葎に とざゝれて
なぐさめむとや花すみれ 身の上を
ほゝるむさまの いとほしや
浮世は鬼の すみかども
まこと我身に 知らでわらふか やよ董
われど共音に 泣けよかし



君とあひ見し
 少女子が、
 死ぬるいまはも
 君を思ひ
 泣きしなきからの
 語れよや。

今のこどくに
 花咲きて、
 にほひを送れ、
 その袖に。

恨をのみて
 わが尸かばねの
 上に咲け。

やよ花すみれ、
 心あらば、
 はかなき戀に
 泣きわびて

恨も共に
 うもるかど
 命かな。

契りし人の
 思いいでい
 来りなば

といごろ日ごろ
 忍びたる

戀い
しきま
いに
よりそ
ひて
おはす
れば

足もどに高く
もえたる舌を
おはすれば

里川やみに
流れゆく



春の夕暮

雲雀の聲は
地にねちて

山もどかすむ
夕暮に

土手のしばふに
よいかいり

少女の袖に
はら／＼と
かたらへば

少女の袖に
しづ心なく
さくら散る

春はかすみ
にうづもれて
野の末に

罪なきことを
かたらへば

望^なき^か抑^も光^明な^きか^か
 天堂地獄の有無こゝに之を問はず魂魄の存没またこゝに
 之を問はずされど人に未來の希望なくむば浮世はいかば
 かり闇黒乾燥なるものそや人の身体は朽つれどもその事
 業は滅せずその名も亦うせず天堂以外人に浮世の明日な
 しとせんや誠に一思せよわれ何の故に世に生れたるかわ
 れ世に生れて如何なる天職を有するか天意茫々測るべか
 らすただ人には活動力あり血は涌き情は熱す人は一生黙
 坐して枯死する能はず必ずや起つて其力と才とを試みざ
 るを得ず其活動力は知らずく人に活動を命ず而して
 何來の聲起て働けよとさやく分に應じ力に應じ一日働

死

一日の勞を休むるに眠を以てし一週の勞を休むるに日曜
 を以てし一生の勞を休むるに死を以てす浮世は勞苦を意
 味す眠なくんは何によりてかその勞を忘れむ人生は憂患
 を意味す死なくんば争でか其の憂を脱せんや眠や死やこ
 れ齊しく静止無感覺無活動の境なり人は常に曰く世の中
 に寝るほど樂なものはないと而して何故に死を恐れ死を
 嫌ふか眠はよく知覺を亡くすといへども明日を待てまた
 覺む明日とは未來なり希望なり光明なり人一度死すれば
 また此の世に歸り來らず然れども死果して未來なきか希

け○ば○一○日○の○務○を○盡○く○し○た○る○心○地○し○一○生○働○け○ば○一○生○の○職○を○
終○へ○た○る○心○地○す○人○生○觀○な○ど○と○名○を○付○け○て○考○へ○込○め○は○果○も○
な○け○れ○ど○簡○單○に○解○釋○す○れ○ば○人○生○は○畢○竟○勞○働○の○謂○に○外○な○か○
ら○ず○飢○え○て○食○物○の○味○を○知○り○疲○れ○て○休○息○の○味○を○知○る○汗○を○流○
し○血○を○流○し○て○こゝに一日の勤を盡くしたりと自覺したる
ものにして始めて眠の神の寵あり一生の事また此の如し
夜半泣いて麴包食ふものにあらずむば神の有難さを知ら
ずかの金殿玉樓に醉生夢死する長袖者流いつくんぞ死の
味を知らむや

夕を知らざる蜉蝣も一生なれば春秋を知らざる蟪蛄も一
生なり鶴の千年龜の萬年も亦一生なり迷ふものは百年も

短○く○悟○れ○は○刹○那○も○亦○長○し○人○生○の○長○短○の○知○覺○は○年○數○の○多○少○
よ○り○も○寧○ろ○事○業○の○多○少○に○由○る○即○ち○活○動○力○を○費○や○し○た○る○の○
多○少○に○由○る○試○に○蚊○と○い○ふ○微○蟲○を○見○よ○そ○の○人○の○耳○邊○に○近○く○
時○は○ぶ○ん○と○い○ふ○音○あり○俗○に○之○を○蚊○の○鳴○聲○と○云○へ○ど○ま○こ○と○
は○鳴○く○に○あ○ら○ず○し○て○そ○の○羽○音○な○り○今○實○験○せ○る○所○を○さ○く○に○
蚊○は○一○秒○時○間○に○そ○の○羽○を○震○ひ○動○か○す○こ○と○百○四○十○回○な○り○一○
秒○は○人○が○一○た○び○息○す○る○時○間○に○も○足○ら○ず○而○し○て○蚊○は○百○四○十○
回○の○活○動○を○な○す○さ○す○れ○ば○一○分○間○に○は○八○千○四○百○回○の○活○動○あ○
り○十○分○間○に○は○八○萬○四○千○回○の○動○活○あり○其○活○動○の○數○も○亦○多○か○
ら○ず○や○天○上○の○一○年○は○人○間○の○一○日○人○間○の○一○日○ま○た○蚊○の○數○年○
に○相○應○す○べ○し○夏○の○初○め○に○生○れ○て○秋○の○初○め○に○死○す○る○蚊○の○一○

するもの罪過を悔いて自刃するもの慚憤の餘りに自刃す
 るものこれたゞ浮世の苦を知る、未だ眞に死の價値を知る
 ものど云ふべからず、生よく事業を成し、死また能く事業を
 成す、生中希望あり、身後まゝ希望なくんばあらず、仇敵の娘
 なれば、この世では添ふこと叶はねど、親と一所でないとい
 ふ誠を見せなば、未來は夫婦、蓮臺の半座を分たんの義峯
 の詞に、滿腔の希望を抱きて、父が毒刃に罹りし矢口の渡し
 の頓兵衛が娘が最期は如何ばかり幸福なりし一死がや、誠
 をつくさぬ女に添はんよりはむしろ信を守りて橋下に溺
 死せし尾生の一死あながち痴といふべからずよしやし
 いみ川の水汲んで飲む人あらずとも、小春治兵衛が心中の

生人より見れば短かなるが如し、されども蚊に在ては、大に
 長かるべし。一夏九十日の間、幾んど人の想像も及ばぬ多く
 の活動をなせばなり、人生眞の意義は、哲學者の考察と解釋
 とに任かすされど、眞理と云ふも、畢竟するに大なる獨斷の
 み、われは安心立命を、哲學者の見地に求めず、宗教家の見解
 に求めず、天われを苦しむるに生を以てし、われを休むるに
 死を以てす、晝間額に汗を帶ぶるものにして、眠の味甘く、辛
 苦の内、一生を了したる者にして、死の味殊に甘しまして
 死は生に勝る時あるに於てをや。
 人生の意義、徒らに長命を貪るにわらずとすれば、人はたい
 天命を願みて、生死は度外に付すべきなり、彼の窮して自刃

走り口先ばかりは強くして、風雲を叱咤するの概おれども、いざとなれば腰を抜かす畢竟するに死の覺悟なければなり。死は鴻毛よりも軽く、また泰山よりもおもきは、たゞ時に應ずるのみ。通常の人士は死重からずして死を恐る、死の爲めに縛束せらる憫むべし。彼等は生んが爲めに生くるにあらずして死が恐ろしさに面白からぬ生を貪るもの多し。而かも人は百歳なる能はず死に臨みては、五十年も七十年も共に夢のみ安んず其長短を感せんや。悟らざるものは唯生を愛し、悟るものは能く生死の上に超脱す。死生の上に超脱するものにして始めて共に談ずるに足るべく、また大なる事業を遂ぐるに足る通常人の大事に臨みて誤るものは、死の覺悟なければなり。

昔は趙括兵を出さむとせし時、金を賜はりけるに、好地を相して美なる家を建てぬ。これ其志死にあらずして生に在り。死の覺悟なくして、軍陣に臨む、後髪ひかる、心地して、決死の働をなすに由なし。その母、趙王を諫めて括を將とすることなからしめんとしたれど、趙王従はざりしが、果せるかな。趙括は見事秦の爲めに敗られて、趙の四十萬人は坑にせられぬ。括は能く兵を談じて其父も若かざりしが、事に臨んで敗れしものは、死の覺悟なければなり。後世の人士、趙括たらざるもの幾人ぞや。太平の世に、放言大呼して、愚俗を赫すも、生死の巷に望みては、ぐうの音も出でず、大事爲めに誤り、九

伊の功一簣に缺く陋なる哉、虎穴に入らずんば、虎兒を得ず、
 希世の奇功偉績は、たい死を以て買ふを得べきのみ、藺相如
 の璧を奉じて秦に使用するや、彼は己に死を期せり、生還を期
 せざりき、されば秦王、城を交換するに意なきを見るや、忽ち
 璧を取り、己の頭と共に、之を柱に碎かむとす、彼は璧と共に
 碎けむことを甘するなり、秦王その志の奪ふへからざるを
 知りて、また強ひず、相如舍に歸り、ひそかに璧を本國に返へ
 し、然る後に、秦王に見ゆて曰く、秦は古來信を守る國にあら
 ず、璧は已に國に返しぬ、我を殺して甘心せよと、何ぞ其壯な
 るや、秦王も流石にこの決死の士に加ふることを能はざりき、
 決死の力も亦大なる哉、決死の士にしては、じめめて奇功あり、

而してこれ太平の紳士に向つて語るべからず、退いては、浮
 世の苦を脱するに足り、進みては、希望を充すに足る、且つ治
 世と亂世とを問はず、由來、大事は血を以てわがなふべしい
 ま、國家の大任に當る者國のために倒るゝの覺悟あるか、正
 義を唱へ、聖明のために弊事を除かんとするの志士、果して
 能く死を決せるか、怯犬はたい遠く吠ゆ、勇氣なる犬は、直に
 来て、噛み付く、死は樂土に入るの鬮門にして、兼て勇怯を分
 つの試金石なり、少年心事、劍相知とは、古の事、今の志士、豪傑
 の心事は、たい黄金相知る、止んぬる哉、



寶 車

待ちわびたりし 梅の花

今はさかりとなりけり。

とよさかのぼる 朝日子も

かほるばかりの 心地して

道のゆくてを ながむれば

霞は遠く たなびけど

秩父根おろす 北風の

はだへに寒く しみわたる

花のみやこの かたはとり

いとけはしき 坂道に

重荷つみたる 荷車を

ひきなやみたる 男あり

さすがに草鞋は はきたれど

寒さをふせぐ 足袋もなく

まどふ一重の布子さへ

みるめの如く やれはて

脛もかひなも あらはなり

寒さにふるふ 聲あげて

力のかぎり ひく車

右に左に 折れめぐり
上りくつて やうやくに

坂のなかばに 至りけり。
車のあどを 推しつゝも

助けてゆくは 妻ならむ。
かなじ姿に やつるれど

赤みを帯びて ちいれたる
髪をかしらに まきあげて

たばねしさまは 女なり。
年齒もゆかぬ うなむ子も

紅葉の如き 手をのべて

母親と共に立ちならび
同じ姿に 推してゆく。

親子みたりが 前世には
いかばかりなる 業ありて

めぐる因果の 小車を
ひく身の上と なりにけむ。

坂もなかばは 上りたり。

しばらく休め、いざこゝに。

父なる人の ことのはに、

わらべは聲を ふるはせて、

「のう父上よ、許してよ。」

力のかぎり つくせども

よわきかひなを 如何にせむ。

いとゞ寒けき このあした、

わさげにわづか 一椀の

粥をすいりし のみなるに

さびしき風の ふきぬれば

腹の中まで 冷えわたり、

かひなも足も 力なく

眼もくらむ ばかりなり。

やよや母上 さゝてたべ、

わが一生の ねぎごとを。

飢ゑては如何に はげめども、

力はさらに いでぬなり。

かしこの店にて 何にても

腹みたすもの 買ひてむや、

母は涙に むせびつゝ、

「ことわりずかし、その言葉。」

されど太郎よ、察してよ、

親の切なる 心根を、

學の庭にかよふべき

年をもすすでに 過ぎけるに、

貧しき家に そだてられ

苦しきわざに つかはれて、

書をまなばむ 由もなく

いろはも知らぬ 身の上を

かこつ子よりも たらちねの

親甲斐もなき この親の

胸はくだくる ばかりや

我身も元は さむらひの

家に生まれし ものなるに、

つゞく不幸に かくばかり

おちぶれたれど いつかまた

世にうかぶ瀬の なからでや。

聞きもわきてよ、 やよ太郎、

坂をのぼるも 空腹の

思をなすも しぼしずや。

父をたすけて はたらける

むくいに何を 買ひやらむ。

旗か喇叭か 鉄砲か、

支那のいくさの 錦繪か。

この荷を送り といけなば、

かならず買ひて とらすべし、

好める薯も うちそへて。

家路をさせば 夕日影
 西のはやしにい かたぶきぬ
 處もおなじ 坂路に
 今朝の夫婦に あひにけり
 重荷にかへて 荷車の
 上に載せたりら うなる子を。
 げにや玉にも 黄金にも
 くらべむものなき子寶を
 夫婦が肌にい まどひたるまいなれど
 衣はもどのまいなれど

いととばかりに 親と子が
 よびかはす聲も いさましく
 押しつゝゆけば いつしかに
 車は見けず なりにけり
 * * * * *
 古巢をいでし うぐひすの
 なくなる聲に さそはれて
 園より園に うつりゆき
 ひねもす花に うかれしを
 雲よりもるいい 山寺の
 鐘のひいきに れどろきて
 * * * * *

好める品は かひやりつ、
 またも車に のせにけり。
 その載せられし むくいには
 しかど持ちてよ 酒樽を。
 れいと答へし その後は
 かたみに笑ひ どよめきつ、
 遠ざかりゆく 荷車の
 影はかすみにも わかねども、
 なほもわらべが 吹きならす
 喇叭のひびき かすかなり。

わらべは今朝に ひきかへて
 いと見安くも なりにけり。
 心よげなる その笑顔
 右手に錦繪 握りつゝ
 ゆんでに喇叭 とりあげて、
 いと高らかに 鳴らすなり。
 「けはしき坂ぞ、心して
 まろびな落ちそ 車より」
 父のことばに 母もまた
 「今日はたらしし 報いとて

浅間山のひと夜

都の残暑をよそに、碓氷峠のあたりへと思ひたちたれど、輕井澤やよけむ、霧積やよきと、停車場にいたりてもなほまどひしに、れくれて來りし鯉洋は、や輕井澤までの切符を買ひ、荷物もあづけたりといふに、さらばとて輕井澤にものす。こゝは中山道と共にすたれはてたる孤驛なれど、海をぬくこと四千尺にちかく、白雲人の懷をたづねきて、夏を知らぬところなり。四面山を帯びたる高原ひろく見わたすかぎり、尾花招き、女郎花笑へり。菅茅の間に、別荘とは名ばかりなる小屋の點綴せるは、西洋人が避暑のすみかどや、あたらしく

植ゑたりとは見ぬ、並木の多くは老櫻なるが中に、梨、李などの時を同じうして、累々たる實をつけたるが立てる街道をはさみて、鱗次せる家の五十戸には、足らぬ山村のいたうあれたるに、思ひのほかの牛肉うる家ふたつ、洋酒うる家ふたつ、西洋風の玩具うる家ひとつ、洋服の裁縫店みつばかりそなはれるにても、こゝに暑をさくる西洋人のれはさこどは知られつ。旅館ともいふべき旅館は、たゞ二つのみなるが、その一は西洋人のみをやどして、日本人はやどさぬといふに、腹だしく、今まひとつの旅館にゆけば、もはや客を入るべき室なしといふ。霧積にゆかばよかりしを、と悔めば、甲斐なし。時は午の到をすぎたり、せめて午食ばかりにて、も物せ

むとて、むかしの建築のなごり見えていとおほきく、一抱に
あまらむと見ゆる大黒柱のひかりかゝやけるが下にすは
りけるに、宿の女房つくくとわれらを見て、さすがに心苦
しくや思ひけむ座敷を都合せむとて、半時間ばかりまたせ
たるのち、いざたまへとて導きたるは、奥にはなれたる一室
なり。この家にてはこよなき室と見ゆれど、湯どのかはやの
うしろに、新にたてつぎたりとおぼしき平屋にて、となり
は、西洋人の専領せる旅館の二階さ、やかなる庭をへだて
、高くながめは更になきに、こゝろよからず、午食終へても
心おちつかねば、こゝよりは二里あまりの程と聞きつる霧
積の温泉のありさま見て來むとて、荷物はそのまゝにして

いでたつ
草にうもれたるむかしの中山道を、碓氷峠の方へ半里ばか
りのぼりゆけば、輕井澤の驛はや脚底におちて、さながら臥
蠶の如し。こゝは峯のいたゞきなり。十級ばかりの石磴の上
に安置せられたる古社は、追分節にうたはたれる碓氷峠の
権現にや、祠下の力餅うる家に、茶をもとめんとてたちよれ
ば老婆のすこやかなるが、澁茶の外のもてなしに、うらの二
階にてゆるやかに休ませたまへといふに、心すゝまねどの
ぼりて見れば、こは如何に、近く碓氷峠の連山を見下し、遠く
兩毛武總の平野をながむる景色、輕井澤とは眼界をことに
して、とみに目さむる心地す。霧積の温泉のこと問へば、いた

く零落して浴戸はわづかに一戸となれりと云ふ。その里程を問へば、崎嶇たる山阪二里にして遠く、車を通ぜずといふ。時は三時をすぎたり。往復四里あまりの險路、旅の用意なくてはと思ひて歩をかへす。浴を終へて酒を命ず。酒至る。その酒悪くして酔ふに堪へず。忍びて四本ばかり倒して、杯を投じて碁を圍む。二たび戦ひて二たび勝つ。二目かけと云へど、きかず。こたび負けなば二目置かむとて、また局に對す。未だ半ならずして宿の女きたりて杯盤を收む。告ぐるに明旦淺間山にのぼらむことを以てし、導者を雇はんことを囑しけるに、女諾してくさくさのことはなしけるついでに、西洋人は夜よりのぼりかけて朝

早く山頂に日の出を見るものおほしといふに、土地になれざることゝて、そこまでは思ひいたらざりき。闇夜歩み得べき路ならば、これより直に程に上らむ。はやく導者をやどひこよとて、碁はそのまゝにして起つ。われ手をうちて、はじめて都をいでたる心地せりといへば、鯉洋小をどりして輸快と連呼す。時は九時なり。こゝより淺間山の頂まで六里の程なれば、今よりいでたつは早きにすぎむと思ひたれど、はや導者來れりといふに、さらばとて、旅館を出づ。同じ家にやどりしひとり、の學生、同行をもとめければ、一行あはせて四人となりぬ。頃は八月廿二日なり。墨を流せる空に、電光をりくきらめ

ふけぬ山氣空をかすめて月やうやく高く冷光地にしきて
 草露みな玉をついれりかいるほどに火勢滅じければ火に
 添へむとて起ちて枝を折るその音に鯉洋まづさめて起つ
 また一枝を折りしに思ひしよりもるかりしかば力あま
 りて導者の上に倒る導者驚いて起つ時は一時を過ぎたり
 火は露にまかせてまた程に上りぬ
 小淺間のふもとを過ぎて淺間山をよちのぼれば一山また
 樹木なく路は小石の散布せる上をほとんど直上す月はあ
 れども路はくらし導者の提燈をさきにたて、魚貫しての
 ぼるこの山けはしどにはあらねど路の曲折すくなければ
 歩行いとかたし數歩のぼれば喉かわき汗いづ休めば汗忽

ど十歩よりは近づかずわれどいまれば狼もどいまりわれ
 走れば狼もまた走りひとへに我を守るものゝ如くなりし
 が山をいづるときひと聲高く鳴きてわかれゆきぬ思ふに
 よき狼にてその一聲は別をつげたるにやされどそのする
 ぞき一聲我耳にどいるき山岳呼應せし瞬時は氣ぬけ魂う
 ばいれて幾んど起つこと能はざりきなどかたるほどに一
 痕下弦の月さびしげに東山のうへにいぬ
 たける火のあたゝかさ眠を催して鯉洋まづ草上に仰臥
 す幾莖の女郎花彼れが肥えたるからだしかれ花だけは
 残り腰のあたりにまつはれるもあはれなり導者も
 また眠りぬわれ學生なる人と相對して語なし夜はますますい

ち収まり寒氣肌に透り、袷羽織着たる身も、なほ寒戦す。また
のぼれば、直に熱す。一寒一熱のぼるも、苦しく、休むも苦し。小
淺間すでに、脚底に落ちたれど、淺間のいたゞきは、なほ天外
に在り。一行四人時には、相近づき、時には、相遠ざかる。さまで
へだ、らぬ。導者の提燈の光なきまで、にかすめるは、雲のお
かせるにや。霽れし空摸様かはりて、雲しきりに動き、片月弧
にして、あたりは、ほのぐらし。いよゝゝのぼれば、風いよゝゝ
あらく、寒さも加はりて、汗はまたいでず。たゞ喘ぐ聲のみ高
うなりぬ。かくて路右に曲りて、急ならざるかと思へば、足下
は、削下して、そのつく處を見ざるに、風は、うへより吹き、
ふいで、からたや、いもすれば、倒れむとす。危きこと言はんか

かなし。月の忽ちくらくなれるに、願みれば、大鵬翼を張りて、
近く我を搏たむとす。が如きに、たどるきて、睇視すれば、一
帯の黒雲なり。われと相距ること、二三丈に過ぎず。われと共
に、山のぼらむとす。れど、吹れる風のつよきが、たぬの
ぼり得ず。風とたゝかひて、空に動揺す。われいよゝゝのぼれ
ば、凝雲は、遂に脚底にかちぬ。風のや、硫黄の氣を帯び、そめ
たるに、山頂の噴火口も、最早遠からじと思ふ。ほどに、やがて
彌漫たる白雲、山を壓して、下に走る。身その雲中に入れば、硫
氣鼻を衝いて、ほとんど呼吸しがたし。これまことの雲には、
わらで、天風の噴烟を捲きたるせり。路は、東より上り、風
は、西より吹く。噴烟いよゝゝ濃く、息もとまらむばかりなる

に、衆むせびいり、辟易して、歩をかへさむとしたれど、こゝにて下らむも残りねほしどて、勇を鼓してのぼる。手巾にて鼻と口とを掩へど、砂灰なほ口中に入りて嗽々として聲あり。烟の勢つよき時は、地に伏して之を避け、やうすらぐをまちて、たちてゆく。さながら、駱駝の背に、沙漠を通る旅人の風にあひたるがごとし、一起一伏、からうじて頂上に近づけば、路のかたはらに幾多の小孔ありて、烟をはく。試にその口に手をふるれば、微温あり。かくて遂に頂の噴火口に達し、路を左にとれば、風の衝をさけて噴烟また人を襲はず。右は噴火口に、して、一面に烟音せずしてのぼり、そのふかさを知らず。一たび足をあやまらば、奈落に轉落すべく、左は山壁削下し

て急に、白雲みちて、眼界は左右前後、數歩のうちに限られぬ。右は烟、左は雲、雲といふも、もど水蒸氣の凝れる所、火山の烟といふも、まことの烟にはあらで、地下より噴き出す水蒸氣なれば、その色白雲と異ならず。たい硫氣の有無によりて之をわかつ。われら雲烟の中をゆくに、路時にさけて、その底を見ず。人は脆き石塊をふみて、すぐるなどいともすこし。はじめ噴火口を一周せむと思ひたれど、何のながめもなき雲烟の中をゆかむも趣なければどて、足をかへす。雲烟の中もさすがに明らかになりたるは、夜の全く明けはなれたるにや。一呼して噴烟の散布せる舊路を取りて下れば、日は既に東山のいたゞきに高し。導者頂をかへりみて、今朝のごと

く山の荒れたるは、近來嘗て見ざりき。それにも屈せずしてのぼりたまひし御身たちのけなげさよといふ。はじめ山のなかばにいたりし頃、二個の提燈相へだゝりてのぼり來れるを見き。これ例の西洋人の來りのぼれるならむと云ひあへりしに、歸路一人も見ず、思ふに路を塞く噴烟のいみじきに辟易して、歸りたるにやあらむ。噴烟の中を出で、はじめて蘇生のおもひをなし、さきに困頓してのぼりし山壁一呼して走り下り、小淺間の頂と相對する所にいたりて休息するほどに風やゝなきて、噴烟今は直上し、雲とけて、近巒遙峯ことごとく脚下に朝す。この雄偉なる景色をさかなに一瓶の酒を四人の口にわかち、握飯をくらひて、腹をみたせば、勇

氣また生じて、身體もどことくなれるに、放吟の聲と共に雲を蹴て、午前九時には、身は早や足をのぼして旅館の一室によこたはりぬ。



海 嘯

千代のちごりを うちこめて

かたみにかはす 杯の

数さへみたび かさなりて、

ねよどの鐘も ひしくなり。

わが手にすがれ、 わざも子よ、

いづも八重垣 つまごめに

作れるむろに いでたちて

語りあかさむ、 夜もすがら。

うたげの筵 あとにして、

今は人目の 關もなし。

蘭燈くらさ ひろのうちは

われらふたりの 世界にて

いざやわざも子、 聞きねかし。

高根の花と よそに見て、

ながくし夜を 泣きあかし

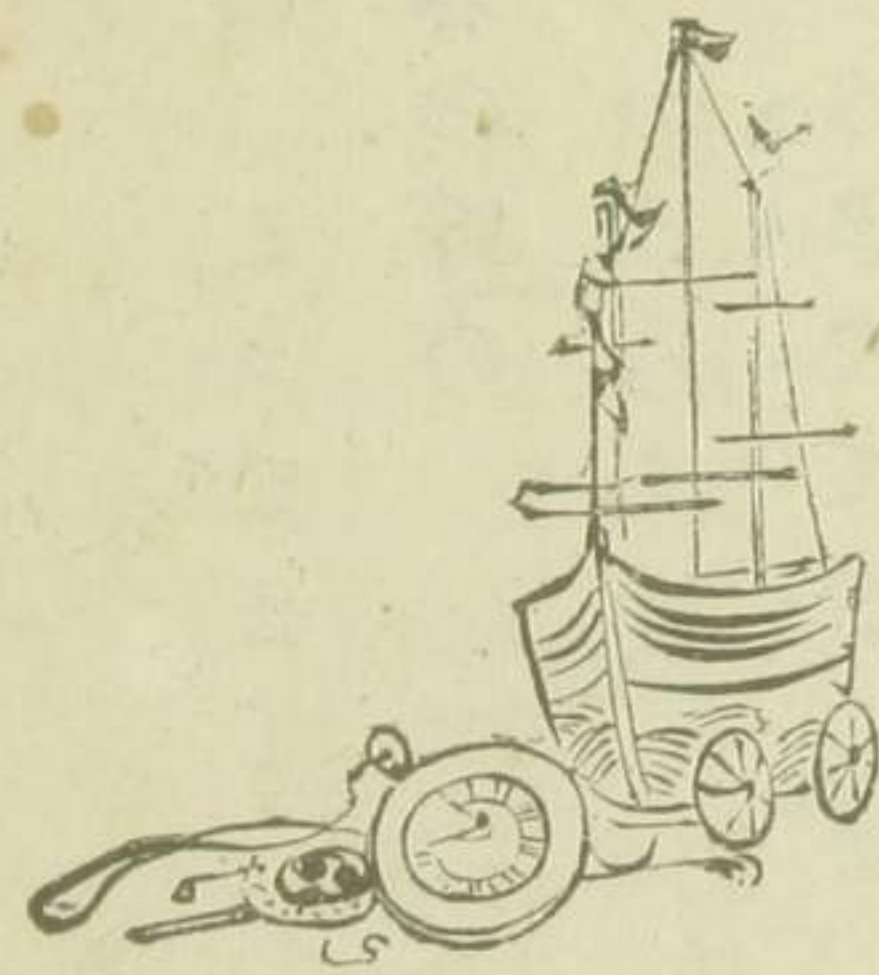
戀ひわびにしも 夢なりや

錦のころも
 好まむまゝに
 身につけよ。
 あやの帯
 見渡すかぎり
 はてもなく
 いたむねつ
 こがねも米も
 溢るなり。
 わがもつ土地は
 山に田に
 つかのまも
 すぐべしや。
 をじかの角の
 なれは我身の
 いのちなり。

身をも家をも
 うちすてい
 切なるほどは
 こひわたりたる
 心根の
 このからだにも
 思ひ出よ。
 なれがやさしき
 顔みれば
 恐びたる
 胸のうらみに
 わすられて
 なりにけり。
 日ごる年ごる
 恐びたる
 日もてりまざる
 心地して
 なりにけり。

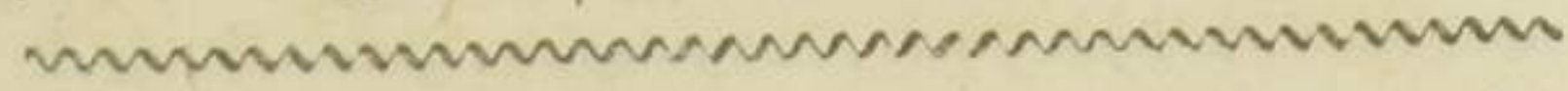
いざと誘ふ 時しもあれ、
 天地も動く ひゞきして、
 山より高き おきつ浪
 たけり狂ひて 寄せにけり。
 手に手をとりて わしれども、
 人より早き 浪の足、
 山さへ水に うづもれて、
 いぬちは海と なりにけり。

桂もたかむ なが爲めに。
 玉もかしがむ なが爲めに。
 今日心を こゝろにて、
 千代も榮えむ、 もろどもに。
 世に蓬萊の 山あらば、
 死なぬくすりも 求めまし。
 こゝろに盡きぬ わが心、
 たぎつ涙や 加たるらむ。
 いざくわぎも とく入りぬ、
 契をこめむ。 にひ室に。

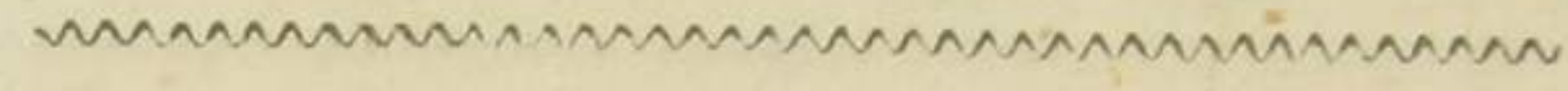


か　か
も　た
て　み
に　に
笑　抱
こ　は　よ　き
の　　そ
世　ふ　め　抱
の　く　も　か
息　め　い　れ
は　ど　い　て
　　も　ど
絶　い
え　む　つ
て　つ　ま
け　ま　し
り　　く

は	あ	あ	つ
れ	ら	は	な
の	し	れ	み
衣	に	榮	の
を	咽	え	去
か	松	た	り
ば	の	い	し
ね	古	荒	さ
ず	根	れ	あ
ふ	を	は	り
た	ど	て	そ
つ	の	し	べ
	ま		に
	く		、
残	ら	野	残
り	に	原	り
け	て	に	け
る		て	り



あ○ひ○吹○駒
 な○と○く○の
 や○聲○も○た
 梢○た○の○て
 の○か○ど○が
 く○け○み
 さ○ き○
 く○嘶○か
 ら○け○春
 散○ぼ○風
 る○ に○
 い○
 な○
 で○
 い○



見○花○木○朽○あ○こ○草○錦○み
 よ○に○の○ち○は○い○葉○ど○ど
 や○と○下○せ○れ○ろ○に○も○見○り
 か○ま○影○よ○き○は○は○ゆ○る○
 な○ら○に○き○空○に○る○る○
 た○む○ づ○な○を○ 春○の○
 の○ な○ を○ の○野○の○
 こ○ い○如○う○か○か○こ
 い○ろ○何○き○た○げ○き○ま
 そ○ろ○に○に○た○ろ○ふ○せ
 ら○ら○せ○せ○ど○に○ふ○ぜ
 よ○よ○せ○む○ど○に○に○て
 り○ む○ む○ て

春駒

雨奇録

人狂ひ人走り人叫び人喘ぎ人争ひ人酔ふ熱鬧糞壤の巷に
 天つをどめ息するがごとく颯颯として脩篁のほかに涼
 味をもらしそめし微風やがて地を捲く疾風となり雲とび
 天撼くかど見れば紫電空を劈き萬雷地におちて俗物のす
 だける金殿玉樓ごとく砕けて鳥有に歸し沛然たる大
 雨盆をかたむけて三千世界の塵垢と俗氛とをあらひ去り
 たるあど空さりげなくすみわたりに月は梧桐の枝にた
 かし。

黄昏一犁の雨に堤上の人花と共にちりゆきてたいない

めなる雨脚相連りてしげく水をわたる華鯨のひいき身に
 しみてそいろに世のはかなきを覺えけるに遠目にもしる
 きひどりのたわやめの紅のもすそ風になぶられて雪の肌
 みえつかくれつ纖手にかざす蛇目傘の上にあだなる花片
 のせていづちゆくむどおぼつかなし。
 日ころ涙にしぼりし袂都のほかの山風にかわかさばやど
 て、烏山羽衣の二子と共に都には烟をのこして船路はるか
 に房州さしていであちけるに、くもりし空、雨をかもして、風
 あらく浪たかし。保田にて舟を下るほど、雨ますますいみじ
 きにあくまでもつらき世の中と、逆旅にいたりてぬれし衣
 を凍えしからだと共に乾しなどす。この日鋸山にのぼらむ

と期せし望たがひて、心のやるかたなきに、窓をひらきての
 りめば、雨脚の外、黒雲峰頂に徂徠して、山怒を帯びてものす
 ぶし、半日たれこめて、晩に杯をあげたれど、烏山風のこゝち
 あしく、羽表船暈につかれて、一座もしめりがちなり、夜に入
 りて窓をたゞ、雨の音、ますくはげし、またく孤燈の下
 に川の字に座して連歌などしける末に、雨も心のありげな
 りけり、と羽衣のうちだすに、しめやかに語らふ窓におどづ
 れて、と上の句つけたれど、はやいをねにけむ、答はなく、い
 びきの聲、雨に和して、高し。

小雨そぼふる春のあした、見はてぬ夢のあどをたづねて、道
 灌山のあたりにもものしけるに、花は早や地に委して、遊人の

あともたぬ茶を乞はむとて、かたへの掛茶屋にやすらへ
 ば、この雨によくこそと、笑顔やさしく、煙草盆もてきたれる
 女の、田舎のきむすめめきたるが、年は廿四五と見ゆるに、髪
 の、烏田なるは、樂天のいひけむ、貧家の女のとつぎがたきに
 や、われの如く、雨に雑沓せぬをよるこびてふりはへて訪ふ
 人もあらざるべければ、さずや花ちりての後はさびしから
 むといへば、げに花のさかりもひときとて、雨をながむる
 横顔に、残りし花びらを、からの風にさそはれて、はら／＼
 落ちりかゝるもあはれなり。
 寒き冬の日、うしろまぶさに降る雨を、阿彌陀傘にうけて、友
 とたゞふたり、ひねもす東海道をのぼりける夕つかた、友の

いばりせむとするに、手凍えてうごかねば、われに洋服のば
たんはづしてくれよと云へど、わがてもうごかず。さらばと
て居酒屋の繩暖簾頭にくいりて、醬油樽に射大臣をまなび、
芋をさかなに、酒をよび、大なる猪口、ひとたびのみ、干せば腸
熱し、ふたいび傾くれば、耳熱し、三たび満引すれば、手足舒び、
四杯、五杯、心ゆたかに、魂とけて、浮世のどほざかれる心地す
るに、さかづき片手に、そとも見わたせば、はやみちわたれる
闇の中に、ほの白き雨をおくりて、心のまゝに吹きある、風
の音、さながら、悪魔のさけぶが如し。
ふりつゝ、いきたる霖雨に、山がはの橋ながれ、ちて、人目のほ
かの戀のかよひ路絶えはてたるに、一日も千秋のれもひと

やかたみに岸にいで、顔を見合せては、胸更にさわぎ、聲を
かけ合せては、肉いど、躍り、羽あらば、どばかりにあこがれ
て、雨にたちつくし、風に泣きつくす、涙ちて、ながれて、みか
さや増すらむ、なかをへだつる浪も、岩にむせぶや。
まづかななる春の夜、わが側をさりて、戀にくるひし、手飼の猫
の、さすがに、久しく、うかれある、さしを、面目なく、思ふらむ、歸
り、來りて、室の一隅に、うづくまり、鬨たかき、さまして、なく、聲
の、罪を謝するが、如きも、いとし、ほらし、ちかく、招きよせて、そ
の、背をなでむとするに、毛いたくうるほひて、花びらさへの
せたり、さては、雨にやど、聴けども、音なし、戸を推せども、それ
とは、見えず、たゞ、何となら、打ちしめりて、淡月、一痕、夢の、ごと

夏のたびちの驟雨に、野中のひとつやをまばしの傘やどり
 とたちよれば、思ひもかけぬうるはしき女、われを座に延き
 て、茶よ、菓子よと、こゝろよくもてなすに、身の顫ふまでうれ
 しく、心ある人にひど夜のやどかりてなるゝもつらし明日
 のふる里と契仲のよみけむ歌のこゝろ今更にしのばれて、
 世はいつまでも雨ふれかしと思へど、甲斐なし、点滴はや收
 るかど見れば、庭の木立に蟬しぐれ聞ゆるそめて、一道の彩虹
 東天に印してたかし。
 十年の事も雨に和して、心頭にいたるためしどりわけて雨
 にしのぼるゝは、故郷のむかしわれまだいとけなかりし頃、
 父われをつれて、宅後の川に舟うけて、下の町までこぎゆき

く老櫻の枝にかいれり。
 浮世を雲にへたてゝ、われ獨り高根の上をやどりける夜半、
 たちまち脚下に電閃し、雷鳴しをりく山を捲いてさかし
 まに吹くあらし雨片を送れるに、下界は雨どおぼゆれど、
 空は霧れわたりに、月はちかく頭上にさほたりこの月世の
 中の人は知らじ、月ひどりわれをてらし、われひどり月を看
 るやがて雷やみ風死にたれど、雲はなほ下界を蓋へりあは
 れ、浮雲の下には、なやみありくるしみあり憂あり、いつはり
 あり、罪あり、けがれあり、雲の上には、光明あり、たのしみあり、
 月あり、またわれあり、なるなり、不取高聲語、恐驚天上人と李白の
 うたひしも、かゝるをりにや。

今宵ひとよの情には、
 笑へ浮世のさびしきに。

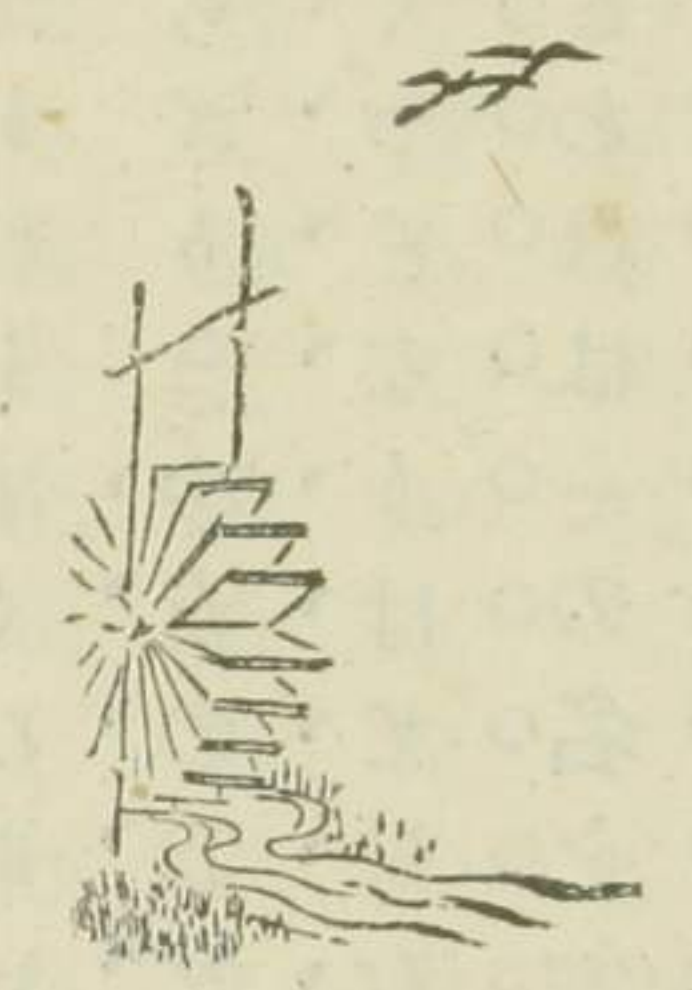
君とわかれひきぬぐは、
 山とやならむ野とやなる。

言はじとすれど、世のつらさ。
 泣かじとすれど、身のゆくへ。

かたみに顔を見合せて
 たい手をとりにしみぐと

今宵の情

るらむ知らず。



小春日和

七十路ばかりなる翁の髪の毛の少しばかり頭の後に残りて、
 長き願鬚雪よりも白さが眼鏡を額に預け吸殻のみ残れる
 雁首斜に口に啣へたるまゝ、兩手を八字形に頰杖つきつゝ、
 餘念もなく讀み入りたる一冊の草子の版本にはあらで寫
 本なるが「飛鳥川」といふ表題の文字まづ表紙にうるはしく
 御家流にゑるしいだされ女子の筆のすさびどねほしくて、
 水莖の跡さへいとやさしげなり。そも、この草紙の中には、何
 をか記せるいざ、此翁の小聲に讀み出すを聞かむ。

*
*
*
*
*
*
*

四十路あまりの長の月日、思ひしのべること、人にあかさむ
 と思ふ心もなければども、この白髪の姿となるまで、人の家に
 嫁入せず、獨身にて世を送りたる事の故由を記し置かば、或
 は庭のをしへのかたはしにもやと思ひつゞけたるこの年
 頃、今ははや六十路の坂を越えて、齒落ち、腰曲り、残る命はい
 くばくもあらじと思ふに、せめて手足のたつうちに、この頃
 の小春日和はくくと暖くて、心地いと快きを幸に、日當り
 よき窓の下に筆とりて、いでや、思ふこといもゑるしかかば
 や。
 妾、この王子の里にすみてより、數ふればはや四十年の歲月
 を經たり。まことや昨日と過ぎ、今日と暮りて、あすか川流れ

高こくこ呼こぼる、
 聲こしづみて、燃こえのこる燈こ火の影かすかなり、
 軒か傾き柱ゆがみたる草の屋に心細くも唯獨り住みなれて
 はさすがに始の如くは物憂からず世を渡るたつきとては、
 かくしからぬ身なれども已むを得ず村のわらべだちに、
 讀書習字、さては裁縫など教ふるに、師匠さまともてはやさ
 れ、衣食には事を缺がずして、今日まで甚しき病の苦もなく、
 都の塵をよそに見て、後やすきものから、またものさびしき
 身の上半ば朽ちたる門のどびらは叩く人なしと知りつい
 も、なほ橘かをる夏の宵は水鷄の鳴く音にははかられ、天地も
 氷る冬の夜には庭の寛さへ音づれず人目も草も枯れはて

子の膝にのせがらくを手にふり鳴らして坊やは好い子と、
 のからこどわり知らぬは袖のしづくにて、玉のやうなる赤
 のは現在の身の上畢竟世には苦なく樂なしと悟りぬるも
 りし夢も樂しかりし夢も共にむなしく覺めては唯殘るも
 しかりきどて今はたいかで心にしかど分くべき苦しか
 なべて夢と消えたる昔の事どもたどひ樂しかりきどて嬉し
 りきその時こそは苦しどもまた切なしども思ひけれどもあ
 のやるせなくて夜もすがら獨り泣き明かしたることもあ
 みれば苦しき思に袖をしぼりたることもありき切なき心
 りてげに人の世は一炊の夢なりけりすぎ越し方をかへり
 て早き月日によどみなく、榮枯得喪またいく内に遷りかは

とけなき時、死別れたれば、その顔だに覺えず、言はむかたなく、悲しきに、母にも、また小學を卒業せし年、死別れたり。その時の事ども、今更語りいで、語るも涙の種なれば、唯一つ忘れがたきは、母君は自ら起たざることを知りて、妾を枕元に呼びよせたまひ、夕を待たぬ身なりとも、せめては梅太郎に嫁をより、またそなたの身のかたづくまでは、生きながらへて、あらむと思へども、定命なれば如何ともしがたし。これよりは世にたより、少なき二人の身の上、唯梅太郎を父とも母とも頼みて、よろづその教へをうけよ。また言ふまでもなけれど、平生常に、いましめたる女の道は、かへすくも踏みな違へそとて、眠るが如く、此世を去らせ給へり。

たる片田舎の一軒家にも、一陽來復して春を迎ふれば、軒場の梅は、いそみて、鶯も來鳴くに、引きかへ、身は埋木となりは、てい、花咲かむ折も、あらず、いつも冬枯の心の心も、自ら萎れ、月と花とに、涙の數々添へて、流れゆくあまたの月日、つもり、て、久しき四十年の浮沈を、唯一場の夢と見て、今もなほ夢の心地になむ。

妾は今かく零落れたれど、氏は春野と云ひて、もとは五千石領したる旗元の家柄、父の名を茂基と云ひ、母の名を雪子といひき。また妾の名は、如何なる親の心なりけむ、土塊にも劣る身の玉子とは、いとはづかしうなむ。

思へば、世に妾ばかり不幸なる人は、多くはあらじ。父には、い

此時兄の年は二十歳、妾の年は十五歳なりけるが、共に孤兒となりて、天にも地にも、血を分けたるは、唯この二人の兄妹、心細くも、悲しくも、かたみに頼み頼まれて、影の如く相伴ひ、まばしも側をはなれざりけり。幸に時といふ老女のいとま、めやかなるが、年久しく我家に仕へ、母親なくなりて後も、何くれとなく身に引きうけて、世話して呉れしかば、家の事は、おほかた打任かせて、妾は兄と共に、なほ學の道をたどりぬ。さはいへ、家の女主人として、妾より外になければ、全く家の面倒見ずといふ譯にも行かず、お時に主人とたてられて、早くも世帯の苦しみを知り、今更に母君に時の流行品をねたりし昔のなつかしく、は、いそ、の、め、ぐ、み、の、露、に、生、ひ、た、ち、し

撫子の身の浮世の荒き風に當り、人の心の頼みがたきを知らぬに、つけ、また子といふものは、持たざれど、そのかみの親の恵みは、身にしみて、辱なく、覚えぬ。當時兄なる人は、さる學校に入りて、西洋の學問をいそしみ、妾はむねと敷島の道にわけ入り、よなく、燈火の光をわかち、つゝ、共につゝ、がもなく、三年四年は、矢よりも早く立ちにけり。ある春の夕の事なりき。兄なる人は、同じ學びの友だちの親睦會にとて、出でゆかれけるが、その夜、更たけなはに、人静まりたる頃、車の音、俄に門の前にと、いまりて、聞もなく、門の戸の開くに、さては兄君の歸られけるにやど、ランプ手にさげて、玄關に出でけるに、兄はいたく酔ひて、物心も覚え

ざるを、兩手に抱きつゝ、いたはり助けて入り來れるは、兄と
 同じ年頃の學生なり。おのれは川田清憲とて、學校にては御
 兄君と御入魂にいたし、色々御世話かける者なるが、今宵宴
 會にていたく酔ひたまひたれば、靜に車にのせて、御送り申
 しぬ。夜もはや更けたれば、これにて失禮仕る。よきに御介抱
 あられよと、聲いと爽やかなり。川田氏のごとは、日頃兄が篤
 實なる勉強家なりとほめそやすに、その名は知り居たれど、
 まのあたり其人を見るは、今日がはじめなれば、兄が平生そ
 の世話になること、さては、今夜の介抱のとなど、一通り禮を
 のべ、茶でもたて侍らむほどに、まばしは休みてゆかせたま
 へどすゝむれど、そのやうな御心配は御無用、おのれは人の

家に居る身なれば、餘り夜をふかしては都合悪し、いざさら
 ばとてたちてゆかるゝには、や十一時を報ずる鐘の音陰に
 こもりていどかすかに、櫻の枝にやすらへる朧月の影もね
 むたげなり。
 飲みすこされし酒の故のみにもあらざるべけれど、年頃た
 えて病氣のなかりし兄の、心地にはかに悪しく、花咲き鳥鳴
 く春の彌生の空に、むなしく垂れこめて、打臥し、枕上らず、
 熱は四十度をこえて、囁言など云はるゝに、あわてふためき
 て、近きあたりに名たゝる醫師を招きて、診察を乞へば肺炎
 といふ病なり、一週もたてば、おこたるべし、歸りて藥を調合
 すべければ、つかひの者おこされよとて、打傾きたる様、更に

見えず。

その歸るさに、事になれたる老女のお時、醫師を送るさまにて、門の外まで行きけるが、やがて歸り來りて、妾を小陰に招き、ひそかに醫師に問ひ侍りしに、容易ならぬ症の由、申されきといふには、はや胸ふたがりて、覺えずよゝと泣き沈みけるに、御心しづめて皆迄聞かせたまへ。容易ならぬ病にはあれど、熱だになくならば、けるりどおこたらむどの事なれば、心強くおはせ。病には藥より看病が大事といふに、お嬢様の弱らせたまひては、何かせむ。長くとも三週間は過ぎざらむほどに、御心はげまして御看病おらせたまへ。御涙ぬぐはせていざ參らむといふに、やうやく涙ぬぐひて、兄の臥せる側に

至れば、熱にうなされて、物も覺えず、口のみ動かして、頻りに嘆言いはれぬ。まめやかなる老女の時の居て、杖ども、柱ども、頼みに思はるれど、かゝるときに、とりわけて、悲しきは身内の一人もなき身の上なり。父母の居まさば、如何に心強からましを、天にも、地にも、血をわけたるは、唯一人の兄、思ひがけもなき大病に、夢かどのみ思はれて、つらくも、かなしくも、死なむばかりの病にかゝらむとも、己れの身ならば、更に苦しからじ。苦しきは看病する身の上になむげに、己れが病にかゝるよ、りも、苦しきは、人の看病なり。思ふまゝになるならば、己れの身の代らましを、熱に正氣を奪はれて、言葉をかはずよしもなき兄の顔をながめ入りて、せめて身内のあらばど、

又も急に悲しくなり、顔をそむけて袖をかざし、聲はたてじとくひしぼる折りしも、音なふ聲の聞き覚えあるに、いそぎて涙ぬぐひて出で、迎ふれば、前夜兄を送りて來られたる川田の君なりけり。

前夜は失禮つかまつりぬ。是迄一日も缺がさぬ春野君の見えざるは、二日酔にはあらずやと、例の爽やかなる聲して問はるゝに、いなとよ、肺炎といふ病にかゝりて、打臥しぬ。昨夜は一方ならぬと言はせも果てず、さづかはしや、熱は如何に、食事は如何に、おかまひなくば、いざ、御病人にあはしてたまはれといふ。熱は四十一二度の間にて、薬より外には、何も物せざれど、別に心配すべきほどにはあらず。むさくるしけれ

ど、おれかまひなくばとて案内す。さて兄の名を呼び、又手を握られけれども、絶えて正氣なかりければ、今は熱の異りつめたる所なり。このまゝ、静かにして置くが宜しからむ。よほど熱のたかきやうなれど、こは肺炎の常なり。もと肺炎は肺病とは違ひて、不治の病にあらず。熱だになくならば、直にこれたるべければ、つとめて氷にて冷させたまへ。御人数の少くて、さずや御不自由ならむ。今は學校よりの歸るさなれば、ひとまづ歸りて、やがてまた參らむ。何の御役にもたつまじけれど、心ばかりの御看病にと云はるゝに、その御志はかたじけなければ、いどかしこし。看病は妾どもにて足りなむ。御身をわづらはせまゐらせては、兄に對してすまらず、中々に心苦

しければなど答へたれど、心の中には世にかくばかり親切なる人もあればあるものかと覺えず涙の溢れぬ。御身、兄さまに對してすまざればわれもまた他所に見過しては、兄さまに對してすまらず。竹馬の友にはあらねど、日頃意氣相投じて、兄弟より親しくおつきあひ申せる朋友の中に、何の遠慮の入るべきなど云はるゝに、此上いなむは、反て無禮にやと思ひて、あくまでもうれしき御志なにごん宜きにとばかり答へければ、その夜來りて、夜もすがら、いも寢ず看病されぬ。

兄なる人は客好きにて、平生交れる人も多く、常に夜更くるまで語りあひて、いとにぎやかなりしが、病氣になられては、

其わりに客の來らず、たまゝ音づるゝ人ありても、病のことは問はるゝか問はれぬかには、はや、妾に向ひて、花の噂、芝居の評判、さては役者は誰をか最負になさるゝなど話しかけらるゝに、世間を知らぬ身の、何と答へむ由もなく、いと困ずるに、正直一方なるお時の、とりし年に遠慮もらせ、御病人のそばにて、烟草を吹かすは固より話などせぬがよしと、醫師の申されしに、あらずやと、あてつけて言ふに、客よりは妾の顔まづ赤らむこと多かりなべて、日頃親しかりし人の、うとくなり度々來られたる人の、足遠くなれるが中に、日頃たえて音づれざりしに、病氣になりて、打てかはりて、しげく音づれたまひしは、かの川田氏のみなりけり。

始めの夜、徹夜して看病したまひ、それより後も度々來りて
夜を明かしたまひ、猶晝の間、幾度となく來られ、熱のやうや
う下るを見て、よろこばせたまへり。一旦物も覺えざりし兄
も、熱下るにつけて、正氣づき、昨日は四十度、今日は三十九度
半とやうく下りゆきて、遂に二週間ばかりにして、兄の病
は全く癒えぬ。
病氣の中に、大方の櫻はちりて、春色はや半ばは去りたれど、
牡丹花のひらきそめたる庭の面に、春に後れたる八重櫻の
猶盛りなるを、肴に、床上げの祝ひせんとして、知己朋友などを
招かれけるに、病氣の時一度も音づれたまはざりし人も見
えて、賓客いと多かりしかど、度々徹夜までせられて、妾一家

の力と頼みまゐらし、川田の君のみは、來まさず、如何なる
御さはりのあるかど、心もどなく、部屋の窓あけて見出す庭
の面に、吹くどしもなき春風に、自ら散る花片の後追うて、ひ
らくと飛びゆく孤蝶の姿のおはれさよ。
兼ねてより繁く申込みのありし縁談の、兄の病氣につれて、
しばしとだねたりしが、病氣の癒ゆるにつれて、また繁くな
りぬ。もとより學問なく、女の道も辨へず、また見目形とても
いたく人に恥とりたる妾の身の、如何にして世の人には知
られたりけむ、いろくつて求めて言ひ入れられし人、い
くそばくといふことを知らず、數ならぬ身をかくまでと思
へば、人の心のうれしからぬにあらねど、天にも地にも唯一

人の血をわけたる兄君と、心細くも相依りて、わけくれし、ばらくも相離れずなく、さめつ、また慰められつ、氣兼ねなく、氣苦勞もなく、かたみに心打明けて、いとむつまじく、樂しき月日を送れる蓬生の宿の生活の忘れがたく、もとより一生兄のかゝりうごゝなるべくもあらねど、せめて兄嫁の來させたまふまでは、たゞ此のまゝにてと、兄君に願ひければ、兄君もまた、そなたは女の年頃をすぎたりといふにあらねば、あながちに急がずともよし、心しづかにさがしなは、心になふ人もあらむとて、おほかたの縁談は、ことわりけり。ことわりたれど、なほ繁かりける縁談の中に、二度ならず、三度ならず、申込のありしは、さる華族の若殿の、年は二十六歳、

學問も心柄も世にすぐれたる人物、財産は三十萬圓の公債に、地所の幾千坪、舅姑はあれど、子に甘くて、人の好き御方、別に小舅小姑は一人もなしなど、めでたき、箇條ならべたてたるが中に、器量を見込みての所望なれば、別に身の拵へは入らず、裸のまゝにて十分と、媒介する人の口のすべりたるに、兄君はや氣に入らせたまはず、われは色を以て妹を賣らず、器量好みする人は頼母しからず、たゞ人は心の持方が大事なり、爵位も財産も何かせむ、そなたは如何にと問はるゝに、妾もしか思ひ侍るとて、この縁談もことわりぬ。縁談はなほ絶えざるが中に、前妻に死別れて一人の子はあれど、年はまだ三十路を二つ越したばかり、さる役所の高等

官にて世の聞ゆるもよく、財産に不足なく、夫にして不足のなき當世の紳士と媒介する人あれば、さる名高き學校の先生の父祖傳來の財産とてはなけれど、月々の俸給あまりありて、年猶ほわかく、將來望みある學者とふれ込む人もあり、また嫁入するが厭ならば、五千圓持參して入聲にならむなど、思ひもつかぬこと言はるゝ人もありたれど、たすきにすれば長く帯にすれば短しとの世のたとへに洩れず、みな兄君の氣に入らで止みぬ。
兄君の常に言はれたるは、幸福といふものは心にありて物にあらざ、世の中の上を望めばはてなく、下を望むも果てなし、足ることを知れば、草の庵も現世の淨土にて、わかぬ心の

煩腦に苦しめば、金殿玉樓もさながら針の席や、また昨日の淵は今日の瀬どかはる世の中に、いかでか金銀財寶の常なるべきよしや、爵位はなくとも、財産はなくとも、心だに誠の道にかなふ人ならば、われは好て妹聲にせむ。そなたもまた喜んで夫とすべきなり。
二親には死別れて、頼みとすべき親類もなく、天にも地にも、血をわけたるは唯一人の妹の、そなたの身を遠くへは離してやりたくなく、財産を分ちて義兄弟を迎へんかとも思へど、小糠三合持つたら、養子に行くなど、たとへもある世の中に碌なもの、は養子には來らざるべし。されば、たい心に慚ふ誠の人を求めて、嫁にはゆくべきなり。

夫婦は一生を共にすべきものなれば、はじめによくその人
 を擇ばざるべからず、互にいやと思ふ人と一生を共にすべ
 くもあらず。世をはかりて、うはべは夫婦にてありたりと
 て、何の樂しきことかあるべき。わが國にいとふべき、離婚の
 多きは、はじめよくその人を擇ばざるに基づくもの多かる
 べし。寫眞のやりとりや見合ひ位にては、その人はわかるべ
 くもあらず。もとより西洋風の自由結婚はいたく厭ふべき
 ものなれど、天保氣質の親だちが禿げたる頭のうちに一人
 合點して、これはと思ひこんだる先入が主となり、いと
 思ふ心のひがめに、痘痕も笑靨も見ゆるまゝに無理に強ひ
 て娘をやるが如きは、或は不縁のもといやならむ。われはよ

ろづ相應しき人をさがすつもりなれど、たゞわれのよしと
 思ふばかりにても行かず。そなたも遠慮なく思ふ所をのべ
 よと、いとねもころにさとさるゝ言葉のはしぐ、いよゝ身
 に浸みて、答ふる言葉よりは、さきに涙のこぼれける。
 ある夜、兄君、他所に出で、行かれけるに、十時頃歸りて、いつ
 になくわらはの顔をじろく、と見たまひけるが、やがて机
 によりて、物の本どもひもときたまひければ、夜もはや更け
 たるに、少しは休ませたまはずやとて、急須もち出でたるに、
 いとにこやかに此方に振りむきたまひて、茶のはしく思ひ
 居たるに、よくこそ氣の付きたれとて、茶飲茶碗とりあげて
 呑み干したまひ、今一杯と云はるゝに、たゞりたる鐵瓶の湯

を急須にうつしてつぎまゐらせけるを、手にとらむとはしたまはず、いとよろこばしげに眺めながら、これ玉や、そなたもよく知りつらむが、多かる我が友達の中にて、まことの人のいふべきは獨り川田清憲氏のみなり。勉強家にて席順は常に一番なれど、學校のこのみ勉強するにあらず、妄りにむだ口はたゝかざれど、理にさどくて、あげつらふ時はその言葉によどみなく、情あつく、義にいさみ、さわやかにしておちつき、威はあれどたけくしからず、然諾を重んじ、外見をかざらず、とりわけてあはれみの心ふかく、自分の身は顧みずして人の爲につくすなど、世にたのもしき人なるが、その實意のはどは、そなたもささきこゝろ我病氣の時にても、知りた

かなるべし。

縁談の申込ありたる人達はみな我が氣に入らず、我義兄弟には至極望ましき人あれど、その人はまた縁談など、申込むべくもあらず、實に果敢なき世の中やと、日頃心を痛めけるが、今日はからず、川田氏にあひて、その心はのめかして見たるに、もとより望む所なれど、たゞ勉強中なれば、かゝることには思ひもよらずと、思ひの外の返事に、もとより唯今といふにあらず、たゞ約束だにあれば、妹の身のかたまるといふものにて、五年十年なりとも心しづかに待つべしといへば、さらば、その時に至りて申込むべし。それまではたゞ君とわれとの心に約束のみして置かむと、案じたより生むがやすく、

隔てのなき書生同士の事とて、何事も無造作にはこびたるに、われはうれしく、今夜は鬼の首どりたる心持ずや。そなたも無論異存なかるべし、いかにか思ふと問はせたまふに、答へむとすれば、言葉俄に胸につかへて、しばしたゆたひければ、兄君はいらちたまひて、この縁談そなたは厭か。學のわざに暇なき兄君の、我身のために、かくまで心を勞したまふかと思へば、うれしくも、またかたじけなくも、はや涙のおつるをどいめもあへず、いたはしや、亡き親の世にいましたまはんには、かゝる俗事の、學問のさまたげにもなるべきことども、心配したまふに及ばで、ひたすら、學の道にいそしみたまはんものと思へば、また亡き親の事まで、思ひい

でられて、涙のひときは溢るゝも云ふ甲斐なき女の身の耻づかしや。兄上様のよしと思はるゝことに、もとより、よろづ兄上さまを仰ぎまつる身の、いかでかことさまに思ふことのはべるべきとばかり、涙のひまに、からうじて、洩れいつる聲音もて、いらへければ、それ聞きて全く安心せしや、今より三年のちの事か、四年のちの事か、しかとは分らねど、さきより人して申込のあるまでは、なほ、これまでの通りの處女の身なり、たゞそなたの行末のことは、この兄の心にこめてあれば、その間はよろづ謹しみ、いそしみて、人の家を治むるに足るだけの資格をそなふべし。もと、この事は、たゞかたみの心の中の約束にして、いまだ朧もてだちての縁談ならね

ば、時の來るまでは、かるくしく披露すべきにあらず、さら
 でだに、世にうるさき人の口、如何にか聞き誤りて、よからぬ
 噂たつるやもは、かられず、もし他より縁談申込む人ありと
 も、たゞ猶四五年は家にありて修業するつもりなればどの
 み云ひて、ことわらむと、あくまでも心をくぼりて、さとした
 まふに、いらへむ言葉はなくて、溢るゝものは、たい涙のみな
 り。
 世にすぐれたる人を所天とたのまむは、げに身にあまりた
 る果報ともいふべきに、まして、あくまでも親切にして、おは
 れみの深き人の心身に取りて、こよなきたよりと思ひて、ふ
 つゝかなる身のなぐさまるゝ由もあれど、すぐれたる人に

は、すぐれたる身ならでは、ふさはしからず、たらはぬを如何
 にせむと思へば、胸はちゝに亂れて、たとひ榮華をうくとも、
 出で、人の家にとつぎて、浮世の仇浪にたゞよはむよりは、
 いづまでも心置きなく、親しきはらからと、共にあらまほし
 く、まゝになるならば、世に老といふことも、死といふことも
 なく、父母もどの如く世にあらせたまひて、妾も老ゆること
 なく、昔のまゝに膝下に侍りてむと思はるゝも、わりなしや。
 わざとかくすべきことにもあらねば、年久しく我家につか
 へて、よろづまめやかに親戚よりも親しくなりて、今は他人
 とも思はれぬ老女の時には、兄君より精しく話してきかさ
 れけるに、いたくよろこびて、もはや五十路の坂を越えて、惜

しからぬ身には侍れど、それうけたまはりて、また命のほしくなりぬ。御器量いへば更なり、御心まで貴婦人としてたらし給はぬこともなき嬢様の行末、いかに榮えたまふらむ。嬢様のかたづきたまふまでは、如何なることありても、死ぬべからざる身の上にはべるなり。さて、いよ／＼御祝言の時には、この婆が一生の思ひ出に在所の田舎躍をお目にかけてまゐらせむ。むさくるしき老婆なりとも、きらひたまふことなく、相變らず御心かけたまひてやどは、や取越し苦勞する詞の底の心を汲むも、亦涙の種なりけり。

ねむられぬ夜を、やうやく明して、茶柱にも心置かれ、空しく窓にうつる鳥の影に、小さき胸のをどりしこと、いかばかり

なりけむ。今は我と我心にとがめられ、二年も、三年も、修業つみて、人並の身となるまでは、ふつゝかなる身の穴にも入りて、人の目にはふれざらむと、祈るもいどくるしかりけり。

花落ち水流れて、春もいつしか暮れぬ。ふりつゝきたる五月雨に、時ならぬかきほの雪むなしく、くだされて、いとゞさびしき夕まぐれに、看病以來たはて来りたまはざりし川田の君、意外にも音づれたまへり。平生の爽快なる氣象には似ず、いとうち萎れて見えさせたまふに、如何なる故にかと、怪しく思ふのみにて、ひとり部屋にどちこもりてありけるに、一時間ばかりたつて、兄君入らせたまひ、こや玉子世にこまりたる事の起りしや。今日川田の来りしは他の事ならずか。

ねて、川田をそねむ人のありけるが、如何にしてか、さきつ日、約束せしことを聞きしりけむ。その人も同じ學友なれど、その人柄好ましからず。いつぞや、君の妹くれぬかど、うちつけにいはれしことありたれど、虫がすかぬ人なれば、誰がやるものかど、はねつけたりき。かゝれば川田をそねむこと、ひときは強くなりて、あしざまに言ひふらし、さきつ日、看病にかこつけて、いふに忍びざる行ありきとさへ、讒言しけるとかや。川田はもとたよりなき身にて、やうやくその郷里の先輩どもより學資をうけて勉強せるなり。さてその同郷出身の先輩どもは、それノ、分に應じて金を出し、すぐれたる同縣の學生をえらびて、之に學資を給しけるが、川田は、やがて、そ

の學生の一人なり。ことに同縣出身の顯官に、北村正春といふ人ありて、いたく川田を信用して、その子だちに見習ひにもとて、その家に置き、て養ひけるなり。さるには、はからずも、こたびの讒言、まことに看病に來りしことありたれば、あざむくにその道を以てすれば、君子もあざむかるゝ世のならば、曹參の母も、その子、人を殺せりと告げらるゝこと三度に及びては、遂に機を下りしとかや。されば、かたく信用したる北村氏をはじめ、諸先輩も、今は川田をうたがひて、怒ること一方ならず。かく嫌疑を蒙りたる上は、先輩だちの恩にそむかざらむとせば、未來長く我家との關係をたちて、その身の潔白を示さるべからず。又我ど約束し一片の信を守らむ

じさまに伏し沈みぬ空には五月雨いよふりしきりて、
 血を吐く時鳥の八千八聲の身にしみてかなしかりける。
 瓜田に履を入れず李下に冠を正さすと云ひけむげにうた
 がはれ易きは男女の間なり平生品行正しきもこの道ばか
 りは思案の外とて人は容易に承知せずされば古歌にも陸
 奥にありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけ
 りと云ひけむ古の恨も思ひやられてほす由もなき濡衣の
 よしや人にははしらるゝとも正しき心正しき行は神こそ
 知らさめおどろの奥にもなほ道ある世の中思ふどちすみ
 なば草の席もなごかつらからむと思へどあたら望みある
 身の花にもさかさすめしきことにかいづらひて一生を

とせばうけし恩義にそむかざるべからずいづれに従ふが
 人の道なるか萬事われに任かしてよろしきやうに教へく
 れよとなりわれも意見あれどそなたはまづ如何にか思ふ
 と思ひもかけぬ言の葉に胸まづふさがりてとみに答えむ
 詞も出でざりければ兄君いらちたまひてすぐに返答せず
 ともしよしく考へ置くべしとて立たむとしたまふ袂
 を押へまたせたまへ兄上さま數にもたらぬ妾が身は如何
 にもなりなむ妾の故を以て正しき人をさすつくべうもあ
 らずと涙ながらにいらへければ兄君はしばし沈吟したま
 ひしがやがてつと身を起して立ち去りたまひぬあどには
 老女の時來りて慰めむとすれどこれも悲みに堪へてや同

誤らせまつらむは、心苦しく、またまことに其人を愛する道
 にもあらず、一旦被りしなき名を、いぐには、これまでの事
 は、唯一時のうれしき夢とあきらめて、ちぎりこども取り消
 すの外あらずと、いさぎよく決心して、妾は今日までもむな
 しく、孤燈を守りぬ。
 かく決心するまでの妾の心の中は、千々に亂れたり、云は
 むも、いまだつくさむ決心して、よりのちも、女心のめいしく、
 雨のふる夜など、そのかみのこと思ひいたして、夜もすがら
 寝もせず、むなしく袂をしぼることもありけり。
 あつく兄上の病をいたはりたまへるを見て、世にたのもし
 き誠心と深く感むけるに、その看病の爲にとて、我家にやど

りたまひしこと、反て疑をうくる種とならむとは、我も人も
 思ひがけきやげに、世の中は、あざなふ繩に似て、禍福の伏す
 る所もどよりは、かり難かり、川田の君も、心苦しく思はれて、
 我身はともかくも、一言の信はそむくべからず、また我身の
 故を以て、正しき貴女の名を汚すべからずと、のたまへど、兄
 上しひて説きす、め、烏鵲風冷かに、赤繩ながく絶ぬ。
 この事さ、かじりて、薔薇はうるはしくても、なほ針あり、あ
 の顔して居ても、もつたが病のいたづら娘、もらはざりしは
 もつかけの幸なりけりと、ひそかにのゝしる人の言の葉、さく
 につけても、いと苦しく、月日は、こゝには照りたまはぬかと、
 恨みしことも、いくそたび中には、また若氣のあやまりは誰

れも免れぬ事雨ふりて地の固まる譬もあればまたくすつ
 べくもあらねど賣物の身の疵は疵なりさるにその疵物を
 いどはずもらひうけむといふ心に免じて承諾せずやなど
 さかしらだちて世話する人あるもいと腹立たしかりけり
 兄君はさすがに思慮ふかくてこの後縁談のことはおくび
 にも出したまはざりしが老女の時は教育なき身の思慮足
 らずこれが祝言のすみしといふにわらず夫とし仰がるゝ
 人は川田の君のみども限らずお嬢様のお顔立ならお心だ
 てなら何處へお出なされても引けをとらるゝをならず早
 くよき旦那さがしておかたづきあそばせやと云はれ人の
 心も知らでつか／＼物な言ひそと覺えず口走りけるが時

を叱りしことはあどにもさきにも唯此時一度のみにて折
 角の心づかひをかくまであら／＼しく言はでもよかりし
 と後にてひそかにくやみぬ
 よしや此世の縁のうすくして一夜のなさけだにかはさず
 とも兄君の許したまひおのれもそれと思ひし人をおきて
 重きが上の小夜衣わがつまならぬつまや重ぬべき夢より
 も仇なる世の中にいづれか長くさめぬものあらむわが思
 ふ人のためには火水の中もいどはじ口善悪なき浮世の義
 理に恩愛のきづなをたちて一生世をよせむ蔭なくあしが
 さのへだりてのみあらむとも思ふ心のかよひ路にはを
 ちこちのわかちもあらずたい心の中に君のおもかげを仰

ぎて此世の夢は結ばむと思ひたつ日の足はやく桑田海ど
かはれる世の中に四十路あまりの榮枯得衰喪を閱みして
頭には霜をおき腰はあづさの弓どまがりても今にかはら
ぬものはこの心のみなり。

二年三年たつほどに兄君は學校を卒業したまひ實業社會
に立ち入りたまひたれど腐敗したる世に心になふ人な
く、樂しきことは少きものから國の爲にと、玄のびて年を経
しがはからざる損害のために家産多く失ひたまひ、風の心
地と、うちふしたまひしが、喉より氣管支にうつり、氣管支よ
り肺に入りて、遂にたゞせたまはず、未だ三十路の坂も越え
ぬ身のむなく、前途の望をもたらしめて、北邙一片の烟と消

えぬ。

さらでだに世にたよりなかりしに、兄に死別れて、今は血を
わかてる人は一人もあらず、いつぞやのなき名は、七十五日
どのたどへにもれず、またく世に忘れしのみか、此身まで
人に忘られて、夢ならでは、うつゝに語らふ人なく、天老い、地
荒れて、すだく虫も諸音にむせびて、秋風とこしなへに冷か
なり。

息絶えたまふ時まで、死期の近づくことは知りたまはず、
むくみを肉のつきたるものと思ひたまひて、のたまへるや
う、日頃心持のよさ、肺病は不治の病なれど、吐血する肺病は、
その場所にて、かたまりて、他の部分に及ばさず、長くなから

ふためし、いと多かり。わが病も吐血する方なれば、或はこのまゝにてかたまるかも知れず。病癒えなば、また、亂雑なる實業社會には入らじ。御身を伴ひて、心のまゝに天下の名勝を尋ね、清風明月を友とし、平生好める筆とりて、天地の美をうつし、文人として後の世に名は残すべしとのたまひし言の葉は、長く耳にのこれど、身は早くも白玉樓中の人となりたまひぬ。また、何時の日にか、筆とりて、胸中限りなき詩思を寫したまふべき。かきのこしたまひし幾卷の遺稿なかくに、かたみこそ今はあだの思ひせられて、心やらむ方なく、やうやく野邊の營をすまして、日毎に清き水を供へつゝ、四十九日に及びけるが、墓場に入る時、ふと認めたる後姿、まがうべ

くもあらず、心の覺あるに、墓前には今さへげしばかりなる香火の立ちのぼれるを見て、人の心のうれしさ、なか／＼に涙のたねとなりて、覺せず墓前にうちふしいも、はかなき昔の夢のあとなりけり。
都の空はすみうくて、時の在所なる此王子村に來りてより、こゝに四十年餘、時も間もなく、彼世の人となりて、あれたる草の舎に、おのれ一人すまへど、身に覺えし讀書、習字、たちぬひのわざなど、村の子供にさづけ、心ある人には、また、生花、茶の湯、さては敷島の道などをしへて、饑ゑもせず、こゝえもせず、今日まで生きのびたれど、最早世にある日は、多からじ。思へば、浮世は長き夢なりけり。さるにて、川田の君は、今は如

何にかなりたまひけむ遠からずして兩親はじめ兄君にお
ひまつりて浮世の夢を語る時あらむと思へばいとうれし
らなむ。

* * * * *

春野玉子記

翁はよみさしてしきりに涙を拭ひけるがまた取りあげて、
そあこゝ拾ひよみしてはこぼれいつる涙更にとゞめもあ
へずかゝりしほどに門外に蹙音して人の歸りくるけはひ
なれば泣顔見られじといそぎて眼をぬぐはむとするに紛
れて讀みし書物はもとの所に置くの違なかりけるにはや
入り來れるは六十路ばかりの媪みじかく白くのこれる髪

をうしろになでつけて綸子の被布長くしなやかに着こな
し下には貝襦の小紋縮緬つけたる身のさまいと氣高し今
日は墓参にとて参りたるに女の足のはかしくしからずい
たらおそなはりてさびな待ちわびたまひけむ許させたま
へと云へばいなとよいつも参る刻限のさはど過ぎたるに
もあらずたい今日は小春日和のわたゝかさに心も自らう
きたち面白き話などうけたまはらむとて例の刻限より早
く参りたるに御留守ときゝて少し失望したれどやがてか
へりたまはむ出でますとき來りたまはむあがりてまたる
ゝやうにどのおことづけなりと女中の申すにおなじみの
中とて遠慮もいたさずお言葉のありしまゝに、おざしきに

通りて待ちけるには、はからずも面白き筆の御すさび拜見して、今日ばかりかなしき覺えたることは、あらず、又心のゆきたることも、あらず、見そなはせ、さらでも脆き老の目に、涙の自からこぼれいでたる恥づかしさよなど云へば、媼はいたく驚きたるさまにて、さては、人に見じとて、ひそかに物し、文の愚痴ばかりつらねたるが、いそぎで出でゆく途端、秘め置くことを忘れは、べりしまゝには、はからずも御身の目に入りしかとばかりにて、皺ばかりなる顔にこそ、ゆふばえは、さいねど、心には、いどいとは、じもみち、自ら色にあらはれて、まばし翁の顔と、かたへなる書とを見くらべて、いどはづかしげに袖うち掩ひたるさま、年は老いても、さすがは女なり。

なり。

茶まゐらせむとにや、急須とりあげ、るが、つめたくして、湯のなきさまなれば、女中よびて湯を入れさせ、茶飲茶碗には、自らつぎて、翁の飲むを見て、おのれも少しばかり飲みつゝ、昨日の兼題は、みなよみたまへりや、歌をよみはじめたまひてより、まだ多くの日もたゝぬに、さては御上達のすみやかさよ、などいふ聲、皺枯れても、何所やらやさしく、鶯なかい、老木の昔のしぼるゝ身のさまなり。

みな咏みて、御添願はむとて、まゐりたれど、今日はもはや歌のことなど申すべくもあらず、早く御身につげまゐらすべきひとくだりの物語こそあれ、いざ、まばし聞かせたまへ

や。さるにても如何にかなりたまひけむと御身のしるされたる川田清憲ぬしは、今もなま無言にておはすなり。學校を出で、いのちは益々立身して世にときめさけるが、御身が一生處女にて終り給ひし如く、彼人も亦一生妻をむかへざれば、世の人々怪みて、そのわけをとへど思ふよしありとのみにて、更に言はず終には今辨慶と噂されつゝ、今にいたれるなりと語り來りて、聲自からうるみつゝ、媼を願ればはや袖を顔にあてゝ打ちふし居たり。

やよ、玉子の君、これよりは我身の懺悔話かへらぬ昔は、水に流し、今のうつゝいにかいさらばひしこの老の身如何やうにもさいなみ給ひて、おかし昔の罪は許させたまへおはれか
くまでに清淨無垢にして、つゆくらき處なき佳人をしてむ
なしく深山の花と散らしめ、道德堅固なる才子を一生男や
もめに虫わかさしめしものは誰の罪にもあらずみなこの
やつがれが身の過なり。
今は本姓にたちかへりて本山正春と申せば、御身も心づきたまはざるべけれど、もとは北村正春と申し、身の上なりと云へば、媼はひときは打ち沈むならむと思の外、頭をもたげて涙をはらひ、さては、御身が北村正春どのにておはしけるか、いたづらにもものしゝ文、御目にどまりて、御心をなやますこと、いと罪ふかし、許させたまへや、何事も我身の運命の

つたなきにて、つゆ御身の罪にはあらぬものをといふに、清
き心の底もくまれて、尊しども尊し。

神ならぬ身の、我もむかしは、一時御身と川田とをうたがひ
たることのはづかしさよ。思へば、そのかみ、川田の學友にて、
しばし我が家にも來りし加藤文之助といふ人の言葉に、あ
ざむかれたることの口惜しさのちにいたりて、はじめて悟
りぬ。今更かたるも、けがらはし。たゞ一言にてそのあらまし
をいへば、われに一人の姪ありて、いとけなき時より育てし
が、いつしか川田に思ひかけて、つけぶみなどしけれど、川田
はもとより堅き身なれば、つゆ取りあはでありけるを、彼の
加藤もとより我が姪に思をかけゝるに、かくと知りて、戀路

の邪魔とて、己れが親友に濡衣させし心のきたなさを、され
ど、加藤も生來の悪人にはあらず、かゝることなせしは、みな
戀といふ魔物のなせしわざなり。

その時は川田御身と關係をたちて我にあやまりけるに、我
もその平生の行にめで、許しけるが、のち我が過を知るに
いたりて、反て我より川田にあやまり、もとの約束のまゝに
せよといひたれど、男にも似合はず、かゝる未練なこと言ひ
たまふかどて、従はず口には、實にかく言へど、あはれや、その
身は一生男やもめにすむしたるなり。

我も強ひむ由なくて、今にいたりけるが、川田はつゆ我を恨
みず、昔の一飯の恩をわすれじとや、今もなほ、我が退隱せる

此片田舎にまでたびくおどづれくるなりどかたる折り
 しも、ドンと一發鉄砲の音ひいきて榎の上に鳴きをりし一
 羽の鶉鳥ひらりと庭におち來れり二人はおどろきて庭の
 面をみかへる折しも下女に伴はれて庭先に來りし一人の
 老人はうちし鉄砲のあるじなるらむ媪と顔みおはせてい
 ぶかしと思ふ氣色の見えけるが忽ち翁と顔みおはせてさ
 てはこいにおはしたるか今日ひねもすかりくらしいさい
 か鳥を穫たれば御身と共に一の鍋に對してこゝろよき御
 話しうけたまはらむとてまゐりたるに例の歌の先生がり
 ゆかれたりとのことにて日はまだ高し今二三羽うち添へ
 むとてこゝまでまゐりたるにゆくりなくもこゝにて御身

に對面したる不思議さよといへば以前の翁はうち笑みて
 不思議と云へばそれに止まらず昔の紅顔は今の白髪とか
 はりたれど川田ぬしよ御身は猶覚えあらむ又玉子ぬしも
 忘れたまふべくもあらざる面影なるべしかく三人がこゝ
 に落ち合ひしは不思議の中の不思議にてまるで小説にあ
 りさうな話なりまづこゝにわがりたまへとて座敷に
 請じて飛鳥川のことさては今迄うはさせしことまでつば
 らにうち語り今は共に色も香もなき老木の身の結婚など
 はおぼさいるべけれどせめて此身の罪ほろぼし御兩人何
 事も我にまかせたまへ思ひたつ日を黄道吉日媒介は此身
 の役久しく聞きませず口にもせざりしがまだ忘れては居

ふりくる丸を ものとせず

すゝめくくと 叫びつゝ

やみにも著き 日の御旗

さゝげてゆくは 誰ならむ

折りしも敵の ながれ玉

あはや横より とびきたり

顔をかすむと 見るほどに

くだけてちりぬ そのまなこ

いさむ心の いきはひに

うけし手創は つゆ知らず

前も同じき

やみの空

たいひとすちに 進みゆく

とりでは遂に 陥りて

勝利々々ど 呼ぶ聲に

旗おしたて

のびあがり

看れども見えぬ 闇の空

その目はいかにと たいされて

さぐれば如何に
はじめて悟る
身の手創
目に残れるは
血潮にて

君にさいげし
このからだ

眼はなごか
をしからむ

命よりけに
尊きは

君のたまへる
御旗なり

命にかへて
まもりたる

御旗はもとの
まいにいて

またくひまに
敵砦を

抜き倒したる
うれしさよ

めぐみも深き
みかどには

あはれとばかり
聞しめし

かたじけなくも
盲目の

士官を宮に
めし給ふ

九重ふかく
はんべりて

見えねどかしこき
君の前

玉の御聲に
思はずも

まに、朽はべ草ざか野南
 世に、ちなてししりすの朝
 つに、はな骨しりし世の奥五
 たつ、てにををみし御の花十
 はか、い色を野忠臣前、後、熱血を賊庭にそ、ぎ、一命を鴻毛にくら
 りか、ぐ香もゆかしき一本の名花空しく深山の奥に
 てし、き心の一輪の花片谷水の流るゝまに
 永くあはれをどいめたる辨内侍げに
 うたはりて永くあはれをどいめたる辨内侍げに

南朝の名花



きみの御稜威ど、もろどもお
 ひかりかいやく、日の御旗、
 花はさらく木、人は武士、
 ほまれは絶えじ、よろづ世に。

まなこなき目に
 涌く涙。

や、才色人にすぐれ、徳操世にまれなるに、一生薄命をきはめて、恨を南山の雲に付したるは、いたはしきことの限りなりけり。

辨内侍は右少辨俊基朝臣の娘なり。後醍醐天皇、北條氏の悪をこらさむとしたまひしに、その謀もれて、俊基朝臣は首謀者のことゝて、關東に捕へられけるが、終に葛原が岡の白露と消えうせぬ。その妻なる人、身の不幸をかこつのみ、浮世を三衣の中にさけぬ。かく父には死別れ、母には棄てられて、よるべなき孤兒の身の上、かなしがりて、俊基朝臣の兄、行氏卿は、辨内侍をその家にむかへとりて、子のごとくいつくしむに、心なぐさめられて、あぢきなき世をすこしけるに、そ

の才徳、いつしか雲の上に聞え、召しいだされて、後醍醐天皇の宮につかへけり。東魚西鳥、一場の夢に歸し、天下は獼猴のごときものにかき亂されて、後醍醐天皇、都をいでさせたまひて、吉野の行宮にうつりたまひしほど、辨内侍、また、従ひまつりて、かしづきたてまつること、いよゝゝ怠らざりけり。或夜、みかど、中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿など、御前に召しいださせたまひ、御酒たまはらむとて、辨内侍に酌とらせたまひけるに、いかゞしけむは、からずも、御土器、おとせば、二片にわれぬ。御けしき、かはりて見えさせたまひければ、内侍、直に、

さかづきのわれて、づいづる雲の上

とよみいでけるにいと興じたまひて、誰か下句つけてよと、
 ねほせさせたまふ宗房卿とりあへず、

ほしのくらゐの光をへばや

とつければみかど御感なめならずいとこゝろよく御
 杯かたむけたまひて夜のあくるまでうたげしたまひきと
 かやげにこの内侍の才の人にすぐれたることこれをもて、
 おしはかるに足りなむ。

かくて御醍醐天皇は御いたつきれもくならせたまひて、つ
 るぎを按じつゝみまかりたまふ御心の中いかにくやしか
 りけむ内侍は怙恃を失ひたる孤兒の身による方なきに、今
 又君に別れまつりて悲歎の涙に昨日と暮れ今日とすこし

けるほどにゆくりなきことこそ起りけれ内侍は才徳のす
 ぐれたるのみならず類稀なる美人にして柳の腰しなやか
 に紅の頬香露したるが如く一たび笑へば吉野の花も色な
 く三五の月も光を失はむばかりなるが賊將高師直いつの
 ほどこか垣間見たりけむ思慕の情いと切にして人目をし
 のぶずりの亂れにみだれ思ひたえなむとばかりを水莖の
 跡によせて幾度か送りけれども心高く操正しき辨内侍い
 かでか逆賊の心になびくべきいたくそのなめげなるを怒
 りて手にだに觸れざりければ丸木橋のそれならでむなし
 くふみかへされて夢魂いたづらに峯の雲に迷ふばかりな
 りけりかゝりしほどに師直ふと思ひつきたることありそ

の知りあひたる女、内侍の叔父なる三位行氏卿のもとに、親しく行きかよひければ、その女して、ひそかに行氏卿の北の方に、切なる思ひを打明して、さて、いはしむるやう、思ふこと、かなへしめたまは、三位殿の位をすゝめ、領地をもあまたつけ侍らむなど、利をもて誘ひければ、北の方、慾に目くれて、之をうべなひぬ。さて内侍に送る文をとゝのへ、梅が枝といふ侍女にもたし、侍、二十人ばかり添へて、吉野の行宮につかはしけり。之の文に、はるかにこそ渡らせたまへ、山里の御すまひ、さこそと思ひやらるゝごとに、袖をこそしぼりあへぬ、御こひしさの、いとせめて、住吉へ詣で侍りしほどに、道のたよりも、然るべければ、あひたてまつらむことを思ひて、河内

國とかや、高安のほとりに知りたる人のさふらふに、参りてこそ、待ちたてまつれ。はかなき世の中の、まして、みだれがはしければ、此度ならでは、いかで相見むなどかきて、その終りに

あひみむと思ふ心をさきたてゝ

袖にしられぬ道芝の露

とありければ、年頃そだてられて、恩あつき叔母の身のかくばかり慕ふ心の切なるに、梅が枝さへ年久しくなれたる女にて、そのいふこと、まめだちて見えければ、いと、なつかしくて、君に奏しけるに、御暇たまはりければ、うれしさ云はむかたなく、女房二人、青侍三人つれて、たちいでぬ。その路に、人あ

また、いであひて、いふやう、北の方は、高安に待ちておはしたれど、やみがたきことありて住吉にゆかせたまへり。されば、遠けれど、かしてまで行きたまへといへば、青侍ども首をうちふり、そは心得ぬことかな、高安までとて、暇たまはりて來りたるものを、いかでかはるゝ住吉までゆかるべきとて、いなみければ、いたく怒りて、その三人を打殺してけり。二人の女房は、たゞわなゝとふるへるのみにて、せむ術を知らず、かの人々が内侍の乗りたる輿を奪ひてゆくまゝに、従ひゆきぬ。内侍は、たゞ鬼にとられたる心地して、輿の中に、ひたなきに泣きつゝ、石川といふ所までゆきしほど、楠正行、吉野の宮にめし、いだされて來りけるが、輿の中に、女の泣聲しき

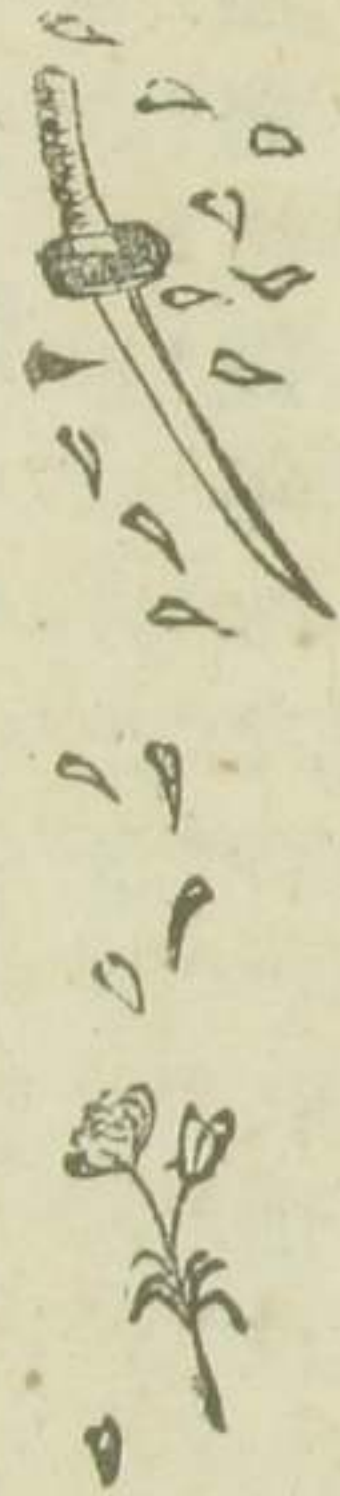
りなれば、いとあやしみ、立ちよりて、その故をとへば、あざむかれて奪ひとられたるなりといふ。正行、やがて、ひきつれたる郎等に命じて、そのくせものどもを捕へしめけるに、大方はいけどりぬ。三人、四人、劍ぬきつれて、斬てかゝりければ、之をば、みな、殺しつ。たすけ得たる内侍と、いけどりたる曲物どもをゐて、吉野の宮にまゐりて、この由、奏しければ、梅が枝を詰問せしめたまふに、師直のたくみなること、わかりぬ。こゝに、曲物どもは、みな、殺し、梅が枝をば、尼となして、京都にかへしけり。かく内侍の危難を免れしは、またく、正行の功なりと、後村上天皇、ふかく、よろこばせたまひ、内侍を正行にたまはらむと、おぼせさせたまひしを、正行は、

とても世にながらふべくもあらぬ身の
かりの契りをいかで結ばむ

といふ一首の歌をたてまつりて、いなみまつりぬ。そは、いさ
ぎよく討死して、君恩に報いむと心定めたる身の、女などに
かゝづらひて、おくれをとらば、此上なき不忠なるべく、また、
一日の思の爲に、百年の身をあやまらしむるに忍びざれば
なり。されば、そのつれなきは、真に、つれなきには、あらで、なか
なかに、情ふかき武夫なりけり。

いくほどもなく、正行は、如意輪堂の扉に、むなしく、無き數に
入る名をどやめて、その身は、果して、四條畷の朝露と消えう
せぬ。あはれ、赤繩結ぶに由なかりきといへども、みかどの許

したまひし夫、危難をすくはれし恩人、いかでか、よそに見す
べきとて、内侍は、後に、龍門の里に、さゝやかなる庵を結
びて、一生、かたく操を守りつゝ、正行の冥福をいのりきと
や。
今時の女は、重きがうへの小夜衣を重ねて、耻とせざるなら
は、しなるに、古の女は、ちぎりもかはさいる人に、だにかくば
かりの操は、たてけるなり。



風流鴨

菅の根の長さ旅路に幾年もたつきに慣れし夜半の空浪の
 浮床ゆふべに立ちて越ゆる山路の奥ふかく戀しき妻どう
 ちつれて共に飛びゆけば千里も一里あさる田の面に霜お
 きてすさぶも寒き夜風に羽うちかはしかたるむつ言のか
 ずつもればすねても見たり恨んでも見たり心にもあらぬ
 夫婦喧嘩よそ目はづかしやと仰げば高き大空に淋びしさ
 うにも獨り澄みわたれる月影の西に傾きゆくすゑは野と
 なれ山のいたいさの白らむにつれてひいく鐘の音はたし
 かにわけ六寝過したりと起き上り正體もなくねむりたる妻

をゆすりて起きぬかく、鐘のなるにどうながせば、名、まわ
 世話しない、いつになく、暖いあさ日和、寢心がよくて、とんと
 目があきませぬ、そのやふにいそがる、なら獨りでおたち
 なされ、私はいやじやと、つぶやくもまだねげけ聲なり、いつ
 も起つ時刻はどうに過ぎたら、かく、すれば後悔さきにた
 ぬ、こともあらう、あれ、い、あ、そこへ人が来た、と、まかせ
 なる、おどし文句、かゝるをも、人は鶴の一聲、といひ、ならはし
 たれど、今よりは、鴨の一聲、と言ひ、かへても、よからむと、我な
 がら得意顔、妻はとびあがりて、あたりきよ、見廻すさ
 まの可笑しさ、あれ、い、い、い、人、おぼえて、いらしやいと、嘴をど
 がら、いで、飛び、か、い、ら、む、と、するに、昨夜の、ち、わ、ぐる、ひ、の、復、習

は御免と飛びたてば妻もをくれじと飛び立ちてあどにな
りつさきになりつあどの雁がさきになつたと里の子供に
謠はれながら霜さゆる朝の風に威勢よく羽のばし鳴く音
を九天の雲に擧げつゝ住みもなれたる海の面へ通ふあは
ひの山の峽ゆかしきゆふの夢を載せたる羽もむつまじ
くならびて飛ひゆく向ふへ圖からずも躍りあがれる網の
目にいづれ憂きには洩れぬ身の上とはなりにける。
これがいそいだばつかりにそなたまでが此の繩目これの
やうな夫につれそなたはよくくの因果とあきらめて何
事もゆるしてくれよと涙と共にわびければ妻は案外に平
氣な顔付雄にも似合はぬめししいよまひ言千度百度くり

かへしたとてなんの役にもたちませぬ網に落ちたとて助
かるまいものでもなければとくと一思案つけるが肝腎じ
たばたすれば猶さらにひどいめ目に逢ふは知れて居るほ
どに果報は寝てまで一命は死んだ真似でもして居ればそ
のうちに必ずたすかることがございませうと度胸すゑ
たる言葉に勵まされておゝそうじやそなたが其氣なら己
れも安心二世を契つた二人が身の上そなたと一所なら死
んでも嬉しいと死ぬるいまはも愚痴たらしくもるともに
死んだ真似して居たりける。
獵夫の手より鳥屋渡りいつか繩目をのがれて盤臺の上に
鳩鴨百舌鳥桃花鳥などと共にならべ置かれければもう逃

けださうかどさ、やけば、まあお待ちなされと妻のどいむ
 るに、なほ死んだ真似して居れば、空陰に曇り、風寒き冬の朝
 の事なり、店外に車を停めて、寒い、寒い、と手袋の、寒い手
 を揉みながら、下り來れる、一の紳士、當世風のいでたちは、山
 高帽子、頭巾の下に埋れ、二重外套の下には、羽二重の羽織ち
 らと見えて、一種えならぬ匂ひをこぼして、どろんどしたる
 目附も、金縁の目鏡に、威光か、いやき、願鬚剃りたる跡蒼く、鼻
 の下の長さに、八字髯いかめしく、年は三十前後と見ゆる男
 盛り、よい鳥がか、いつたど主は平身低頭、たゝへい、どう
 やまひ申せば、紳士は、おちつきすまして、鼻先のあしらひ、や
 がて巻煙草とり出して、さも鷹揚に吹かしながら、かれこれ

と擇びたる末、我等二羽が其氣に入りけむ、この一番をつか
 ひものに、みぼの好き籠に入れて、價格はいくらと、談判、金錢
 の上にうつれば、あるじは、そらさず、始めて、買ひに來りたる
 客に向ひて、毎度御最負にあつかりますから、大勉強いたし
 まして、前置長く、さて、二圓五十錢と、うち出せば、丁度にせ
 よと根切るに、いやもう二價は申しませぬ。ごらうじませよ
 その所とは品物が違ひます。この通り新しうござります
 れば、三週間はたしかに、お請合申しますと、ばた、と我
 等がからだをはたきて、なげだすに、身内の疼を言はむ方な
 く、いつはつべくとも、見ゆざりし談判、二圓三十錢にてやう
 やくまとまり、我れ等は、仕合せよくも諸共に、一の竹籠に入

れられ、紳士の手にわたりて車にのせらるゝに、大事の贈り物なれば、膝の上とは思ひの外、足のうしろにをしこめられつ。がら／＼と威勢よく走りし車たちまち止りて、靴歸りと濁聲高く叫べば、来るは／＼書生が三人、飯焚が一人、仲働が一人、小間使が一人、玄關につらりと並びて、齊しくひれふしたる頭顱の前を、紳士は見下したまひ、通りすぎて奥に入りしが、我等は間もなく車夫の手より仲働の手にわたりて、また紳士の前に出でぬ。長火鉢の側に行儀よく坐はれる一人の女の丸鬘のおくれ毛かきあげながら、恨めしさうに見付くる目元、可愛らしくも、また凄まじかりしが、さきほどよりの詞のつゞきと見えて、この年末のいそがしいのに、人の氣

も知らないで、よくも内を恥明けなさるとみなまで言はせず、御立腹は御尤も千萬、さりながら、拙者もつひ酔ひ倒れまして、友達の家へ一晚とまりましたが、何の不審、これは輕少ながら、あなた様へ歳暮の寸志、どうぞ御機嫌直してと口先輕く、我等を妻君の前へ出せば、人を馬鹿になさいましたと横にむきしが、おかみ大明神さま、この通りお拜みますほどに、もう許るしてやると御詫言があつてもよいでせうと、人の手前、否、鴨の手前も、恥ぢず、疊に伏して、手をあはすなど、馬鹿げた真似すれば、妻君も、怵へされず、ほ／＼とうち笑みて、一體これは何處へおあげなさると問へば、御機嫌が直りて、何より結構、これは實は今の局長におあげやうと存じて、大枚三

圓で買つて参りましたが、いかがでせう、この位なら局長の
 眼目にかけても耻しうはござりますまいかと云ふに、もう
 ござらうだんはよい加減になさいましとまづ言葉を咎め
 でたらめに言ひたる代價とも心付ず、私はまたつがひで四
 圓もするかと思ひましたに、あなたはいつも買物がお上手、
 新しいと見ゆて、雌雄ども生々して居ります。これならば立
 派な歳暮、ほんにこれも御出世の糸口すぐ書生にもたして
 やりませうか。せめてこれほど世間におつくしなさるゝ義
 理の半分も私にたてゝ下さつたならど、なほ愚痴をこぼし
 ながら、玉のやうなる手を延ばし、おのれが膝へとりあげて、
 ためつすがめて、いちくれば、あゝこれ此年暮のいそがしい

のに、何をぐずぐずすると鸚鵡返しにとけても解けぬ夫の
 口振り、かしてまりましたとうはべはおとなしく、つと起ち
 あがりて、局長の所へとて一人の書生にわたせば、木綿の兵
 兒、帯しめ直し、烏打帽戴きて、籠を片手にいそぐと翼なく
 して、局長の家に飛びぬ。
 今の世に借金なきは働なき人と、相場のみまれる官員社會
 の數にもれず果敢なきつるをたよりに奏任一等までとび
 あがりたれど、ぶつそうなる世の中は、いつ地震がするかも
 知れず、上への心配、下への氣兼ねに年中心のやすまるひまも
 ないに、年の暮になつて、憂きつらさはまたひとときは、金貸に
 はせめられて、最はや書き換へも出来ぬ仕儀、さりとて正月

の用意も入れば、歳暮もおくらねばならず、聞けば澤村さまから葡萄酒を下されたことや、あのくらの御世話になつた其の上に、御念の入つた下されもの、何か上げずばなるまいが、あゝ、何を云ふても先に立つものは金と、位は高く、職は重く、門構はいかめしく、出入に威勢よく二人引を驅れど、裏に廻れば火の車、憐を催す内證話耳にしながら、書生の手より主人の前にぬつと出づれば、俄かに愁の眉をひらき、これはいよいよ贈物、幸じや御苦勞ながら、此を持參して、澤村さまへつひ一と走りいてくれよとて、出しやりてのちは、じめて氣がつき、今のは誰れからの贈りもので有つたか、問へば、さうおつしやると、面目ない名札がついて居ました、が、

知らず、くもみやぶつてしまひました。あなた、どういたしませうと、夫婦がさ、やく言葉を笑止ながらも跡にして、外面に出る間もなく、またも澤村とやら云ふ人の前に出だされぬ日頃、一物も腹に入らずして、目も廻らむばかりに覺ゆる、我等の身、今度は籠をひらくかど、喜びし甲斐もなさけなや、主人は唯眺めたばかり、直に名札を取換へて、車を舊藩主の邸へとばし、式臺にぬかづきて、歳暮の寸志、ひとへに御取成しを願ひ奉る。いづれ來春ゆるりとまかりでるでござりませうと、舊恩を忘れざる見せかけは殊勝なれども、あはれや品物は主人公の目には入らず、家令が横取りして、いち早く、あやしき女の許に贈りけるほどに、大晦日も過ぎて、四方

の景色もあら玉の年たちかへり、下戸は雑煮、上戸は酒、しかも屠蘇のはいらないのをと、祝は外所にして、己がじゝ興じささめく世の有様に引きかへて、我等はなほも籠中の楚囚腹は益へり、氣も遠くなり、命もはや二三日とはつゝかぬと思ふ矢先、主の女は、我等を取り出して、これはいゝ鴨、あの人と、一つ鍋で煮てたべたら、さそわいしからうにと言ひつゝ、籠にはさまれたる名札を引き出して、あ、いやらしい禿頭がどすたくゝにひきさき、小形なる自分の名刺を添へて、勿體なくも母親を戀の飛脚、われは御年玉と名目かはりて、お山役者の手に渡りけるが、これも籠をひらかんとはせず、籠をかゝへて華主の屋敷へ伺候し、あけましてお目出どうぞ

さります。どうぞ相變りませず御最負を、此は輕少なから御年玉のしるしまでにと差出せば、取次の書生は商人と見て取り、ひそかに眉をひそめながら、待てくれよとて、歸しやらず、禮もそこゝにして、籠を主人の前に持ち行きけるは、曾てある商人の鼻うかどうけとりて、主人の目玉喰ひたるに懲りたる仕打にや、貰つてもよいとの主人詞に、書生よろこびて去りたるのち、其物越しから、瓜はづれまで、能く似た事と怪しみて、つらく、見るに、羽二重の羽織は紬地とかはり、高帽子も二重外套もなければ、たしかに見覚えのある金縁の目金に八字の髯は、じめに我を買ひたる人と紛ふよし、更にあらざりける。

ひはじめけるやがて家中一同出で來りて、火箸をなげたり
 物干竿をふりまはしたり、あれよくとばかりにて、あわて
 ふためくほごに、お前があまりあわて過ぎたから、鳥をにが
 したと、主人の男うらみ云へば、あのやうに飛びつかれて、ど
 うして周章られずに居られませう、あなたはまた私を助け
 やうともなさらず、平氣で見られて、ほんに思ふほどにもな
 い不人情な御方と、またも夫婦喧嘩はじめけるに可笑しく
 もまた氣の毒にて見すて、去るに忍びざれども、我等も命
 が惜しければ、御苦勞至極と、一禮そこ、命助かりしと思
 へば、衰へし體もにはかに威勢づき、八重の潮路を風に送ら
 れて、歸へるも、嬉しき故郷の海の上、星を洗ふ水音に枕は安

笑止や人間の眼力鈍く、かくどは絶えて知る由もなく、細君
 に見せて、これ見や、何とよい鴨ではないかと云へば、ほんに
 生々しいつぎや買つた鴨によく似て居ります、どれ今晚
 の御酒の肴に、早速料理と庖丁にて結べる繩を切りはなし、
 蓋を開いて手をかくると、しや遅しと飛び上りて見れども
 出づる路なれば、思ひつきたる即座の妙計、呆れ果てたる
 細君の顔を目がけて飛びかゝれば、あつといひつゝ、顔をそ
 むけ障子を明けてかけ出るわれ等、そのあとに従ひて、ひら
 りと高く屋根へ上れば、あるじ夫婦は半狂亂にげた、口
 惜しや書生も來い、女も來い、鳥を捕ふる工夫はないかと驚
 きさわぐ主人夫婦、足下より鳥がたつたとは、此時よりぞ云

からねども、浮世の中をわたり比べては、さすがに阿波の鳴門に風波もなしと、古人の述懐げにや、人間は馬鹿なもの、人間を籠絡することは、我等風情にても、何の苦もなき事ずかし。さるにても、むかし彦根婆とわだ名されたる老婆が時代、おくれの頑固なる意見を吐きしより、彦根を云ふとの諺起りけるが、のろけ半分に下らぬこといふを、人も聞きなば、今よりは、鴨談義と云ふいやな名をつけらるゝかも知れずないしよ。

黄菊白菊 終

明治三十一年十一月廿八日印刷
明治三十一年十二月一日發行

定價金貳拾五錢

作 者 大 町 芳 衛

發 行 者 大 橋 新 太 郎

印 刷 者 熊 田 宜 遜

印 刷 所 熊 田 活 版 所



發 兌 元

東京日本橋區
本町三丁目

博 文 館

枚數改訂

文學士 鹽井雨江君
文學士 武島羽衣君

文學士 大町桂月君合作

美文花紅葉

全壹冊總クローヌ
金文字入洋裝美本
正價金參拾錢
郵稅金六錢

美文の折太刀●墓畔の秋夕●金明水●ゆく水●大風雨●日光山の奥●あだ形見●秋
目次●野の鶴●夢の跡●竹馬の友●露分衣●荒寺●須磨の一夜●笛の音●春の夢●荒
韻文●秋蟬●故郷の花●戀●立秋●野末の伏屋●秋の蟬●落葉●涙の果●詩神
目次●秋葉●天の文●人間亦美文辭なかるべけんや●鹽井雨江、武島
春花●大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騒ぐ。今其錦心繡腸、
吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十編、集つて
此冊に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發
せん。とす。洵に花紅葉を一時に觀るの心地すべく、明治文壇の奇觀
たるを、言を待たず。天下文を好むの士、一本を備へて讀誦に資せ
られんを。

●國民新聞評 鹽井雨武、武島羽衣、大町桂月三文學士の小品又は新
體詩を輯録したるものにして、雨江子の遵勁なる、羽衣子の雅澹な
る、桂月子の華瞻なる、まことに花紅葉を一時に見るの感なきに非
ず。つれづれの好伴侶此上やある。

大和田建樹君著

散文雪月花

全壹冊總クローヌ
金文字入洋裝美本
正價金參拾五錢
郵稅金六錢

其文は、清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は、優雅流滑、奇想天外よ
り來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆
となす。此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し落寞振はざる今日、
文學界中の旗鼓たるものは、此書を措きて他に又た何かある。

●讀賣新聞評 著者の自叙に曰く「此巻は心して撰び集めたるものにあらず、たゞ事
にふれ、折にふれて、書きすさびたるまゝなり。近頃世に出してはさ、勤むる人のあるに
任せて、名を雪月花とつけつ、月花を詠し、雪霜を記するものに多きに因るのみ」是れ
大和田氏、錦繡の心腸を寫し出したる者、中には散文あり、韻文あり、學者一讀して此文
字に淑せよ。

●國民新聞評 謠曲に精通せるをもて、國文上の編著に富むをもて、多くの讀者を有
する大和田氏の散文、韻文各九拾餘を蒐集せるもの、氏の長は守株の弊なきこと、措辭の明
麗流暢なるにあり、銘題の普通に新古に亘れるにあり、韻文の諧和にして音律的あるにあ
り、此點に於ては、思想新警なる新体詩人もまた一等を輸せざるを得ず、要するに最も
廣く國文に興味を有する讀者を歓迎すべき、永夜燈前の好伴侶。

●報知新聞評 雪月花は、大和田建樹氏の韻文と散文を蒐めし、ハンドブックにして、
事にふれ、折にふれて、作られしものながら、文の清楚、歌の優雅、殊に積れて愛でた
きものなり。

谷 信 次君 編

月の光

全壹冊洋裝袖珍
紙數貳百七拾餘頁
正價金拾八錢
郵稅金四錢

天文●地理●歴史●地理●文學●宗教●風俗●歌謠等の各方面より
玲瓏中天に輝く所の月を観察して、之に對する邦人の思想●風習●
故事●美文等を綜合し、而して此一巻寸珍の書に收め、加ふるに幾
多の精書を挿入して、以て文字外の清趣を發揮す。月夜閑に此書を
一讀せば、清涼の氣自ら心胸を洗ひ來らん。

大和田建樹君編

新文林

全壹冊洋裝美本
紙數四百三拾頁
正價金貳拾四錢
郵稅金六錢

大和田先生は能文の士也、本書は先生の遊記、紀行、諷刺、諧謔、論、説、傳、序等を
收む。或は優美婉麗、或は凄涼寂寞、間々挾むに優雅清絶なる長短歌篇を以てす。一部
を購ふて閑窓の下に繙きつゝ、茶と呼ぶに尤も妙ならん。

大和田建樹君著

補増 謠曲通解

全一冊背皮金字入
洋裝大判頗美本
正價金壹圓八拾錢
目方六百元

其文は自然、其意は幽玄にして、神韻の掬すべきは、謠曲にありと
は、大和田先生の持論なり。而して先生が謠曲文學の紹介者として、
獨特の手腕を有せらるゝは、世人皆な之を知り、此書は現存の謠
曲を悉皆網羅して、註釋を附し、妙處を示すこと、丁寧反覆、而して謠
曲を通俗を主とす。一讀を以て神道佛法を學ぶべく、以て名所舊跡を
暗ずべし、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探るべし。

狂言評註 歌曲評註 淨瑠璃評註

全壹冊 正價金十五錢 郵稅六錢
全壹冊 正價金十五錢 郵稅六錢
全壹冊 正價金十五錢 郵稅六錢

大和田建樹君編

日本歌謠類聚

全貳冊背皮金字入
紙數壹冊千百頁餘
正價壹冊金六拾錢
郵稅壹冊金拾六錢

目次

上代曲 大歌 童謡 雜曲 中世曲 神樂歌 催馬樂 雜曲 近古曲 宴曲 小歌 雜曲

近世曲 長唄 端唄 本手組 端手組 裏組 隆子節 弄齊節 戀慕節 投節 古今節 船歌 漁業歌 祝事歌 踊歌 盆歌 子供歌 流行歌 附錄 十二段草子 道し

我國開闢以來二千五百年間の歌謡は載せて本書にあり、時代を以て古今を分ち、種類に依りて雅俗を別にし、一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費されしは、曩きに出でたる謠曲通解の一例に於ても推知するを得べし

大町桂月君譯

東洋之 日露戰爭未來記

全壹冊洋裝美本
正價 金拾八錢
郵稅 金四錢

我が征清の大勝は圖らずも日本男兒の氣魄と陸海軍備の精銳とを各國に知らしめ而して各國の文士に我日本の國威を歌はしむる事となりぬ。此書英人モリス氏が敵を露國として我武勇を歌ひしもの海に陸に連戦連勝向ふ所敵なきの光景宛として目睹するが如し。

